

宜敷候故貴境の用事向篤と御取片付次第にては三月下旬中にも宜敷候故此段爲念申進候也 ○新野日明師よりも別段懇篤の回答被下候間御序に可然禮語一聲御通達可被下候先回引寺號の草案取纏遞送候定て御落手之事と遠察候餘は後便又は面會縷々陳述可申候也

二月二十日

文嘉日薩

草々頓首

編者曰。柏崎妙行寺の開堂供養、明治十年四月十七日より廿八日まで。

(鏡忍寺藏)

山本日諦師宛 明治十年二月廿八日

四七

本月二十日の芳墨同廿七日に拜見早速に小湊法縁の者共呼寄相談候處七月迄に相延候ては總體之人々の疑惑之種にも可相成哉とも過慮候得は兎も角早速に御入山願度旨被申候扱又引寺號の儀は他管内よりと申候事に候得ば先づ他管内の縣廳へ出願し地方廳より内務省伺に相成内務御指令後更福岡縣廳へ願出の順序故仲々一兩月之事には不參候得は先づ御入山後小湊末寺の内方今相續方不相立末寺も有之候得ば千葉縣廳へ寺院地移轉の儀願濟を得て

其上八九月比にも一旦歸郷し其縣廳へ出願の順序に被成候事可然なりと存上候先づ三月廿日過比迄に御出京願度候餘は面會縷々可申陳候 草々頓首

二月廿八日午後

身延日薩

(鏡忍寺藏)

三村日修師宛 明治十年三月十八日

四八

時下春社愈御清寧法喜之至奉賀候陳は過日御回答難有拜讀仕候野生四月一日東京發途北越巡回し六月初に加州へ參り先師御廟<sup>(尊)</sup>仕り舊信者衆に一面し乍不肖も一座之説教をも相勤今生の暇乞を致し六月中下旬比に阪下に出て尊師に拜謁相願諸般とも篤と御直談申度と相心得候夫れとも六月初旬に加州へ御飛錫有之候はゞ先師廟前にて御相談申上度とも相心得候何れとも兩様の内一筆御回答奉願候 ○延山燒後貴府下講中も段々丹誠被下候由も毎々傳聲仕り妙福寺上人始諸寺院衆にも夫々御勸奨被下候得は夫れ是れ一言の謝言も申度とも相心得貴教院の體裁も拜見仕度とも種々見込居候也 ○本月十三日八級生徒圓立と申者<sup>至て勉強</sup>家且學解宜敷 病死し野生頗る落膽し連日落涙のみ野生今日の見込は後進輩の成立を企望候のみな

尺牘

二九七



るに如此生徒の吾を捨て先我善逝するは愁傷に不堪也 先は用事のみ 草々不宣 頓首

三月十八日

文 嘉 再行〔新居圓印〕

○ 小林君は五月比池上入山なり山本氏は本月中小湊入山の事に治定候山本は壹兩日中には必ず着京の積也

〔故冷泉要惇師藏〕

山本日諦師宛

明治十年八月廿七日

四九

本月廿四日之芳墨今廿七日落手拜讀來諭之如殘暑甚敷難堪候へども道體愈無障脩行被成候條爲法不堪雀躍之至候次に野生儀巡回中病障有之候得共諸人祈請之丹誠を以大略全快し先々無障本月十八日歸院候猶更於當地醫療差加保養致居候間御省慮可被下候扱來月五六日比には御出京の由に承り喜居候然し野生儀療養の都合を以本月三十一日東京發程函根温泉へ相趣來月十二三日比歸京之心得に候間御出京の處は御見合せ被下度何れ冷風も相立候はゞ其節御出京被下度事によれば野生より參詣旁小湊登山仕度見込に有之候何れに致面會之上

諸般御相談も申度事有之候故只々面會を相待居候 ○先般は北越迄委細之御書翰投與忝披見仕候御進山無障相濟引續き僧俗一般歸依不淺之由相承乍蔭法喜之至に不堪候故早速祝書呈進致度存居候へ共何分巡回中寸暇無之故終に失略に打過疎漏之段御海容可被下候未だ病後執筆難堪代書を以回答のみ申上度草々如斯候 頓首

八月廿七日

日

薩〔容月盛圓印〕

○ 追而野生病障懇誠に御祈念被下候由眞實感肺し御禮申上候猶隨徒一同へも可然御致聲願上候

編者曰。此の年、柏崎妙行寺開堂供養の後、南越巡回、魚津にて罹病、泊町妙輪寺に病臥、六月十九日より八月八日まで五十日間。〔鏡忍寺藏〕

三村日修師宛

明治十一年一月四日

五〇

新年之嘉祥萬福無窮先以高聖師御康全超歳被遊候段法喜の至奉賀候隨而野生始院内生徒一同瓦全加年仕候間御放慮奉願候陳は昨年數回の御教示難有深奉謝候本年も不相替教諭奉願

尺牘

二九九



候野生不相替懶筆故度、芳墨回答不仕失敬多罪御海容奉願候昨暮の芳墨に教院學科内外の心得方は至極の御説と感服仕候野生の見込も大略尊慮の外無之候乍然此節柄の學業なれば何れとか今一層の工夫も可有之哉と空敷想像仕候尙更此上の尊慮も候はゞ來示奉願候野生病後は何分氣力不相立萬事に付情切思急なるのみにて何等の事功も不相舉深く慚愧仕候其内何にとか致し面謁縷々協議仕度存居候 ○本圀の晋山は仰越の趣に候得共一日も早く相運候方可然と奉存候一日早く晋山は一日早く退藏の事に相成後進輩の進路相立策進上に幾許の進歩と相心得候此事遠謀有之度と野生の見込に候諸本山改撰住職が一宗釐正の正的と相心得候尊意如何 ○大教院と中教院との學科の區別無之ては往々不都合哉にも被察候且下等卒業生徒の教育並資縁等の工夫有之度見込候尊慮如何 ○耀妙事は此節老母歸省亡父の佛事相勤度の事歸郷候四月比又歸京の積に候文靜は慶應義塾へ入學爲致候得共塾風不宜候故更に中村先生の同人社へ入塾爲致候兩三年の後如何の人に相成候哉と焦慮候のみ是純は隨分の人物に候此節師匠大病にて歸省看病致居候三月比歸院の上更に外學校へ傳習に出し度相心得候生徒増殖し教育を以て宗家の大基本と相心得候 ○略要の代價日禎尊々正に落掌仕候眞實傳は昨暮の處は整本無之故廿八部遞送仕候餘り廿二部本月中摺立必ず遞送可

申候間左様御承知奉願候 ○昨暮法門の御下問今に御返事不申上怠慢之罪深奉慚愧候 ○津川聖も昨暮一寸歸京致候得共十四五日の逗留にて直様函館へ出張被成候不相替勇猛堅固奉感伏候 ○吉川聖は身延再築の事に専ら焦慮被成居候此程は餘程壯健に相成候 ○小湊は大に改正に相成り學靜住職の規模相立僧俗とも大歡喜の由也此事妙福寺へ御通聲可被下候 先は雜事のみ陳述候得共年甫の對話と相心得筆に任て草々布字 時下寒甚し爲法萬々自齋是祈 頓首

第一月四日

文

嘉再行

○

本傳寺等有志の御寺院中へ御序に別紙同様年甫之祝詞御一聲奉願候

編者曰。封表、修師朱書「十一月八日着」とあり。消印には（東京、十一年、一、五、つ）（大阪、攝津、一、八、へ）とあれば蓋し誤記ならん。（故冷泉要惇師藏）

山本日誦師宛 明治十一年二月三日

五一

一月十九日の芳墨同二十八日に披見愈御清榮の由法喜の至奉存候陳は引寺號の儀其縣廳へ御出願の由領承仕候右の儀早速宗局へ申遣置候段本省々垂問も候時は速に許可の御指令有



之候様申入置候 ○珍書の儀は龜毛兎角固より不足取の事は無論なれども世の誹謗多如此者哉と申事を御心得迄に申上候のみ且祈禱等の事も世人の誤解と嫉妬との所爲と相心得候鎖の虚言何そ吾靈臺を惱すに足らんや野生も一點も顧慮する所なし此段御省慮可被下候且つ研良へ申付探聞候處誹言の妄作の本據も相分其書類も大内氏へ相示置候是又御省慮可被下候 ○樂善會施金の儀一往尊師へ照會も無之野生一己の見込にて尊師名前にて金貳拾圓喜捨仕候此事は面會の節縷述可仕候 ○耀妙儀寄寓中種々御世話厚奉謝候就ては本人亡父兄の追福料金五拾圓程送度候得共先方宛何れの處に爲替手形可相送哉不相分故至急郵書差出候處書狀と本人と行違故後便迄の書狀にては延日に可相成哉と相心得候故本人へ金五十圓御立替借與被下度其内届所後便の節當地より右金員の爲替手形御送申上返金可申候間此段可然御取斗奉願候先は此事至急相願度如此候 草々不宣 頓首

追て本人事該地用濟次第一日も早く歸京有之候様御鶴聲奉願候 草々

二月三日正午

文 嘉 再行

編者曰。大内氏は青巒居士、明教誌上の事也。樂善會は盲聾啞者の教育救濟の事業を經營、後に東京盲啞學校となる○耀妙は振師。(鏡忍寺藏)

久保田日遙師宛 明治十一年二月十一日

五二

時下餘寒甚敷候得共貴聖師愈清榮御寺務被成候條法喜の至に候扱は今般身延巡回に付別而種々御世話被成下候事祖山保護之志深く令感謝候過日玄妙院參院の節幸便と相心得八の巻四品の宗義抄進贈候清暇通讀被成候はゞ本望の事に候 ○玉澤中教院の事先師遺業紹繼し依然保存段々御盡力被成候事深く隨喜の至に候全先師遺愛の諸賢弟異體同心百事周旋被成候より玉澤之聲譽交代之後更に不相落實に餘山に無之美事野生も此段深感服仕候尙此上とも戮力丹精有之度と願上候就ては日嚴師の處も昨今の新任職なり事務多端眞實手廻兼候邊も不尠哉と察上候故貴聖師住職寺營繕等も大略落成の上は該山へ時々相詰教務寺用分掌補翼被成候はゞ中教院も漸次に實地に相運爲法爲山の此事に不相過哉と深相心得候故此段野生深く貴聖へ相望候諸方教院も次第に盛大に相成候景氣も有之候事此段御注意偏に願上候先は用事のみ草々 時下折角自重是祈

二月十一日

日 薩

○

乍末筆御師範妙蓮寺様へ別紙同様御一聲可被下候 ○貫首日鑑師へ宜敷御傳達願上候今



般申上度も候得共客來中にて執筆致兼候故靜岡へ向け呈進可申上と御話可被下候草々

編者曰。宛名は見壽貴聖師とあり。○日嚴師、後の身延貫首。○妙蓮寺様、江尻町妙蓮寺。○境雲院日遙上人、字見壽、寒松と號す。駿の江尻の人。幼名又藏。江尻妙蓮寺山田禎師に投して剃度。身延西谷にて新説。薩和上に鷄溪精舎に從ふ。こと五年、更に玉澤暉師に從學す。江尻妙泉寺、興津耀海寺、鏡中條長遠寺。本山本覺寺これその董する所、終に玉澤五十一代に晋む。到る處寺門の興隆、永久維持の布設を成就す。教導職取締より、評議員、學務委員、録司に歴任し、小檀林々長となる。身延保存會、祖山學院、皆其の力による。宗會甲部議長。立正大學長。權大僧正。大正五年一月廿二日寂。壽七十有四。(稻田師寫藏)

三村日修師宛

明治十一年二月廿一日

本月十二日の芳墨奉拜見候陳は大中教院の事に付縷々の御見込被仰下千萬難有奉謝候右は今般別に新築と申事に無之本門寺を塔中教院とし下等生徒教育の見込也尤も中等生徒も僅々の生徒故當分は七級生の者は從前の通本院へ殘置可申哉と相心得候也深川宗局は行々本院へ合併引移の見込也 ○眞實傳は壹圓に差上候故御院を賣出しは壹圓十二錢五厘なり十三錢なり適宜に御遣し可被下候貴方の手数等も有之候故右手數料として十貳錢五厘引去候

のみ尤も昨年相送候廿八部の分も壹圓づゝの見込故今般の代價にて昨年過上の分は御引去り可被下候 ○歸宗論云々の件は當地にて上木致候て宜敷事に候は、御遣可被下候明朝の筆工は有之候得共楷書の筆工は無之其故宗義鈔上木には殆と相困候此度肝文鈔の上木は甚不出來に候筆工相替候故也歸宗論申付候時は略要の筆工に可申付候刻料筆工ともゞて壹枚に付大略金八十錢より九十錢迄に候上木より次第板木は其地へ相送可申候 ○小止觀近刻野生未だ承知不致候繙門の末書未出來也出來候は、必ず購求遞送可申上候 ○此節は八の卷宗義鈔上木中なり刻成次第に遞送可申候 ○野生歸郷は始終心頭に相掛居候得共何分教院明兼候故今に不行也何れ四月中に參度と見込候のみ教師の乏闕には頗困迫候野生病餘之微力を以て生徒と伍を作り何分數々論鋒敗北最早野生輩はとて今生の用には不相立と相あきらめ候也 ○桂巖事御案事被下日禎師迄御照會の由芳情深奉謝候未だ懶惰の性は不改候 ○耀妙文靜是純見榮の四人外出故野生晝夜稽古に幹旋仕候此節の事故外學も手の届丈は盡させ度と見込候得共貧囊難繼會計に頗苦心仕候 ○四月會議には御不參の趣無據事と存候乍然尊師等は此より世間に雄飛被成候御身なれば御出席有之度ものと心得候也野生などは最早一生の能事相畢り閑居の身故聊か生徒と餘命相送候也漸次に塵事も減少此段は竊



に慶幸候也先は御返事のみ 草々頓首 二月廿一日

二月廿二日出

文

嘉 再行

編者曰。桂巖、石川惺亮師、守本師の肉弟といふ。○見榮、秋田中教院教師、宇都宮妙正寺主にて寂。此の時大教院助教授。○耀妙は中洲振師。○是純は小林董師。緇門とは緇門崇行録、此時代、世の蒙求と共に檀林教科書たり。

(故冷泉要惺師藏)

三村日修師宛

明治十一年三月十五日

五四

本月六日の芳墨披見愈御清穆至祝交番學校被開八日開筵の由爲法奉祝賀候御序の節日因師へ一祝願上候 ○送書の儀は早速に掛へ申聞候處儘に十四部相詰候趣に被申候故今一往御聞糺奉願候 ○小止觀俄に和泉屋へ申遣兼候生徒所持之品相送候代は三十貳錢に候間御序に送致可被下候 ○學科の處至急變革の儀御申越に候得共此は一大難事にて野生には何分方向不相互痛心痛在候尊師大躰成案被成下候は、野生それに附順し何れとも可致之間御配慮願度候 ○東遊の儀は野生西遊と一般なりとの事甚恐縮仕候左れば困縁未熟彌勒の世可相期歎浩歎の至に候乍然野生は暫て不遠内西遊の思入候 ○此度の會議御不出席にも殘

懷至極法門之不幸不過之候取締有名人の内是非臨席有之度候此度會議他日の結果如何なる美物やと深く相待候 先は用事のみ 草々頓首

三月十三日

文

嘉

〔頭〕 本傳寺上人等一同へ可然御通聲奉願候何れ兩三人も御東上の事と深く御待申上候 普門陀羅尼の兩品宗義鈔は本月中に成刻嚴王普賢は四月中に成刻幸便故御心得迄申上候 〔末〕 早速返書可申上之處兩三日引續説教故寸暇無之乍存遲延御海容可被下候御賢知の通 野生不辯故説教には殆んど困迫仕候何にか宜敷方便御教示奉願候

(故冷泉要惺師藏)

三村日修師宛

明治十一年三月廿一日

五五

追日春陽愈御清穆至祝陳は巡回御説教前嘸々御多忙の御事と奉察上候右に付貴府下よりは取締中今般の大會議に御不出席の由に候得共壹名も臨席無之時は後來自然に不都合の事も可相釀哉とも過慮仕候何んとか差操本傳妙福兩聖人の内御出席有之候様致度奉存候別に野生も貴教院の事に付篤と御示談も申上度事も候故可相成は出頭有之候様尊師へ御勸奨奉願



度候右は有名取締の聖者出京の旨御依頼 草々布字 三月廿一日 頓首

文 嘉

編者曰。封筒は、裏「池上村新居日薩」表「久遠寺方丈三村日脩様親展」消印「東京二〇・二・四」修師朱書「八日於緒根正行寺落手」とあり、即ち本文と時を異にする。この封の中味は今存せず。  
(故冷泉要惇師藏)

山本日誦師宛 明治十一年三月廿二日

二月廿一日の芳墨忝奉拜見候時下御清穆法喜の至に候陳は耀妙事種々御配慮被成下且追善料御立替被下候事深奉謝候如來命御出京の節御返辨可申上候就ては同人讀師迂化に付山口行の儀は至當の事に候得共右に付多分の光蔭空敷消費は此節柄教務至急の折故不宜事と相心得候故尊師の思召を以て一旦參墓の上は早々歸京の旨御申聞可被下候 ○引寺號の事思の外遅延の由也乍然必定相調候事は無疑事と相心得候就ては先回御賢弟學習老歸縣の日野生見込申進候得共其後研良師出京にて小湊表の景況等相承候處餘り御歸山延引に相成候ては不都合哉にも被存候故引寺號の處近々に無之候はゞ一先御歸山之方可然とも相心得候此

事篤と御勘考進退可被下候 ○諸本山會議の事は御出席有之候丈宜敷候得共御不出頭に候とも神保出頭候故後來の管内取締等の事には差支有之間敷と奉存候はは格別御心配に及間敷と相心得候先は用事のみ 匆々布字 頓首

三月廿一日

文 嘉 日 薩

昨日書狀差出候處不圖國名書損候必ず不相届と見込候本日更に申上候草々

○

耀妙への書狀本人住處不分候故地名肩書不致候故先方へ地名御記し御届奉願候

編者曰。讀師、大千院日明上人。山口常妙寺。○學習。本行院日道。字學習。山本誦師の弟子、藤卷氏。山梨縣榮村の産。小松原三十四世。明治四十二年六月廿五日寂。壽六十一。○神保、神保日淳師。  
(鏡忍寺藏)

三村日修師宛 明治十一年六月六日

其後は大に御無音近比道體如何未審貴府下巡回布教は無滞清濟の實況に可有之と深奉隨喜候乍然連日説教に生徒教育相兼御煩勞の御事奉恐察候巡回後の御疲勞も無之哉恐懼之至に



候御序に一音報知奉願候 ○今般津川福田兩教正協議行届妙顯寺寺務授受の目的相濟本月六日發の氣船にて宗内詰山本日觀師を以て日濟師代理とし西京へ差遣し右交代の事務爲取扱候事に相成候尊師々昨暮中に日耀師妙顯寺へ晋山の旨御頼談之通に相運候間此段不取敢御通知申上候尙其地に於て妙德寺聖と篤と御熟議被成下右交代の儀速に相運候様何分の御配慮に預度此段深く奉願候何れ其内山本日觀も貴院へ御伺可申上候得共京地の用事緩急にて登院の儀自然遅緩にも可相及哉も難斗候得は同人の御伺申上候には不拘交代の儀に付御心付の事は速に御指揮奉願候就ては津川氏は北海道布教相兼當分の内大教院に滞在教導有之候 ○妙顯寺交代に付も本因寺の交代の儀も一日も早く御交代の御事に相成候はば本宗海内の僧侶の歡喜幾許哉と奉存候明治八年々連々の評談のみにて實地施行の艱難なる如此哉所謂大器晩成と申候事歟 此節時候の故本院生徒病生勝にて甚痛心仕候貴院は如何貴院生徒の健不學の進不等御序に御通報奉願候本院の處生徒は隨分無きに非れども何分にも卒業生稀也卒業候者は自房へ引取更六級已上勤學の者希故後來教師に可相成の者希にて目今教師乏闕故教育甚差支痛心此事に候貴院は教育方に差支無之哉教師繁殖の好手段も御心付有之候は、御垂示奉願候 ○野生此節漸舊痾全治の貌に相成候乍然衰弱は逐年増加仕候尊

師壯健には甚感服仕候時下逐日向暑萬々自齋是祈 草々不宣 六月六日 頓首

文 嘉 再拜

編者曰。山本日觀、文筆の人にして明治廿四五年の交伊豫明光山にて寂。能書家。嘗て石川鴻齋と共に日本大玉篇を編し、博文館より發行す。校正の勞にて失明す。  
○封表、修師朱書「御覽之上は御返之事(三村印あり)吉雄君」とあり。吉雄君は大阪妙德寺住職吉雄政山師、教導職取締。  
(故冷泉要惇師藏)

三村日修師宛 明治十一年六月十七日

五八

本月十一日の芳墨奉拜見候時下愈御清安至祝陳は顯山交代の儀御依頼申上候處早速御領承被成下即刻妙德寺聖人御申付被下候由奉萬謝候日文師に於彼此云々も可有之候得共右は爲法に御盡力にて御指揮可被下候事貴拙速不貴巧緩幾重にも御配慮奉願候 ○御巡説は疾に相濟候事と存上候處本日迄の由殊に連日の説教嘸々御疲勞可有之と深奉察候先々本日にて無滞巡回御成業難有奉存候 ○學課の儀豫て御見込も有之此上房長共と更に示談之上確定の見込書を以て御照會の由承知仕候 ○此度本院生徒共別紙の通衣服法衣の制度相立度旨申立右は堯惇の作文にて生徒間有志者の見込なり何様に相心得可然や尊慮の處奉伺候 ○



身延にて人法本尊の論とは實地有之候事に候得共問者甚愚論にして眞實不足掛於齒牙也  
○止妙文靜等無事耀妙は歸郷中也得山は病氣にて病院へ入療中也是純も病氣其餘生徒頗る  
病生多し甚歎息也衛生の術不可不盡也 ○生徒法服改正の可否の尊慮一筆御投與奉願候先  
は用事のみ 草々頓首

六月十七日

文

嘉

(故冷泉要惇師藏)

三村日修師宛 明治十一年八月廿三日

五九

七月廿日來之數通の芳墨本月十日歸院の上併讀仕候引續山本氏への托書も同様拜見諸書面  
とも懇々歸宗論の事のみ縷述尊師用意丁寧深切深感候早速津川氏とも相談通覽仕候事に  
候得共歸京後は晝夜の客來頗る應接に貴重の光陰消却候故不本意ながら少々延日可申哉と  
深過慮仕候 此迄八十  
六日ニ認

本日徳山老歸寺に付同人へ話置候事は歸宗論の儀無據事實にて大に遷延候處昨今漸雜用少  
々消除し歸宗論拜見に着手候文體の認方は尊師の御認方至極に候得共原本の師認方十大段

鮮に相分り一機軸相立候認方と野生は相見込候故原本の儘可然と存上候なり乍然尊師の御  
見込の方可然哉今一應御勘考回答奉願候 ○彫刻は村上方種々不都合の事有之兩三軒書肆  
へ積書相取且筆工見本も取寄愈以宜敷處に申付候事に可致と相心得候筆工取掛候よりすく  
なくも六七十月間は相掛可申候此段御含置可被下候 ○御賢弟瑠圓老病死の事は眞に爲法  
深哀傷に不堪候尊師の御愁歎深御察申上候とかく善者の不幸は誰昔（マヤ昔）より然り感慨之至に候  
草稿は大切に取扱ひ必ず返璧可申上候 尙委細は徳山より御尋聞奉願候 同人出立に臨み  
草々布字 頓首

八月廿三日午前第十一時

文

嘉

(故冷泉要惇師藏)

貫名日達師宛 明治十一年九月二日

六〇

八月廿一日 of 書狀同卅一日に落手候得共月末小試檢なり至急用客來も頻りに遂々乍存回答  
遅延候先般御照會の事は書面を以て住職可然旨相答候其後更に書狀故再度端葉を以て前旨  
申進候定て御落手忝知の事と相心得候得は此度書面の趣は回答に難及候得共畢竟は布教上



の都合を以て住職候事に候得は布教に不都合に候は、速に御斷被成候ても可然と相心得候  
 それとも野生か住職不可の書面無之候ては進退に不都合に候は、更に御郵知可被降候 ○  
 新誌守本永野云云之事は誰人のいたつらなりや野生は温泉行中なり宗員並に教院生徒の手  
 に出るに非ず右の事にて局にて甚迷惑いたし居候由に候 先は取込中回答のみ 草々頓首

九月二日

文 嘉

○  
 資助等にて都合の住職は大害の事と相心得資助無之候とも志さへ候は、共に寒苦可相  
 勤候也資助を以て心慮を惱す莫れ

編者曰。「鶴崎町法心寺寓貫名慈航殿」宛。○慈航院日達。字慈航、初の字は觀志。  
 大分鶴崎の人、法心寺日運に就て得度す。萬延元年、師に従つて熊本妙寺に入  
 る。郢曲、今様、漢畫、漢籍を學ぶ。元治元年、師に従つて、宮地宗覺寺に移る。  
 慶應三年（十七歳）鷹峯檀林にて新説。宮地に歸る。蘇溪義塾に吉井簡齋に就  
 て漢籍を學ぶ。偶、教部省の巡回試験あり、長崎假教務所書記を勤む。此年（五  
 年）鶴崎常妙寺に小教院を置き、教授の一員となる。明治六年朝田日光師に伴は  
 れて上京、二本體宗務院に入る。明治十年宗教院助教補、十一年熊本に歸省。十  
 二年川尻法宣寺住職。十三年三村修師九州布教隨行。十四年鑑師九州布教隨行。

十五年九州中教院教師。長崎本蓮寺に晋む。十六年本閉寺一等執事。十七年二月  
 歸寺。十八年小檀林開始。夏、薩和上巡化。周旋甚だ力む。明治三十五年四月十  
 五日本山實相寺へ瑞世。昭和三年十二月六日寂。壽七十八。第六教區布教監、宗  
 會甲部議員。權大僧正。（永田慈明記）  
 （永田慈明師藏）

山本日誦師宛 明治十一年九月三日

六一

客月廿八日の芳墨披見薫誦先以猊座清勝且つ濟々御歸山の由爲法奉至祝候陳は豫て御宿願  
 の事信徒壹名のみにて數名連名無之とかの廉を以て御聞届に不相成哉に傳聞仕候若し願書  
 却下に相成候は、信徒五六名連署し且つ目今檀家に願込の家數も申立後來更に増加の見込  
 も相立申立候は、必ず許可の由にも傳承仕候故此段御心得迄に申進候 ○先般相願候耀妙  
 への通信は御申越被下候哉御序に一筆奉願候 ○大教院生徒文秀と申候者若年に候得共解  
 行とも兼務仕度志にて勉強候得共府下の宿寺とかくに寺主寺用にのみ相仕ひ時々志業相妨  
 何分右の事にて障碍志願も難遂故今般斷然府下を出離し尊師に隨從仕り宿願相遂度の懇願  
 に候間甚御迷惑の事とは推知仕候得共本人の情願御憐察被成下御隨身御許可被成下度此段  
 相願上候尙猶委曲は本人より御尋聞可被下候尤も御都合にては兩三月も相立御戻し被下候



ても宜敷適宜御指揮奉願候何れにも塵縁相絶宿願成就の事に相成候様御配慮奉願上候  
先  
は此事深く相願度 草々布字 頓首

九月三日夜

文 嘉

(鏡忍寺藏)

新居仙七郎殿宛

明治十一年十一月卅日

六二

華墨披見時下寒氣逐日甚敷候緒は御持病とかく不宜候旨御申越被下驚入候就ては御經讀誦  
之僧壹名招請の儀領諾候當地も實に人物に差支候得共此度は愈御重病の由故何分捨置難く  
教院學生の内壹名強て相頼遣候事に致候十二月三日比此地發足爲致候間左様御承知可被降  
候逐逐寒氣甚敷相成候間折角御養生專一に願上候野生も見舞旁御地へ參度とも相心得候得  
共何分他行致難候故不任其意唯々此地にて朝暮御祈念可申上候 ○寶珠院の儀は疾くに可  
調管の處眞言宗會議延期に相成候事にて諸方寺院出京無之候より遂々大延引に相成居候得  
共眞言宗役局にては必ず引請成就可申と内々領諾に相成居候故延引候とも決して御案事被  
下間敷願上候尙後便に吉報申上候御序に書上御一同へ別紙同様御通聲可被下候 先は返事

のみ 草々頓首

十一月三十日

文 嘉

編者曰。仙七郎即由兵衛、明治十一年十二月四日歿。壽五十九。

(新居貞太郎氏藏)

山本日誦師宛

明治十一年十二月二日

六三

過日來數回の芳墨每狀披見の都度回答可申の處用務多端遂々無音に打過候段御海容是祈時  
下寒氣逐日甚敷愈御清穆至祝陳は文秀儀御厚情相成候のみに非ず重病之節は種々自ら療養  
被成下候段深奉謝候本人も深く感肺仕從野生も厚御禮申上被吳候様にと被述候然に何にか  
養生の爲に出京相願候由全く本人罪障の令然處長久御隨身難相成事と相心得候 ○耀妙事  
も毎々御配慮被成下難有御禮申上候來春東上の旨申參候得共別段見込無之候は、暫時出京  
無之方可然哉と申遣候 ○此度日鑑師の急迫實不忍看無據暫時管長再勤の事に相成殆んど  
困惑の至に候宗内一般の遊惰策勵候とも醒覺の期限不可有之事と深恐懼仕候尙釐正の着手  
御見込等大小とも幸便開陳被下度深奉願候 ○公私用相兼御出京の思召哉に候得共可成丈

尺牘

三一七



は安住不動之方可然哉と奉存候 先は回答旁文秀之謝申上度草々布字 時是向寒萬々自齋  
十二月二日 日薩 頓首

(鏡忍寺藏)

赤羽宥松氏宛 明治十一年十二月五日

時下逐日向寒愈御壯健欣喜の至に候陳ば豫て宿願一寺創立の儀今般更に縣廳へ出願の旨承  
知致候就ては愈以許可の際開堂供養臨席法用可相勤之事等領諾申候且該寺開祖願之儀は不  
肖甚愧入候得共貴邊信仰之志深く隨喜候故乍不及領諾し爾後該地布教丹精致度と相心得候  
但住職僧の儀は何分難得其人候得共心掛居候且差當一兩年間も派出滞在布教の僧壹名との  
事早速一兩ヶ所も及照會候得共是又何分其人に乏敷候其内見當候はゞ差向可申候 先は甚  
延引回答迄 草々不宣

十二月五日

日 薩 [花押]

十一月十五日深川宗局は芝本院へ引移候段爲念申進候

編者曰。栃木縣鹽谷郡北高根澤村上高根澤本立院。本閉寺末。開山日薩上人。寺  
號公稱許可明治十二年三月廿四日。開基檀越同處赤羽宥松、大正十五年二月二十  
二日歿、六十八歳。(新報一四一九號、大正七年一月十五日所載)

金子慈貞師宛 明治十一年十二月廿一日

時下向寒愈御健勝修行被成法喜の至に候日照師御遷化後は別而種々御焦慮之事と深御察申  
上候艱難中別而山護肝要の事に存上候備ては此度本尊鈔生徒就業の爲に上木仕度見込候就  
ては通常版木に

摩訶止觀第五云……………

夫一心具十法界云云と有之候得共野生年來有疑候故可相成は御正本に如何に御認に相成居  
候哉

摩訶止觀第五云……………夫一心具十と引續て御認に無之候哉且又分注も第五云の下に有之

候哉乍御面倒御眞蹟直覽被成御認の次第柄御書取至急に御回被下度深及御依頼候此節御交  
替の際寶藏中御内覽は相成兼事哉とも察上候得共上木の都合も有之候故遠壽聖並に大嶋氏



等と御協議被成下別段爲法の御取計に與度此段及依頼候  
尙有無とも御通知被下度相願候 先は要事のみ 草々不宣

十二月廿一日

日

薩

編者曰。封筒には、中山村法華經寺住職慈貞殿とあり、誤書なること明なり。當時中山教院教師。現に板橋妙福寺住職。○日照師、中山百十三世。十一年七月十五日寂。○遠壽聖、遠壽院住職、喜多村日修師。○大島氏、中山執事長。

(板橋妙福寺金子慈貞師藏)

久保田日遙師宛

明治十一年十二月廿三日

六六

逐日寒冷益清穆至祝先般登山之節は百般御世話忝御禮申進候備は其節大野遞減録受取之事に付御依頼申上候處突然別紙之通其檀中より來狀有之其實不又は地面も其代價に至當なりや如何にも不相分候間歳末多忙甚御氣之毒に存上候得共外に依頼可致場處も無之故該寺爲山の思召にて事實取調實地至當之者に候はゞ買請候様御取斗可被下候可否有無とも御委任申上候間尙住職眞盛殿とも御協議爲山の事に相成候様御周旋願上候先は用事耳 草卒頓首

十二月廿三日

日

薩〔印〕

編者曰。宛名、久保田日遙殿、御詰合中と連名にせり。○大野は本遠寺。○遙師、此時身延執事。

(静岡縣多賀富西寺小野觀實師藏)

貫名日達師宛

明治十二年三月廿七日

六七

昨年來地方教義上種々御盡力の由爲法大慶之至に候備は今般人吉説教所建設添願の儀御申越に候得共本書無之候ては何分添書の筆路相立兼候得共更に及照會候得ば空數時日遷延候故添書は相廻候得共本書の文面旨趣齟齬無之様御注意可被成候爾後は急速に候とも本書の寫御廻に相成候様可被成候 ○不遠出京の由屈指相待居候先は用事のみ 草々不宣 頓首  
尙信徒一同へ御序宜敷致聲可被降候草々

三月廿七日

文

嘉

(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛

明治十二年三月卅日

六八

本月十一日の芳墨拜見早速御返事申上度候得共御巡回中方處不相分候故差控居候備て格別

尺牘

三二一



御疲勞も不被在諸處の布教無御滯御勤務之段爲法大慶の至奉賀候且つ連日の群參凡人餘の由加之喜捨も存外有之候旨巨細相承乍蔭隨喜仕候延山の名且尊師平素の徳望故信徒多少の利益相蒙布教作振の段奉感佩候乍然永々の巡回中故申迄も無之保養有之度奉願候晝夜の應接には御煩勞萬々御察申上候 ○管長受持の儀光山のみ彼是不服申立候由一往其筋有之候得共右管長の事にて總本山の名義に相關候ては永年の不都合と相心得候故祖山の名望に相關候事に候はゞ野生不肖且病軀難堪候共發憤在勤候故御遠慮なく御思召次第充分に御掛合可被下候何れ御歸山の上諸山的情況は緩々拜聞可仕候野生も昨年來始終不快勝に候處此一月末頃より大に壯健に相覺食事逐日相増候故此段御省慮可被下候四月十八九日頃東京發途信州松本へ參り新寺の開堂供養相勤五月廿三四日頃には必ず登山し大會相勤候心得候故此段御省慮可被下候 ○池上退職の事は方今宗務上に於て不都合故本院より斷然退職不相成旨申聞先々差止候此節北越布教の爲に本月廿七日出立致候此段御省慮奉願候 ○越前より別に巡回御招待にて京攝間相濟次第御巡回の由承知仕候右は御巡回有之候はゞ信徒喜悅は愛知等に十倍と見込隨て加越能三州の方へも御巡回に候はゞ八九月頃迄も相掛可申と見込暑中殘暑等故別而御煩勞の事と深御察申上候 ○育見院へ多分喜捨の旨御申聞被下真に

難有奉存候野生何分管長在職中なり且延山の名義も有之候事貳百圓にては微少各宗へ對し竊に相愧居候處尊師の喜捨にては大に面目相改各宗一般の景況に相響き充分に宜敷都合深奉謝候何れ規則等出來候はゞ御巡回先へ相廻上候間適宜に僧俗とも御獎譽奉願候 先は用事のみ 草々不宣 頓首

三月三十日

文 嘉 拜上

編者曰。鑑師此の時、大阪雲雷寺留錫。○池上は昇師の事。○松本龍興寺開堂は十二年五月九日より五日間。○育見院寄附金は金貳百圓也。

(武見潮寬師藏)

三村日修師宛 明治十二年六月廿四日

六九

四月五日の芳墨六月八日東京歸院の上謹拜見愈御清穆奉賀候 ○歸宗論上木料金員彫刻之儀御見合に相成候由爲法奉禮謝候御序に河井講義に宜敷御話奉願候 ○管長交番の儀は五山平均勤務は野生平生の持論に候其旨は方今宗教振興の日に候へば宗内平均に協力し五山は勿論諸本寺に至迄一列に同志候には五山平均管長在勤に無之候ては一方は盡力し一方は



不盡力の事に立到候は必然の勢に候也宗務の不舉は寺院僧侶不平より相起候故可相成は諸  
本山貫主方順次に出京在院し宗務取扱候はゞ宗内事情彼此通徹し事務教務相振候様漸次に  
相運度と見込候也然し是歟非歟御見込垂示奉願候吉川教正御面談の際野生穩の返書有之候  
由に御話有之候旨此は如何の事を穩と被申候哉難斗候得共今を以て推察するに管長五山在  
勤の件に付日禎師と云々の次第も有之候由同師懇々御申越に候故同師巡回多忙中心配相掛  
候は爲宗之筋とは乍申推察無之様にも存候故本年四月交番の約には候得共同師歸京出局迄  
の處は先々勤務候旨申候を同師誤認し野生永久在勤の事にも思召有之哉と愚考仕候此段爲  
法尊師に於ても篤と御勘考被下尙福田聖とも御協議被下五山平均在勤の事可然哉と見込候  
野生の處管長在勤無之候とも決して宗家の爲に盡力は仕候得は野生管長在勤は宗家之計に  
非ず此段野生安逸を貪候譯に無之は天日の如し伏て尊師の高配に預度候 ○此度各宗有志  
の人々と協議し育兒院開設し天下貧民にて赤子養育方不相立者の爲に赤子貰請け養育し六  
年已滿に到候得ば普通學相授け人材教育し世出世間の内に育英の實地相立候様致度左すれ  
ば目今は飢餓の赤子を救ひ往而は相當の人材も輩出可申哉と見込候故何れ近日取締へ向け  
規則書遞送候故御通覽の上夫々御勸奨應分の捐助喜捨被下候様僧俗一般御演說被下度天下

貧兒に代て伏て奉願候 ○本月十部祖書の内本尊抄立正觀鈔十法界抄三冊成刻上り候依て  
三部合冊一卷に製本候先々題目鈔因果鈔合冊の本の貌にて只々彫刻方は十分入念に致候故  
隨分美本と相心得候貴教院生徒中に課業入用に候はゞ幸便御申越奉願候 ○首題要義は野  
口君と協議校合し少し脩文し近々彫刻出來の心得候此れには何にか序文も相加度と心得候  
故尊師も必定一筆題辭被下度奉願候在家俗門の爲に首題功徳章彫刻致度と見込既に彫刻の  
施主は有之候得共何分校合に寸暇無之殆んど困却仕候實に雜用紛々然然に近比別而衰弱甚  
し食事頗減少餘命も如何哉深痛心候此は尊師より御誠責に候得共後來を慮り又々忌諱に相  
觸候段御海容奉願候 ○此節後世の事を慮り徒弟を貰ひ養雛僧小童八九名に相成此も又一  
煩惱相加候呵々 ○疾に返翰申上度と相心得候處雜用取紛乍存遂々遅延深奉謝候 草卒布  
字 頓首

六月廿四日

辱知 文

嘉 謹上

編者曰。野口氏、之布先生。

(故冷泉要惇師藏)

久保田日遙師宛 明治十二年七月十一日

尺 牘

三二五

七〇



本月三日出の芳墨忝披讀時下愈清榮御寺務被成候段法喜之至に候緒は豫て先般身延にて御話有之候横川淨光院の事は天台宗管長へ話度候得共貴境より公然願書差出無之候ては先方へ照會の運難相成候故本人より願書差出候様御話可被下候尤も貴師連署加印の方宜敷と相心得此事貞松日慈師に話置候故同聖近日歸路御尋申上該事縷々御話可申候 ○身延にて御話申上置候育兒院の事愈設立許可に相成六月十六日より事務所開業救助候故貴境僧俗となく一般慈愍同志の者に御懇諭被下何れとか慈育之事業相立候様精々御盡力願上候此も日慈師へ相托置候故御傳聞願上候規則等は諸新聞にて御一覽とは心得候得共尙一部日慈師に相托候故御熟覽之上御配慮募縁深願上候 先は用事のみ 草卒布字 頓首

七月十一日

文 嘉 日 薩

編者曰。宛名見壽日遙聖者とあり。○育兒院、十二年四月一日設置、四月十八日  
内務省許可。 (『日遙上人』所載)

三村日修師宛

明治十二年八月十三日

一七

本月三日の芳墨に候處折節野生田舎へ他行し漸く十日に歸局し即刻拜見仕候陳は卒業生徒

新補の儀に候然に拜命は至當の事に候得共孰れも廿歳未滿の者に候れば規則には別啓相添無之候ては撰擧に及難候何れ宗局々可申上筈に候間御照察奉願候別啓相添候はゞ進達に可相成候間此段御含迄に申上候 ○試補は局限の事に候故早速該地方廳へ照會に相及候此も爾後は教師壹名捺印而已に無之取締壹名連署有之候事が規則に候間爾後の御含迄に申上置候 ○本願の葛藤は如來示佛門の不幸と深痛慮候之を以も宗内も諸本山協和し爾來合力同心宗風振起の事に仕度と深く焦慮仕候故此上とも一層御配慮奉願候野生無據場合よりして久敷宗務の要路に横たわり居り後來の障害相釀可申哉と眞實爲法過慮仕候此段深御配慮奉願候宗學も何分諸教院とも不振様に見込是れ野生一生の志業に候故何れとか作振の路相立度とのみ志念仕候學路専門に盡力仕度候最早餘命も幾許も無之候故一日千金の思に候深御配慮奉願候生徒に牽れ宗學に縛せられ何分東京難去今日迄此地に附着候は識者より之を見ば之を何と言ん且愧且憂候得共何分此件絶慮割愛し千里雄飛する不能候事自ら軟弱の性質故と深痛憐候此節如何の事に候哉毎事落涙のみ先立ち稠人中深慚愧候のみ ○首題要義數返校讀し漸く此比大略相濟今一往野口君と打合せ本月中に敬厥氏へ相付候事に候一書彫刻する毎に不堪歡喜候乍然校合には頗る苦心仕候壯年より文辭に志しなきに非れどもなま



〳世才の有之候より不知不識世事に執筆候より一生を誤り臨死而深後悔仕候今の生徒の學事大成し宗義を文繡にし萬國に翻譯し流傳せん事を深冀望候のみ嗚呼老矣是誰過乎深痛歎仕候尊師は野生が五六年も高壽に候得共所謂かくしやくたる者なれば更に之を強めよ古昔八十行脚の高僧あり取て規とすべし小生の如は日々衰弱此比は音聲も時々停滯候故生徒と議論上に於て三舍避走仕候 ○妙音品近々刻成に候就ては卷末に弟子光山嗣法圓政三村日修賞刻と記載可申哉有無至急に御報知奉願候〔頭書〕前刻成の本の例にまかせてなり野生校合の名は不相替相認候心得に候〔以上頭書〕 ○育兒院の事は何分御配慮を以て寺院は勿論在家信徒等にも精々御説諭勸奨被下度奉願候現今の餓鬼道を救上げ天上人間より已上の人と相成す眞實の事觀の修行即兼行六度の品位に相進候事に候耶蘇宗の育兒院救貧會等は既に設立に相成居り皇國人を救濟候也然るを内國人にして之を坐視するは皇國の大恥と確信候況や教法社會の人に於て之を苦思せざるは教法の本意を辨知せざる者と謂へし吾身飽食暖衣し傍に凍餒人あるを看て不顧は所謂無顧之惡人と可謂者也と深不堪慨歎之(カ)之至候尊師以て如何とするや伏て御配慮奉願候 先は用事のみ 草卒頓首

八月十三日

文

嘉

賞刻尊名の儀は至急に御回答是祈

編者曰。修師の朱書あり、頭書第二紙欄外に頭書「撰擧の小言」封表「十二の一八月十七日」封裏「撰擧の別啓試補撰擧連印」とあり。  
(故冷泉要亭師藏)

三村日修師宛 明治十二年十月十五日

七二

本月九日の芳翰拜閱愈御清適至祝 ○廣本辨の件は昨日野口氏へ訊問し尙更催促申置候

(朱書修師カ)

○中田の事は阪府が招請書の遅緩より狐疑を相懷候由にても候哉未だ野生迄は申不來候

得共宗局詰合の者に他國遊化は難相成由申來候由に候 ○永野日定事も春來より病氣の處

此節大漸壽命且夕に相迫眞に愍然落涙のみ本年は何の年ぞ徳山を始とし生徒間に於て後來

の望を屬する者四名陸續死亡今亦止妙院の遷滅は學事に衰廢相釀學者の不幸不過之深慨歎

仕候 ○十日間程已前本省社寺局に於て野生呼出に相成候局長より中山交代願末御尋に付

巨細縷述し且つ後來人撰住職は法縁法薦年齢等に不拘専ら宗規釐正を目途とし學術品行を

專とし人撰凡そ三人豫撰し方今八區中教院照會中なりと答置候左すれば至急に先般人撰照

尺牘

三二九



會は速に御回答無之候ては本省へ對し甚不都合相極候場合に候故最早照會後四十五日間の餘に相成候故隨分御評議御行届の事と被察候故一刻も早く御回答奉願候（以下權事、信孤及四字、修師朱書）「真宗は種々改撰相立大に宗内も煥發し布教も相開き日本第一の宗風と外國迄も流布の由に候然宗内は舊のみ主張し教法作振に心を用ひず少々にても才氣有之者は唯々不品行のみ専務とし諸山方は唯々私山のみを維思ひ一宗の都合振作に於て度外に置が如し法縁のみ主張し人情如何を斟酌して更に學事興起し布教之基本を立候事は第二に置が如に被察候聊か八區の教院も次第湮滅の貌を顯候八區の内誰れか先に廢滅に相成候哉教院の廢滅は地方寺院の護法心無之候より相起候事と奉存候願は諸本山方に至當の人選を爲し宗家一般に作振致度のみ相望候得共一二屈指の生徒は病生或は死亡し維新來最早十二年の多に至れども生徒より起て諸本山に進候者は壹人も無之大に人才登庸の路相塞り如是にて後進輩の氣象何を以て引起さんや世間官路の如は草莽中か崛起し學校書生を起て參議長官等のものも比々是也概して三十は前後或は四十前後の者のみ以此思之人の品行なり學術なり必ずしも年齢多を善とのみ難申候遠師も二十歳代にて登庸せられ朝師は十七歳延山瑞世す必ず老年を善とせば老馬を以て貫主とせば可也（〇ハ修師朱書）一宗の不振は人才壅塞より起候深御注意奉願候最早野生（又出タ、修師朱書也）不遠死に就く

べし宗門の後來尊師深御深慮奉願候感慨不休噫々不圖も激論に及ぶ死罪御海恕是祈 草卒

文 嘉再行

〔第一紙外欄〕

真宗より五百圓育兒院へ寄附被下候

日禎尊師へ御哀告奉願候

人の急を救ふは地の東西に不關事と奉存候西京に於修善の事業有之候はゞ東京の人にも随分隨喜可申上候心得に候 ○此節一枚摺の育兒院規則並章程等有之候間送候て宜候はゞ御送可申候此旨河井大善根主に御話奉願候

〔第二紙外欄〕

××の無志無道心は甚佛祖の罪人と相心得候野生の見込は孔明揮淚斬馬稷の一言に相決候

編者曰。宛名には「光山法主日修大和尚」とあり。本文中、修師朱圈點ある所の上欄外に、修師朱書「聊狂氣セルニ似タリ」とし、墨にて之を消す。「野生」傍の「又出タ」同様なり、封表、又朱書「十月十八日着」此書返書に入用候御一覽直御返し可被下候」とあり。  
（故冷泉要惇師藏）



三村日修師宛 明治十二年十月廿二日

七三

時下追日寒冷御清寧奉賀候儀は中山住職豫撰照會候處外各教院より悉皆指定回答有之候得共貴教院々最早五六日間の久に相成候得共何等回答無之宗務取扱上に於て甚不都合之至り且は本省へ對候ても等閑に取扱候事に相成候間至急人撰指定回申有之度深及依頼候 ○永野日定事養生不相叶今廿二日午前第九時四十分に入寂候永年御懇命相蒙候段深奉謝候噫何ぞ學者の不幸なるや知融の名は老和尚の名る處なれば後來一方の法將と相頼置候處如此早世す抑も十七八歳々學事に執心し敢て一日の怠慢無之明治五年教院爾來教授擔任是又一日の疲倦なく相勤凡そ一日の安を得せしめず遂に今日の事に至る噫亦何ぞ不幸なるや得山子々凡そ五名屈指の學生頻に死に就くは亦何の事ぞ今日我落涙も不出只々茫然たるのみ少々才氣有之者は往々懶惰相極放逸に金銀浪費し宗務之都合も不顧無慚に寺録食崩す者は壯健も壯健なり嗚乎天道是歟非歟願は尊師我惑を解せんことを乞ふ ○妙音品愈成刻不日に三十部教院へ向け遞送可申候序に觀心本尊抄法界抄立正觀抄三書合本一冊新刻出來候故生徒課本に同様三十部程相送可申候 先は用事のみ 草卒

十月廿二日

文

嘉再行

人撰投票は眞實相困候故必ず等閑に無之速に御回申奉願候

○ 止妙院日定 明治十二年十月廿二日寂 生年丑の三十九歳なり

朝暮御看經の序御回向奉願候

(故冷泉要惇師藏)

三村日修師宛 明治十二年十一月五日

七四

嗚乎宗規煥發之機運來れる歟學事興起之佳會なる歟抑も亦宗風泯滅之時至る歟僧侶斷絶之運びに相成歟後來之可否吾甚惑焉尊師比日夫の徵兵令改制之布告を見る哉尊師如何なる感覺を爲し玉ふ哉隨て本省戊第二號之達書は如何に御讀被成候哉深慮奉願候宗門之盛衰は唯一舉に相基き候と野生は深相考候に付諸縣下八區教院本部取締正副貳名づゝ本月三十日限出京申付候此大事を野生一己の管見を以て治定候て事誤候節は宗門の不幸のみに非ず



佛祖へ對し死し而猶有餘罪とも可申事故各地諸賢哲の善慮を參考し善良の方策相立度と冀望候也抑も我宗門學事沿革は明治第五年に一變し八年各自分離の際に再變し此度にて三變すべき機に立到候此度善良の計策不相立は後來の宗門亦見る可き無に到んこと必せり此度此際に乘じ學科も變制すべし宗規も改正すべし僧侶得度の式も立べし學費資縁の良策立べし弱齡未滿之者は一般に一箇も漏れなく就學せしむべし三十未滿の僧も何れとか教職の名に應ずべし四十已上の僧侶も國家の義務相立可申嗚乎宗門之振起は此一舉より發すべし若此一舉にして誤らば宗門之百事悉皆痿靡し亦莫可見而已就ては尊師を屈請は甚恐縮の至に候得共宗家之爲に一ひ法錫を雄飛し此東京に來儀し此度の會議に來臨被下候はゞ宗家百事必ず整頓するのみに非ず諸縣下遠來の取締衆も大に感動し他日の效驗鮮少ならず願は此衆の爲に一ひ雄飛來局奉願候尤も本傳聖は必ず出頭の事と相考候右に差添壹名と申者有之候壹名を略し尊師河井氏を誘引同行被下候はゞ大阪教院改正作發に大に力を得候事と奉存候右甚失敬の申上方に候得共今般の議事は七分學事の向に候故他の人百名より尊師壹名御來臨被下候はゞ不過之事と見込候故何にも宗門の爲の事なれば何ぞ小事に拘し失敬を是顧んやと宗門の爲に失敬の臨席相願候は深御海容奉願候本傳聖と御臨席被下候はゞ其往復費は

該教院の公費にて御賄被成候て可然と奉存候京師の處も本法寺貫名日運師呼出し差添壹名の處相略し福田教正日運師と同行被下候はゞ後來京師教院の都合宜敷事と大阪同様に相考候故願は尊師福田聖へも御勸諭の上御同伴被下候様御配慮奉願候尤も福田聖の出京は尊師の出京とは大に異り東京へ參候は御本人壹分上に於て幾許の費財と見込候得は誠に御氣之毒之至に候得共福田聖臨席被下候得ば教務外に於て併て事務改正の方法も相立可申と見込候此又爲法大憤發被成下候様吳々も尊師を御勸獎誘引來儀奉願候欲言之事云々なれども百事面晤可申上と申殘置候此書着次第願は速に御領諾の回答一筆奉願候 先は用事のみ

草卒頓首

十一月五日

文 嘉和南

編者曰。欄外に朱書、修師の福田教正への依頼狀草案あり。別掲參照。○貫名日運師、慈妙院日運上人、宇湛繼、濱氏、中途貫名姓、中山法華經寺、管長、大僧正。

參 照 十二年十一月五日付薩師書簡欄外朱書、福田教正宛修師書狀

謹て福田教正へ上申す何れよりか御聞込にも相成候候半今度徵兵令御改革並に試補を命



ずるに二十歳未滿之者は内務へ伺ひ許可に不相成已上は試補を申附べからざるの御達に  
 相成確乎たる嚴則を定置不申候ては不相濟趣私分第一區は不殘出頭外八區詮表の壹名西  
京は本法寺貫名氏大  
 阪は本傳寺河井氏外附添壹名合べ二名宛是非とも今月卅日迄に到着すべき旨御役所然たる布  
 達有之候に付後來試補撰舉に困難なるは心痛あるは無論なるも今度の會議は關係無之と  
 安心致居候處昨日は人の身の上へ今は我身の上へとやら本月八日に至此書飛脚實以大困  
 却御兼知の如く阪府教授は今年限りと覺悟のこと半日も無懈怠教授致度志殊に年内の日  
 數を算すれば四十日程のこと故さらぬだに意いそがはしく處を東行して十日餘の日數を  
 費は一分に於て迷惑學徒へ對しても氣毒に存候得共到底難遁儀と存じ本月廿四五日頃河  
 井と同船出頭と相決申候就ては尊者廿日頃御歸京の由兼て承知候得共一日も早く御歸京  
 に相成御繰合に相成御一諸に御東行に相成候様伏而希上候東西引續ての御奔走は御困却  
 申迄も無之儀とあれば御奮發御苦勞拙なども容易に東行する氣にはなり難成（<sup>レ</sup>）を千思萬慮  
 するに後來教院の爲めと申新居（<sup>レ</sup>）の場（<sup>レ</sup>）にても容易斷り聞入れは有之間布と東行決心候條尊  
 師にも御同道被下度奉懇願候也 明治十二年十一月十四日 光山にて

日

修 謹 書

(故冷泉要惇師藏)

加藤日掌師宛 明治十二年十一月十三日

七五

時下寒冷愈御清寧法喜之至に候偕は先回は育兒院の事早速御配慮被下捐助被成下候段深謝  
 奉候乃野崎溝手兩氏の銀行請取證書貳葉相廻上候間乍御煩手夫々御配賦願上候尙此上とも  
 教導の御序には時々御勸奨奉願候

先回中山の件に付種々申進候儀は餘り激烈之申立方故定て立腹とも察し候得共宗家の大事  
 餘り等閑に成り候故不知不識過激の段海容可被下候人撰中に津川老人を不加候事は我輩同  
 様一旦大本寺に瑞世候得は更に撰舉住職は宗門に無人の貌に相成他門に對し慚入候次第也  
 且は内を顧れば壯年輩有志才學徳望之人に不之候得は撰舉無之時は畢竟人材登庸の路相塞  
 り候様に相成候故差控候事也加之津川氏にして岡山を去れば該教徒の衰微とも可相成と過  
 慮候邊も不尠彼此宗門之都合にて如此取計候也決而津川氏を相忘候義には無之候御本人は  
 大に怨言有之候由に相承候得ば話之序には一言御話可被下候 ○今般試補の儀に付從前の  
 手續等改正し嚴制相立度就ては宗規も多般釐正變革も相立更に本年よりは一層宗風作振の



地に相運度見込候より九區教院本部取締二名づつ出局申置候間貴教院よりも可然人撰出京有之候様願上候 ○今般徴兵令改正の件に就ては眞に佛家後來の盛衰に關し不易之事に候此度宗規作振無之碌々として法縁私情に泥着し煦々たる事を成し候節は次第萎靡して宗門湮滅に立至候事と見込候貴聖等有志の御方には充分に爲法爲國家一大憤發起擧有之候深奉願候何れ御協議の上は御出京にも可相成其節縷々可申述候先は用事のみ 草卒頓首

十一月十三日

文

嘉

編者曰。加藤日掌師、松ヶ崎檀林より水吞修師に隨學。明治元、妹尾正福寺。十年彦根蓮成寺。薩師に隨從すること前後十二年。宗會議員。説教家。青年子弟の訓育に力む。大正九年二月六日寂、七十三。此の時、岡山檀林教師。津川日濟師は當時岡山檀林林長。

(稻田海素師藏)

三村日修師宛

明治十二年十一月十九日

七六

十四日夜大光山にて御認芳書十八日午後には拜讀先は斷然爲法爲國東京御雄飛來錫被下候旨難有奉謝候<sup>(マモ)</sup>早刻神保等へ披見爲致候處深奉謝候此事一寸御禮申上度如此御座候 ○御來院之節要文集折本貳拾本程御持參被下度奉願候此事も早川へ依頼候今に送與無之候故御荷物

中に御包込貳十本に不限十本なり何本なり御都合次第に宜敷候故御配慮奉願候 ○更に甚恐入候得共木魚のぼる貳本程購求願度尤も此ばるは研修子土産に昨年持參の品願度見込に候故又御面倒ながら研修に御申付被下度とも相心得候 先は御返事申上度のみ餘は不日面晤縷々可申上候 草卒頓首

十一月十九日

文

嘉

唯今端書の郵書正に拜見仕候

(故冷泉要惇師藏)

吉川日鑑師宛

明治十三年二月十九日

七七

春寒料峭愈御清勝至祝昨年来久敷御留守中の用事一時蝟集候のみに非ず本年御派出前の用事紛々の事と深御察申上候乍然北國筋より九州迄御巡回候はゞ多分の營繕費も集收可有之と奉存候就ては九州筋本圀寺聖御巡回有之候由巡回順路前後等問合候處乃ち別紙の通申參候故其儘入貴覽候九州筋へ御出に候はゞ熊本縣下には慈航と申者有之候此れは野生の門徒

尺牘

三三九



に候故地方周旋盡力可致旨過般縷縷申遣候故該地へ御出の節は無御遠慮百事御使用可被下候  
 ○中山事もグヅ／＼と致し不潔至極中村伐木一條は彼等東京裁判を仰候處彼等の申分不相立大敗北に相成候得共邪智猶不休此處上等裁判へ控訴に相及候眞に可惡之至に候乍然此又彼等敗北は如見諸掌也慙傷之至にも相心得候乍然世間の事は可厭事のみ ○育兒院へ今般主上より思召御恩賜有之候段爲貧兒深御隨喜可被下候御巡回先に於て御話の都合も有之候はゞ慈善者流へ可然御勸奨奉願候 ○宗局新築も世間を顧れば見合可申とも心得候得共宗務の都合には營業仕度候左も無之候ては自然宗局詰合の者も勤惡き由にも相見え申候方今の世況にては管長と申者は必有の者と見込候得ば管長在務の場所無之候ては到底不相成哉と考候且は假宗局に候はゞ百事此に準じ事務或は假想に相出候邊も可有之哉と過憂仕候故是非新築の見込に候此節漸次其運に相立居候 ○眞實傳等越後行の品は昨日長門屋書肆に於て荷造し善行寺へ宛差出申候此段御省慮奉願候 先は用事のみ 草卒  
 時下とかくに不順折角御自齋是祈 不宣 頓首

二月十九日

文

嘉

編者曰。本閉寺聖、日修師。○慈航、貫名日達師。

(武見潮寛師藏)

貫名日達師宛 明治十三年二月廿七日

七八

唯妙歸國に付一筆令啓候時下春寒料峭愈清福至祝陳は過般は御書信忝披見候其後は如何被成候哉と實は案事居候處法宣寺住職之旨御申越欣喜無量に候然る上は地方教導專務有之一兩年間には教導之實效有之候様深冀望候野生も其内餘命も候はゞ西國一覽旁布教も仕度と見込候故其節は貴聖の實蹟歴覽し平素之持論に不相違之高業を見聞從今相樂待申候 ○豫て毎々御話申上候沙彌學校設置し貧童或は有志出家企望の小童相集教授し他日の大業相立候程之者を養殖仕度兩三年前々見込相立居候得共何分種々の事に障へられて今日迄不相果候得共是非設立致度眞實の赤心に候故貴聖も住職昨今は甚費用多分とは察候得共艱難中に操合本年々多少に不拘御積立金御心掛被下沙彌校設立相成候様深御依頼申上候此事唯妙老へも委曲話置候間同志御勸奨有之候様深願上候 ○育兒院之事も規則書唯妙老へ數通相托し候故是又慈善者流へ僧俗となく御勸奨願上候 先は用事のみ 草卒 頓首

二月廿七日

日

薩〔花押〕

編者曰。唯妙。熊本縣玉名郡坂下郷中村妙性寺住職寺岡唯妙、大教院生徒、本年



伐歸國のものとの次の便りにあり、今の彌富村中也。○沙彌校の計畫は十一年頃より也。

(永田慈明師藏)

遠藤の書状は御返壁申上候

吉川日鑑師宛 明治十三年三月十八日

本月十三日妙圓寺に於て芳墨拜讀先以愈御清福御巡教之段奉法喜候陳は堀之内交代之事云々御申越之旨委曲領納候右は御申越無之候も固より撰擧の見込候處今般殊に御依頼も候はゞ猶更取斗候事故此段御省慮可被下候 ○先般の野書は慈航の寺名並に住所相認添度候故糊封不致置候野生朝經出席中草卒に小僧共出郵候段不敬相極甚慚愧に奉存候右慈航の寺は熊本縣下下川尻横町法宣寺住職貫名慈航に御座候 ○佐渡の處は素より小國故先方の申立通に御見込被遊候至當と野生も相心得候 ○中村の一條は東京裁判所にて彼等の申立不立更に上等へ相願候處是又同様申立不立全く彼等敗北と相成候故不遠内鎮定之事と見込候下谷徳大寺の處は未定に候得共此又東京府廳へ數回陳述之次第も候得ば是又不遠内見込通に可到と心得候何にし相川日讓には殆んど困却仕候 ○今に試補試験未定願閉口仕候諸

宗一般の事は大略如此佛法の不振は可知也歎息の至に候我宗は各宗本省等に不拘別頭に振學の事に着手無之時は諸宗一般の弊風に相流可申候専門校の事貴縣下別而御丹精奉願候 ○來月一日は愈諸國巡回御發途之由實寸隙無之御布教煩勞深想像仕候時下寒暄不相定候得ば折角爲法自愛專要奉祈候北越へ御回り柏崎に御出に相成緩りと御休息被下候様奉願候當時任職智存と申に豫申聞候故御遠慮なく御指揮奉願候先は用事回答のみ 草卒布字 三月十八日 頓首

日

薩 (花押)

〔追書別紙〕

越後長崎深光寺住職願書御捺印被下難有御禮早速先方へ相廻候繼目金は冥加相併金拾圓相納申上度と先方より申參候故右金子は野生預置候幸便遞送の心得候此段御含置可被下候右深光寺々連年營繕費の内献納有之候事故御心得置願上候右檀家に荒濱と申所に牧口庄三郎と申者有之近比の有財に候定而御休息相願可申上と心得候此の者も唯今連年營築費献納被致候 草卒

編者曰。妙圓寺は富里村一ノ瀬妙圓寺か。○中村の事とは舊中村檀林日本寺境内



伐木之件に付名義住職相川日譚管長を訴ふる事。○本間智存、後年相澤日果と改め村松海長寺に晋む。神樂坂の歴、須田慶存、田村豊亮はその法弟なり。

貫名日達師宛 明治十三年三月十九日

八〇

春暄和熙愈御清寧法喜之至に候偕は此度日鑑師御事延山祖師堂再築施助勸募旁布教の爲に本年七月比々九州筋巡回候趣に候就ては其節何卒率先盡力周旋被下候様懇頼申候九州巡回は身延始の事故百事不調和のみと想像候故地方寺院等の嚮導に非んば難届事と存候得ば何分可然御取計願上候尙愈の巡回日限等は該山執事々及御通知候間左様御承知可被下候 ○先回唯妙老歸國之節委曲申傳候通此節は人材養育最大事之事故何れとか教院の盛立を深冀候就ては公立の教院外に更に私立の沙彌校相立小童輩の秀逸なる者或は貧にして養育難相成者等救助養育の爲世出二道の爲に沙彌校設立し數年の後は靄然たる一叢林に到らば此内より多少の法器も出立すべき哉と深見込候故貴聖始有志輩御勸辨被下本年より多少の資本各自に適宜御積立願上候尙此事は唯妙老へ御問合奉願候○文靜事は不相變動學仕候本科生第二級席次第九番に候見榮は同級第十七番に候本年中に卒業は如何哉と見込候學科も逐年

變遷し次第にむつかしく相成候由也此は世上一般學事進歩故深歡喜仕候左すれば本宗教院の學科も従前の通にては甚不都合哉と心得候不遠内改正の見込に候文靜事は兎に角病生にて昨年來より漸次消瘁し先は胃病の由に候故本年一月々洋風醫佐々木東洋先生と申者に掛り日々服藥療養致候 ○偕□□〔人名〕事昨年冬より兎角青樓等遊涉の由故本年一月中嚴教督責相加置候得共尙以不相改二月比より頻に他行し最早二十日餘りも歸院不致風聞には巡查發心の由にも申者有之候故教院は退校の事に取斗候左すれば彼如何なる姦計を以て資縁家より金子引出候も難斗候得は至急に其含に御取斗有之度と爲念一寸申上候惠啓老は不相替勤勉就學且品行も方正肝服に候泰信老は先々無事勤學六月には卒業に可相成哉見込居候 ○中山へは久保田日龜師昇山の事に相決候 ○是純師も新潟縣下中教院教師の代理無之に付來四月初旬に彼院へ赴任の事に相決候就ては本院の教師闕乏困却の事に候野生も眞實薄福にして人材に頗る乏敷始終窮迫候のみ何の日に歎充分に師資相調候事に可成哉と日夜に歎息候のみ也 ○幸次時々貴地の景況は勿論信徒の動靜貴師の履歷を逐一頻々と御報知可被下候多少の慰情不過之と深相願候 草卒布字 三月十九日 頓首



編者曰。平山見榮、本義院日綱。水戸の士。鷄溪舜師の徒弟。大檀林に入り、卒の後、守本師と共に同人社に學び、秋田中教院教師。山形大寶寺、宇都宮妙正寺歴住。明治廿九年八月二日寂、年四十四。○惠啓。一心院日觀。鹽田氏。六出と號す。島原の人。本佛寺より熊本本妙寺に晋み、明治廿四年三月三十日化、壽三十四。○是純、小林董師。  
(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年三月卅一日

寒暄不適に候得共愈御清安奉賀候偕は無滞御發途御巡教之事と遠察申上候信州は別而寒氣も甚敷候得ば折角保養專要に奉存候本月廿四日の芳墨拜讀仕候不相變周兵衛一類種々紛々申立候事布教之大賊と深相心得候乍然格別之事も無之由大慶に奉賀候加之耶蘇之醜類種々申立候事深可厭惡事と奉存候得共此又風前の露終に消滅之事と奉存候先々御管内布教も御都合宜相濟候事は奉賀候 ○平塚要法寺等の不都合の事は該地方寺院檀徒等の歎願等も種々有之候得共何分据置難候故該事顛末大略相認進退とも本省へ相伺申上候見込に致置候其内取調候事も有之未だ落着に不到候乍然不日相決候見込に候更に後便に可申上候 ○中村事件は未だ落着に不到候相川日讓の姦惡には頗困却候 ○藻原上等事件も未落着の處此比

備前妙林寺大覺僧正の木像の義に付一昨年より種々公訴に相成居候處今般大審院控訴に相成又々大教院に相關し殆んど頭痛歎息仕候護法にも外れ勿論利國益民の事には不相成只々雙方とも我情私欲を爭論するのみ彼の可惡は勿論なり此の方も可厭ものと相心得候何そ局務可厭事の多端なるや此に引かへ諸教院とも生徒寥々不斷事如縷との事に候何そ又學事の稀なるや是又歎息仕候 ○四月大會の事御申越之旨豫て昨年御約束も申上置候得共後にて相考候處里見日珙師永年登山盡力も有之候得ば大會導師御勤に相成候はゞ本人之面目にも相成永年勤務の慰勞にも可相成と相考候得ば野生登山無之方可然哉と見込候決して野生勞を相厭候譯には無之候得共右等の事心付候故御問合申上候且本院の處も是純は國へ引取り生徒取締方にも差支へ局務も紛雜等の事も有之旁以御出先へ御照會申上候夫とも山表差支の事に相成候はゞ固より野生より申立候事故何れとか操合登山可申候此事日日御繁忙御察申上候得共一筆御回答奉願候 先は用事のみ 草卒頓首

三月卅一日

日 薩

編者曰。小諸實大寺御寓鑑師宛。尙記して曰、「實大寺に於て請取置御着の上御届可被下候」。○是純は小林董師。十二年五月より新潟中教院教師。貫名師宛の狀に



よれば三月下旬に下越、四月赴任らし。

三四八  
(清々寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年四月廿二日

八二

乍御煩筆御巡回寺院の日割等御隨身へ御申付御申越願上候

上田本陽寺々之芳墨薫讀仕候先以時下無障御巡教之由法喜不過之乍然道路艱難氣候之寒烈等は來示に而從前の思想よりは一層相増し想像申上候且つ信州は此迄巡回等の事も無之處故百事御不都合之事のみ多分御察申上候越後は諸本山とも連年巡回有之候處故亦大に邪組(マユ)の風景も少々有之候哉とも被察候得共信者は多分の處故巡回は致宜敷地方に相心得候然し本年は北海道迄御布教々九州迄に候得ば實に御案事申上候長々の事故隨分時候大切に保養專一に奉存候 ○四月大會の處は御來示の如に候得ば五月十日比此地發途歸山の心得に候故此段省念奉願候 ○野生も二月初々風邪の處今以至愈無之最早服薬も百二三十帖相用候得共全治に不至困却仕候乍然來月十日には可治哉と相心得候此節は音聲も相止り談話にも差支候程に候本年之不順には一同病生には相障候事と被察候 先は用事のみ

四月廿二日

文

嘉 頓首

(久遠寺藏)

久保田日遙師宛 明治十三年五月二日

八三

逐日春暖益御清穆至祝偕は此度武見北國行に付又々登山執事勤務の由爲法の御盡力深忝存上候精々丹精依頼申候就は日鑑師不在に付本年も又候野生登山大會相勤候事に付本月八日晴雨とも此地發途小田原泊九日沼津泊十日萬澤泊十一日身延着にて歸山候間此段御心得迄に通知候度々の通行故沿道寺院送迎等の事は無之様御取斗被下度候度々の登山にて人々の手數相掛候事は深痛心候間此段御酌量可然御取斗被下度候餘は近日面談縷々可申述候時下御自愛 草々頓首

五月二日

日

薩 (花押)

編者曰。鑑師北國布教中にて武見日恕師執事長。

(日遙上人所載)

吉川日鑑師宛 明治十三年五月三日

八四

寒暖不均之時北地之御弘通は如何哉と遠案候處今日潮郁老々の書面にて果して御病惱も重

三四九



大に候由真に警愕候北地の事故良醫も如何に候哉乍然高田は從來病院有之候得ば可然國手も可有之哉と察候故隨分御手厚に療法有之候様奉存候特り祖堂再築之成否に關候のみに非ず方今宗規作振之折生憎人材乏闕に候得ば宗門之盛衰に關係候事故爲法深御自愛速に御全復に相成候様佛天に祈誓深奉切望候 ○野生も二月初より風邪之處昨今次第に快方に相赴候故愈八日に出途十二日に着山の心得に候此段御省慮奉願候御巡幸は六月十六日東京御發輦之由左すれば夫迄滯山も如何哉と心得候得共登山之上方寺院とも篤協議臨機之取計に可致候間此亦御省慮奉願候 先は不取敢御伺申上度 草卒布字 頓首

五月三日

日 薩

編者曰。本書、高田長遠寺寓宛、鑑師の自筆に、「八日着」とあり。○潮郡は武見日怒師。  
(清々寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年五月七日

時下甚不順に候故北地は殊更に御病體に一層御凌兼候半と深御案事申上候一月已來之病原故餘程重大に苦惱可有之哉と奉存候得共徳者壽と申言有之候得ば御壽命には別意に無之

とは奉存候得共丁重に御療養有之候様に深奉祈候乍然御長病は難免哉と察候故百事心靜に攝生保養奉願候此地にも一同心配朝暮御祈念申上候今般此地總代として教解師を以御見舞申上候間定而看護人も嘸疲勞もと心得候故手替りに看護に御申付被下候様奉願候只一日も早く御全復に相成候様深奉專祈候其内少くも御快敷方に候はゞ一先東京御出張篤と御療養候様可然奉存候病の重大中は旅行は不宜哉と御案事申上候餘は委細教解師可申上候折角御保養奉願候 先は御伺申上度 草卒頓首

五月七日

日 薩

編者曰。鑑師の朱記に曰、五月廿三日封新發田蓮昌寺開縁。教解持參。  
(清々寺藏)

貫名日達師宛 明治十三年五月十四日

華墨忝披見候偕は轉派の儀御照會に候得共右は先づ彼の派へ相願候上彼派に於て支吾無之上にて兩派の管長或は各本寺々兩願の上方廳の許可に相成候事に候得共必ず彼派に於て領諾は保し難し左すれば徒に宗門中の波瀾のみにて布教上に於て大に不都合相釀候事と被



察候それも念佛等の權宗に候はゞ轉派も可然哉に存込候得共俱に題目宗中の事に候得ば各自信徒等の觀心さへ心得違無之候はゞ且く其寺は妙滿寺末なりとも差支無之事と心得候故先々御見合可然と存候只々壹人も多分に題目宗の増加候様布教專努に願度と存候 ○御遠忌等盛大に御修行の由爲法深祝賀候尙精々地方教導專要に願上候 先は回答のみ 草卒

五月十四日

日

薩

○ 此程唯妙老々沙彌校へ資本金本年分金三圓被納候段御序も候はゞ厚く稱揚願上候

草々

編者曰。熊本縣川尻町横町法宣寺住職宛。

(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年五月廿三日

八七

白根惠光寺に而の御認芳墨拜讀諸は少々は御快敷趣にて高田表御發駕御巡回之趣病惱相押し強而説教等被遊候由如何にも爲法御勤勉之事と察し深恐懼之至に候右は病症も未だ肺病には無之候とも漸次に不幸肺病に變症候も難斗と奉存候得ば事は初に慎むの儀に候故先々

大事を取り斷然布教中止し養生專一に願度と見込候數々の寒胃相押し必ず肺症に相至り候は目下に野生並に生徒中に四五輩も實驗有之事故縱令醫師は肺症に非ずと申も頼難候左れば新潟は地方不宜と察候柏崎なり高田なりに而御養生可然其内柏崎は醫師に可然者如何哉と被察候得共起居の便利には妙行寺可然と存候故同寺に而御養生願度く醫の處は高田なり新潟なり御呼寄に而事濟可申哉先々此に而御養生被成吃度全治に無之已上は御巡回無之様に致度尤も餘程長引様に候はゞ一先東京御歸錫可然左すれば越中地は斷然御見合被成東京に而御全快後は直に九州地へ御越可然と奉存候間何れなりとも篤と御療に相成候様爲山爲法深御自奮奉願候 先は不取敢此段申上度 草卒布字 頓首

五月廿三日

日

薩

編者曰。封書に侍者の註記あり。「隆誠持參六月五日島妙蓮寺着」。○白根は中蒲原郡白根町。(清令寺藏)

貫名日達師宛 明治十三年八月五日

八八

妙昌寺々の華翰拜讀時下愈御清穆至祝引續日修尊前巡回供奉隨徒御盡力之由爲法之丹精な



りと深感肺仕候就て身延日鑑師巡回之事に付先般縷々依頼申遣候處早速に兩度迄御回答故其<sup>(マ)</sup>旨字脱カ日鑑師へ申遣候處同師も殊外喜悅大に力を得樂居候次第に候左様有之候ものは九州筋一圓不案内なり知己は壹人も無之實に腹心相談之人も無之候處幸に貴聖は舊知に候故百事周旋に預度見込事に候然に此度書狀の旨にては一時失望無量に候身延の事は一宗の根本也然に遠忌正當に祖堂落成に無之候時は特り延山の恥辱にのみ非ず一宗の汚辱此節柄外國人も參觀に登山時々有之候由に候皇國教法の萎靡<sup>(マ)</sup>たるを顯し國辱の一端とも心得候也然に祖堂の建築漸く半に不到唯今更に五萬圓を要せざれば落成の地に難到本年築費の涌出九州地方を第一着に見込候越後一國にて此の處、紙破損數字逸失得ば九州は更に一層の好結果可有之と深見込候故貴聖に於ても此度は萬障差操合拮据盡力被下候様深願上度尤も此事は日脩師へも巨細申上置候間篤と御相談被下度御遠忌は再會しがたき事に候へば遺憾無之様吳々も願候此書狀披見の上至急に一筆返事可被下候貴聖の動靜日鑑師へ通知に及度候即日回答是祈 草卒不宣 頓首

八月五日

日

薩

編者曰。此の時達師は脩師に隨ひ九州巡回中。

(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年七月十一日

八九

本月六日滑川にて御認芳墨同十一日に拜讀時下梅雨等にて舊痾發動の由も有之昨今は大略御全快の由爲法奉賀候越中路は髻中聖遷化後に屬し思召通に不參候由遺憾<sup>(マ)</sup>に心得候得共聽衆參詣は不相替群參之由此又無據次第に奉存候 ○日(一字不明)師説教之容子巨細御申越大略不學者之見込は如此者に候拙劣不可謂也と奉存候乍然市有定價不用人之言之也

〔此の處用紙截斷、文意亦中斷に似たり。〕

御返事申度と存候得共四五日已前同人不在故歸局次第思召の處話可申候神保事も本月中には裁判<sup>藻原の件也</sup>決定可申と見込候故右濟次第一先局務引拂爲致度見込候相川日讓の公訴は未だに落着に無之東京裁判同上等裁判横濱裁判千葉警察等調等唯今迄數十返の煩手頗る困難相極候此件は何の日に落着に相成候哉は見込無之候岡山不受派控訴の件も大審院は裁決に相成候得共此より更に第二上等に於て覆審裁判の由醜體相極候宗門の體面を大に汚し彼の大家説教可呵より更に一層の厭惡すべきの至に心得候慙々傷々 ○本月よりは京都立本寺清水日運聖宗局在勤の事に相成候録事の代は未來殆困入候山梨管内課金本院昨年分より納金



無之よし會計課より申立梨羽より度々申遣候得共未辨の由に候間御書狀の幸次に一筆取締一言督責奉願候 ○野生病氣は昨今の暑氣にては少しづゝ宜敷候得共元來肺に關候事故全治は彼土得聞と記荊相請候 ○暑中に相向御先眞暗に御布教は眞に困難深奉察候慈航子より尊前御巡回には願ても先導なり御供なり仕度由申來候何にかの御序に彼れへ一筆御遣有之候はゞ多少歡喜と見込候故奉願候住所は熊本縣下下川尻横町法宣寺貫名日達に候 ○三村教正時々尊師動靜下問有之候處々身延巡回有之候間抽精取持有之候様申聞置候由數度申來候必也九州筋は實效可有之と奉存候 先は用事のみ回答申上候 草卒頓首

七月十一日

日 薩

編者曰。此書、高岡大法寺御寓とあり、尙曰、「御不在に候はゞ御出先へ御届可被下候」。○髻中院日珠。大法寺主、優陀那門。飯高玄講主。説教堪能の人。明治十二年八月十四日寂。壽五十二。○清水運師、津市佛眼寺より本山立本寺六十六世に晉む。松ヶ崎の妙泉寺に隱居、明治三十五年五月二十一日寂。此の時宗務執事。茶道の名人。寶藏品夥多、其徒如雲。

(清令寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年八月七日

逐日炎蒸難凌愈御清穆至祝貴境之時候は如何に御座候哉定而御巡回中繁忙故別而炎熱之程御察申上候乍然宗祖之威靈と尊師德義とにて御障無事と奉賀候昨今眞の客地百事不如意の事のみと御察申上候 ○偕は別紙耀妙々申來候故少々は御巡回の參考にも可相成哉と察候故右書狀其儘呈貴覽候 ○慈航之處も突然別紙の通申來候故甚不都合と相心得候故野生を更に本人へ申遣候間定而改て御隨從可申上とは心得候得ば此書狀は御含迄に申上候尤も尙本人々更に來狀可有之と見込候故後音は更に後便に可申上候 ○此節は何國へ御巡回に候哉更に不相分候故御面倒ながら御隨身へ御申付御巡回箇處付日割等大略御申越奉願候 ○梨羽事は此度眞間山法縁末派等々住職招請に相成本人答には進退とも身延山の御見込思召次第に候故一人上に於ては決答難申由に候に付久保田が野生に照會故野生に於ては可否可申事に無之候故本人並に日鑑師の御思召に可有之と心得候乍然甲州の處も無人故本人他國へ移轉は該地の不都合は無論と相心得候也と返事致置候何れ久保田が内々御照會に可相成と見込候得共幸便に一言御含迄申上候尙御勘考置奉願候先は用事のみ 草卒頓首

八月七日

文 嘉

編者曰、耀妙は中洲振師。○慈航は貫名日達師、後の岩本貫首。○久保田は中山



日龜師。

三五八  
(清令寺藏)

小泉日慈師宛 明治十三年十月二日

九一

華翰拜讀時下秋冷愈御清穆至祝陳は岩本後任の事に付昨年來種々御配慮忝相心得候云如申越之旨逐一承領仕候早速に耀妙方へ申遣し何にも住職の運に取計可申候乍然全く引移候事は萬々不調事と見込候只々目今之處任職名義相付け一兩年間に移任の事に漸次取計可然と見込候 ○教院之事は野生外に見込有之候何れ後便に可申上候 ○慈忍事無事勤學御省慮可被下候且資助は未だ十四五圓も有之候間決而御配慮被下間敷先は用事のみ 草卒頓首

十月二日

文 嘉

(昭和十年五月廿日延山へ加治未亡人御本尊奉納同行歸途於下山村佐野信一氏宅  
寫之者也稻田海素)

(稻田海素師寫藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年十月廿一日

九二

客月廿八日竹田妙泉寺にて御認華墨本月四日に落手難有拜讀早速御返事可申上の處折節時候の交換故邪氣相感痴病伏枕故遂々乍存遷延し且播州地御布教の日限も相切れ書狀出し方

に差支候故猶々無音に打過失敬御海容奉願候儀は不相替布教御煩勞深奉感服耶蘇徒巨魁を御説諭彼等深悔悟之由縷々拜見實に尊師の御誠實に相感し候事野生輩も深爲法奉賀候然し寺院招請に斷兼頗御困迫の由は御察申上候然し隨喜渴仰上々來候事に候得ば一は祖師の威靈とは乍申一は尊師人望の令然處也と奉存候 ○眞骨堂上棟は明年舊二月と相定候由也十一月大會には歸山の心得に候四月大會は推てと心得候得共何分其節不快醫師も深相止め候故中山上人相頼相動候此事疾可申上度心得候得共尊師御病中故秘して不申上候也 ○松本玄妙々具狀伺は甚不心得之事故早速本人へ申聞候處別紙の通申參候故先般伺は御聞流しに可被下候此事は七年俄に交代の際不得止事情々して實臨時の取斗例伊達正宗の百萬石の朱印を伊井直孝の火中に屬すると一般に御座候御懸念被下間敷候 ○中山々眞間の事申上候事は實は日環も歸望の様子故程好御取斗被遊候事却て可能と見込候 ○明年は何比に御歸山に相成候哉荒々の見込幸便御垂示奉願候 ○丹後名産殊に過分の品態々御遠投深奉謝候四五日前に正に難有落手頂戴仕候本日又久保田日遙々爲替金貳百圓正に落手御預置申上候管長費料戴候ては甚不宜利と心得候得共他山の嫌疑も候得ば先々御預置申候梨羽は此節甲州へ歸縣中故其儘是又預置候 ○試補撰擧の一條未だ治定に不到深痛心仕候右は容易不



運の様子故此比各宗とも連署切迫願書其筋へ差出候然し許否は難斗候 ○追々寒氣に相向候得ば別爲法爲山深御自愛奉願候爲山とは乍申引續の巡回は眞に御察申上候乍然祖堂の普請一般評判宜敷候故明年は美事の落成と從今相樂居候 先は用事のみ 草卒頓首

十月廿一日

日 薩

御巡回先不相分依て中洲へ相托呈進候

編者曰。十一月七日落手」と鑑師日記。○兵庫縣朝來郡竹田町妙泉寺。

脇田堯惇師宛 明治十三年十一月五日

過日態々足勞忝相心得候陳は別紙之通日鑑師より信夫先生へ添削相願來候間可然御取計可被下候金子は郵便にて間違候ては不宜候故海解に預置候間來院の節御請取可被下候夫迄の處妙源寺に一寸立替相願日鑑師自筆の封へ投入し水引相掛差上願上候野生出立は一日引上げ明六日正午に發途致候何れ廿日には歸寺候桐生行の處御隨意可被下候 草々

十一月五日

日 薩

妙源寺聖へ宜敷致聲可被下候

編者曰。本間海解。白金覺林寺住職、立正大學長、明治四十一年三月十日遷化。

○脇田師は當時本所妙源寺に寄宿、信夫塾に通學中。○この前に一三〇の狀あるべし。

(脇田孝二氏藏)

吉川日鑑師宛 明治十三年十一月廿日

馬關御認の芳書身延方丈にて拜讀先以御安康御布教爲法奉賀候此度の大會寂寥相極候由に候乍然百事無事法會相濟候段御省慮可被下候 ○眞骨堂上棟供養明年三月彼岸の由其節は必登山の心得に候故是又御放念奉願候 ○明年御遠忌日限は御思召の處里見等と協議し大略思召通にて可然と奉存候得共少數相變候處は更御伺可申上様の事に候法用順次等も先例に照し相定御伺申上候愈御治定の上活版に申付の事に候 ○祖堂普請の處は大略宜敷拜見候一二不足の處なきに非れども充分と申譯に不參は世界一般の事先々結構に相運候事と被存候里見盡力は實に感服候 ○玄妙俊光兩聖昇級の事は相心得候御省念奉願候 ○先回の復書は先月耀妙へ向け呈進候定御落手と奉存候 ○新註序は早速信夫へ申遣別紙の通改正



に相成候尙御心得迄清書爲致候猶能、御勘考奉願候少々は御思召とは相違の處も有之哉とも野生拜見候得共其まゝ御廻申上候 ○昨年來一日の休息なく巡回布教嘸々身心とも御疲勞の御事深御察申上候乍然諸天の加護法體先々無事祝賀申上候逐々寒氣凜冽の候に候得ば隨分御自愛專一に奉願候 ○野生も昨十九日に歸京し廿日休息且は支度等致明廿一日上州桐生寂光院新寺開堂供養へ相赴本月中は他行月末に歸院の見込候何になり東京用事も候はゞ御申越可被下候先は用事耳 草卒頓首

十一月廿日午後

文

嘉

編者曰。本書、表書は「福岡縣瀬高驛尊壽寺寓」。鑑師自記曰。「同月卅日着。」鑑師九州巡化中、長崎より川尻法宣寺に着こにて越年。 (武見潮寛師藏)

新居國太郎殿宛

明治十三年十二月二十九日

九五

愈月迫嘸々御繁忙之御事と御察申上候過日は參上不相替種々御世話難有御禮申上候野生事廿七日午後第四時比無滯熱海へ着し乃藤屋へ宿泊無恙日々入浴候間御放慮可被下候一月八九日頃には歸京の見込に候 ○其節相願候楊枝は幸便も候はゞ武本榎へ御遣置願上候 ○

梁山事は意外之御世話に相成深御禮申上候若ヒゼン全治候はゞ御都合次第東京へ御遣可被下候但し進退とも貴邊に御任せ候間可然御取斗可被下候但々御迷惑に相成候半と此のみ痛心何れ面晤之節萬々御禮可申上候歳末寒氣甚敷候故別而御自愛肝要に存上候 餘は百事期來年候 草卒

十一月廿九日

文

嘉

編者曰。梁山は清水梁山師。

(故新居國太郎氏藏)

信夫榮先生宛

明治十四年一月三日

九六

華墨拜讀新年敬賀愈御清穆至祝申上候扱は野生申上候事大に遅行に相成本年は何分餘日無之浴泉行御見合せ御尤の御事と奉存候偕は芳吟下與甚恐縮の至に奉存候賞褒溢美慚愧至極不敢當乍然芳情は深奉謝候 ○陳は昨年一寸御話申上候祖書遺文錄跋漸くの事に而相綴候得ば何分不文意味相塞候半は無論に候得ば何卒先生換骨御充分添削改正被下度様伏奉願候最上木之期甚切迫候故申上兼候得共至急に御加筆奉願度失敬の段は歸京の上縷々可奉謝候野生歸京は八九日比に候 先は用事而已 草卒不乙



一月三日

文

嘉

編者曰。熱海にて迎年。

(脇田孝二氏氏藏)

久保田日遙師宛 明治十四年一月十八日

九七

新禧萬邦同様慶祥之至に候扱は八日之書狀正に落手拜披候不相替法務被成候段大慶之至に祝上候昨年登山之節不相替祖山保護之件に御盡力忝御禮申述候就ては本年駿州邊巡回之儀御照會之旨委曲承知致候右は強て望候譯にも無之候得共道路改作の儀夫々勸奨致度見込にて昨年歸山之節路すがら四五ヶ所も説教と見込候處燒失等之事にて廢絶に相成候一は殘懷にも存じ一は該地信徒兩三輩も企望難默止邊と相兼本年二月下旬にも更に巡回可申之約束候得共未だ愈之日月見込相立兼候得共何れ三月初にも日鑑師東京歸京之由に候得ば其前に派出と申事にも參兼候故右日鑑尊前歸京面會之上其節に治定之日限は可申上候間其節は百事可然御周旋被下度願上候夫々の寺院へも右之旨幸便に御申聞置可被下候外に寺院は未だ不申來候縱令申來候とも巡回日割等は一尙貴聖に御任せと申上候間可然御取計被下度候先は右用事回答耳 餘讓後便候 時下甚寒爲法萬々自重專一に存候 草卒頓首

一月十八日

日

薩 (花押)

(稻田師寫藏)

三村日修師宛 明治十四年二月六日

九八

寒明候得共依然寒氣凜然野生は病性頗困却候尊聖師は御健康故御障無之教務被遊候半と深奉賀候備は熱海々相願候草稿御配慮被下候儒生に御添心被下候段御厚情難有御禮申上候委曲御注意被下候段尙御序に先生に謝言丁重に奉願候猶恨は尊師此序に付文字に關せず大體立論之可否相願上候處更に一言之垂示無之は如何の思召に候哉深慚愧之至に不堪候其節早速に御返事可申上之處過日之大雪に被中爾來今日に至迄伏枕候故何分にも氣分相閉候故御無音に打過候本年は寒さ甚列と見込候故豫防の爲に熱海へ浴泉候得共所謂焦石に水と歟にて十日間之養生も水泡に相屬 (以下切斷一空)

編者曰。封筒には「二月六日發」消印「東京一四、二、六、は」とあり。草稿とあるは遺文錄跋の事にや。  
(故冷泉要惇師藏)



中洲日遙師宛 明治十四年二月九日

九九

一月廿四日之芳墨二月五日に落手披見先、無異越年被成候段法喜無量野生も先、壽命も有之候のみ也省慮可被下候早速に返事申答之處折悪敷一月十九日大雪に中られ午後連日伏枕今に半は臥床に展轉候故遂々乍存遅延候借其は捨置地方教導並に西身延新建の見込中教院設置等の事は法門の快事不過之深隨喜候就ては愛知之處は兩方掛持にて可然名は愛知教師に而地方教導之爲に派出之事に取斗可然哉其時々之事は臨機に取斗可被成候畢竟は宗門の爲に相成候はゞ地の彼此廣狹とは不諭して可然と見込候他人之囂々不足顧也只、結果を相期し他日の光榮深企望候唯憂處は學事に勞する人寥々猶晨星比する足らず後來如何の者哉と焦慮するのみ野生桑榆甚切最早餘命幾多なるべし斜日の事業亦可知也貴聖等憤勵を聞て竊歡喜するのみ至誠貫天何事業可不成乎貴聖は貴聖の志操を貫徹せよ數年間には必白日を見の光業あらん深企望す只、野生不及見而已 ○一場の演説は言々眞に感佩致候 ○設後布教之目的とは別事に非ず布教説教等の教導その施行の隆夷なるべし目論見とは建築の經營等に付理財收木等許多の目論見なるべし別意無之哉と野生見込なり先は回答のみ

草卒布字

二月九日

文

嘉

○

野生の病は少々も暖に相成候はゞ必全快可申省念可被下候本年は寒氣凜烈と見込候故豫防に浴泉候へどもやはり寒氣に被中候老木の養は徒勞耳雖然楓葉は將落而増色野生雖疲驚死期一戰更に法場に倒れんと欲するのみ空敷老疲を以て屈死せざるなり

編者曰。此書、筑後國生葉郡吉井町萩尾峰吉方にて、中洲耀妙師宛。

(流川本佛寺藏)

久保田日遙師宛

明治十四年三月六日

一〇〇

寒氣依然如嚴冬春雪庭前に充滿病生頗難凌定て御山は別寒氣凜冽と御察申上候借は野生儀十七日小田原發途沼津泊十八日萬澤泊十九日身延着の見込に候故此段一寸御通知申上候萬借期面述候 草々

三月六日

日

薩

(『日遙上人』所載)



尺 牘

吉川日鑑師宛 明治十四年四月十二日

昨年爾來一日の寸暇<sup>ウツク</sup>布教弘通も無滞相濟御歸山之由深奉賀候實御煩勞言語非所盡也昨今御出京も有之候事日夜相待申上候愛知之都合に而御枉駕無之段不得止之事と殘情之至に不堪候野生も昨今不相替伏臥候間<sup>ウツク</sup>縷不能何れ後日再便に可申上候 ○信夫之點作有之昨夜相届候間其儘幸便御送申上候就は此文を清書壹紙信夫へ御惠投被下候様先生方野生へ委托候間清暇揮毫願上候先は用事耳 草卒頓首

四月十二日

文 嘉

吉川日鑑師宛 明治十四年四月廿七日

玄妙院寄托之華墨拜讀先以永々の御布教も百處無滞相濟御愛出度御歸山は實に爲法爲山深奉賀候本年御遠忌登山之儀は野生も一生之幸榮と相心得候故本年加州行參廟も延年申遣候位に候得ば固より在山法務之一端相勤度素望の事に候得ば既に昨冬も里見氏へも御山の都合に而は三月上棟後引續在山候ても宜敷旨申候位故此度之命は實に難有相心得候得共何分罪業之故歟肺病に而専ら療養中故背本懷甚以殘懷之至に不堪候尤も病症も難治と申事に

も無之必ず全快とは相信居候間御省慮奉願候巨細は耀妙より御聞取願上候 先は復書迄

四月廿七日

文 嘉

再啓

過日遺文錄施主近江屋與左衛門等々遺文錄版本奉納に付爲永代御經料金五百圓相納度候間野生其宅迄幸便立寄願來候故過廿日に澤田治助の宅迄參法味相上献牌一覽し候節右五百圓の金被相納候故過日中黒田正覺寺へ托し御届申上候外に菓子料等三包是又同様寄托候間御落手之上は本請取賞詞なりとも幸便に御遣可被下候

編者曰。玄妙院駕峯日慧師、白山蓮久寺。當時、鑑師前講として巡回。能説の人。  
○里見は身延執事里見日珙師。○耀妙は中洲日振師。○近江屋與左衛門、藤懸亥淵。和上の碑記あり。○遺文錄の版本、堀之内に藏す。跋文本書文篇に收録。

(清々寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十四年六月廿九日

本多より香壹包呈上仕候壽善へ相付し候間御落手可被下候

尺 牘

三六九

三六八

一〇一

一〇二

一〇三



梅雨鬱陶敷歸路御輕利に御歸山被遊候半と奉賀候御出京の節は不相替失敬のみ多罪無所逃也御海宥可被下候偕は身延參詣道路之事に付金原明善と申人貴山へ向參堂候に付點書相付候右人は眞の有志の者也野生の聞く所に依れば随分の豪家なれども悉皆家産を傾け之を人民の公利に資用し大に國益を企圖候由に候諸縣の令にも面會直接し往々激論候由にも風聞仕候乍然至て溫厚質朴の容貌決而色莊者に無之候間高襟吐露御話被下度と野生見込申上候猶御面會の上其景況は御鑑定且御見込等も後便に御垂示奉願候實は諸堂再建中は餘事に相度候事は萬々力不能は無論に奉察候得共猶御考案も被下候はゞ善方便もと奉存候故不取敢金原明善氏に點書差遣候尤も身延より出金は不相成之旨は金原へも大略話置候唯々地方信徒と計畫し道路改良の運に爲到度の見込に候のみなり壽善歸山に付取込中走筆相認候先は爲念申上候 草卒頓首

六月廿九日

文 嘉

編者曰。鑑師自記曰。七日齋。壽善持參。○壽善、森田氏、中山教師、中山法宣院、大塚本傳寺等。此の人の徒弟に森本日露師あり。○金原明善、靜岡縣の人、天龍川治水工事、諸縣下の植林事業に盡瘁す。本宗の篤信者。大正十二年歿。年九十二。  
(武見潮寬師藏)

吉川日鑑師宛 明治十四年六月廿九日

一〇四

過日は不相替甚草卒耳失敬御海恕奉願候其節は種種惠投深奉謝候偕は本月廿三日本省より教院詰壹名出頭申來候故妙現寺市川鍊秀差出候別紙甲印之書狀に付局長より懇々談話有之何れとか勘考可有之と申聞有之候尤も局長の見込は紫朗殿とは少々差異も有之其旨速に縣令へ回答有之候由に候野生出省局長へ相談もと見込候得共何分昨今興行中寸暇無之何れ三十日には出省相談之模様は後便に可申上候 ○此廿四日に金原明善君と被申候方野生方へ來訪有之駿州口身延參詣之道程甚難路頗運輸は勿論自然來詣之人も困却可有之間何れとか道路改良之運に致度之見込懇々話有之候就ては野生も豫て愚考有之候故昨年十一月登山之節久保田氏へ相話置候道路改築之見込は如費額は之を地方信徒に相募而地方官之保護を承先は岩淵口なり興津口なりより修築に取掛度左候はゞ老人婦女等之足弱之人々心安參詣も可被致と存候のみに非ず地方政化裨補之萬一に相成政教互に相扶候景況に爲被致度と見込候此事過日御滞留中御話可申上之處種々用話相嵩居候故御話漏に相成候此事方今祖堂並本堂再築之際には甚不都合にも被存候得共此度遠忌群參之機會相失候はゞ改良之期も難計とも被察候間何れか御工風有之候はゞ善方便も可有之と奉察候此事にして成效候はゞ身



延元境内も従前之通御下渡之運之一端相開可申とも見込候故篤と金原君と御協議被下奉願候内務社寺局長櫻井君も別紙乙號寫之通申參候間御電覽之上御勘考被下度法會雜踏中故巨細認兼候間尙野生之見込は金原明善君を御聞取可被下候先は用事耳 草卒不乙 頓首

六月廿九日朝

文

嘉

編者曰。封表「丹後國宮津妙照寺旅寓中教正吉川日鑑殿親展」。九月七日出とあり。蓋いれちがへ乎。○大教院御遠忌、六月廿五日より廿九日まで。○寂中院日調。字鍊秀、市川氏。甲州五明村の人。淺草橋場長昌寺、馬場妙源寺。本山龍口寺に瑞世、爲宗同盟の争により歸退。後鎌倉本覺寺より谷中瑞輪寺を経て、大正十二年六月、身延山第八十世に晋山。開闢六百五十遠忌法要を勤む。十三年六月退藏。昭和七年八月廿五日寂、壽八十七歳。上の山墓地に葬る。嘗て宗務録事となり、總監となり、功亦多し。又よく薩師の事業を助けたり。(清令寺藏)

吉川日鑑師宛

明治十四年六月三十日

10H

逐日暑氣相催候愈御清福至祝一昨日金原老相付候書面之路線改良之一條は目今難事に候得共御勘考にて愈以御見込も相立可然事なりと御決議に相成候はゞ參詣之人々之多幸不過之深奉存候既に四月大會之節も富士川筋にて溺死に相及候も人民敢て舟を相好候譯に無之畢

竟は陸路艱難故其勢ひ奇儉相冒し舟下を僥倖せんと企望候哉とも被察候若此度陸路平坦易直に相成人車等も相立候はゞ奇儉相冒候憂も無之萬世平安參詣可被致と豫想候得ば是非此度發議を好機會とし一路平坦之運相立度と見込候乍然御山にては再建艱苦之最中故道路改良之首途に出金は無之唯々地方信徒に相募費額涌出之良策に相成候様に爲被到度と見込候野生は山に不居候故建築艱苦不相知故右等事に左袒候と他の批評可有之候得共此事にて成效候はゞ特參詣之人々多幸のみに非ず抑も地化補益不鮮少大に生開化人之横顔相打亦是護法扶宗之一端とも相考候實は惣門内の架橋さへ届兼候程に候場合に駿州口の道路着手は緩急失宜と申邊可有之なれども此を以て彼を概論難致事と見込候駿河口の難路は野生先年來より深歎息致居候事故此度金原氏の發議は如何にも公益之美舉と奉存候猶篤と賢慮御協議奉願候 ○本院遠忌も昨日にて無滯相濟候殊之外群參滿堂は勿論滿庭立錫無地と云も溢言に非ざるなり此段御省慮奉願候此も全は滿願之祖師之御徳と深奉謝候 先は用事耳

草卒頓首

六月三十日夜

文

嘉 再行

(清令寺藏)



脇田堯惇師宛 明治十四年七月七日

三七四 一〇六

過日御遠忌中は多般煩勞忝謝候倍は藤懸與左衛門小傳綴文相頼度候一兩日中操合來院被下  
度頼候今度小傳石碑へ相刻候由左すれば碑文に而も宜敷記事は随分奇抜之事件も一二有之  
候 先は用事而已 草卒

七月七日

芝二本榎町 日蓮宗教院

編者曰、藤懸碑は本書第一篇に出づ。三籙上人の案、和上及諸家の削正を經たりと見ゆ。妙源寺寓の時也。

(脇田孝二氏藏)

山崎日延師宛 明治十四年八月廿一日

一〇七

残暑甚敷凌兼候得共愈御清勝寺務被成候事法喜之至に候陳ば此度秩父淨蓮寺に遠忌法會有  
之本月廿四日此許午前第二時に立川越筋經過候に付は少々御話も申度事有之午前十時比  
に貴寺へ一寸御尋申上候間可相成御在院有之候様願度尤も即日淨蓮寺へ着の見込に候故支  
度等の御配慮は無之候様爲念申上候 先は右用事のみ御打合迄 草卒

八月廿一日

編者曰。智定院日延、久留米藩士、山崎氏。延山布教使。年六十一歳にて川越本  
應寺に特命住職(延山)。講堂面目一新、又新に輪藏を建設。薩和上所持の一切經  
を藏す。明治三十一年十一月廿九日寂、壽八十六。延山豐永日良師と相親善。

(川越市本應寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十四年八月廿三日

一〇八

剩暑殊に甚烈頗凌兼候得共愈御清福奉賀候過般は芳書並に新築繪圖等巨細に御認御廻被下  
正に落手詳細に拜見申上候且波木井氏遺文御寫も拜見仕候何れ局長櫻井氏歸京次第に持參  
巨細に話申上山岡君等へも頼願候見込に候様子は後便に又々可申上候 ○白河町信徒高阪  
氏より別紙之通申參候得共何分様子相分不申其儘御廻申上候間可然先方へ御回答可被下候  
且つ爲換壹百圓參居候得共如何可致哉更に山梨へ爲換に可申哉とも鳥渡御通知可被下候夫  
迄は野生手元に預置申候 ○野生昨今は病氣大に宜敷大略は快復之模様候明廿四日午前  
第二時比此許出發秩父郡へ參兩三ヶ寺遠忌法會臨席の事に候此炎天には閉口仕候尊師昨年  
著中之巡回は殊に想像申上候來月四五日位には歸院の見込御含迄申上候 ○道路之事件久  
保田日遙氏深盡力の由此程金原明善氏が相承感服仕候幸便一筆本人へ御賞與奉願候 先は



尺 牘

三七六

用事耳 草卒頓首

八月廿三日

文

嘉

(清々寺藏)

山崎日延師宛

明治十四年九月八日

一〇九

近年稀成殘暑甚敷候得共貴聖師愈御清福寺務被成候段至祝借過日大河原行之節臨時尋訪申上候處丁重に周旋御世話被下候は勿論殊に厚く膳部等迄も配慮被下候段忝御禮申上候歸路も一寸御尋可申之處都合にて熊谷より馬車にて歸京候故遂々御無沙汰申候且つ其節文靜へ御託菓子料金貳圓惠投是又忝受納申候何れ其内面期の節禮謝可申候 ○説教講社の儀も可然信徒と御協議被下丹精有之候様深御依頼申候其内東光寺を以更に御話申上候 ○借過日出迎等種々世話有之候檀家世話人へ宜敷御一聲可被下候先は過日之禮狀のみ 草卒頓首

九月八日

日

薩

(川越市本應寺藏)

吉川日鑑師宛

明治十四年十月十九日

一一〇

秋冷相募候得共愈御清榮至祝借身延地面之儀に付局長へも再三熟議に相及候得共何分届兼候旨に候唯々何にても再三地方廳へ出願可被爲とのみの事尤も其筋へも懇願之趣は程能く話し可置との事なり其後山岡宮内少輔殿私宅へ相伺候處生憎不在其後兩三度相尋候得共折悪敷場合のみにて話不致昨日參上候折宜敷小暇を得て巨細に話候處何れとか心配致し山林掛品川少輔に話し更に様子は面談可申候との事に候此度京都嵐山の立木伐採之儀も天龍寺へ許可に相成可申其比例を以て取計も可有との事に候大略は伐木丈の事は必然と見込候猶地面とも御拂下相願度野生の見込に候何れ來月九日東京出立十四日迄には山着仕度と心掛居候故其節縷々御話可申上候唯今信州本陽寺登山に付客來中一筆呈上候餘は後便御遠忌前嚙々御多忙之事と御察申上候 草卒頓首

十月十九日

文

嘉

○

今般登山は郡内街道より登山仕度見込候

(滿洲國承德本佛寺福島圓明師藏)

尺 牘

三七七



吉川日鑑師宛 明治十四年十月二十七日

一一一

上田茂右衛門へ御托芳書唯今拜讀候處松屋由兵衛來訪候故不取敢御報書申上候先以御清福奉賀候出張所の儀は到底不相成旨本省より内聞歎息之至に候乍然此の失敗が幸に相成必一寺公稱の運に致度見込此節連に本省へ示談申入候へば不遠成就可申と見込候 ○野生此度は郡内筋通行の見込に候處突然貞松より遠忌法會招請有之右は不得止之情實も有之候故難默止更に方向を相替へ東海筋通行と定め來月四日出發六日に貞松に着し二十三兩日の内に出立中一泊にて身延へ參着仕度見込に候愈の治定は貞松より更に可申上候先は不取敢右御回答耳申上度 草卒頓首

十月廿七日

日

薩

編者曰。托田中芳兵衛殿とあり。此人。未詳。東京の人。

(武見潮寬師藏)

三村日修師宛 明治十四年十一月三日

一一二

秋冷帶寒愈御清福千福至祝偕は惠速之處は中田へ相托し其内漸次運を以て入校之事に取斗

可申此は深く懲誡之意味に御座候芳書誤解之事に無之決而御案被下間敷候但し此は御含迄に申上候他に御話御無用に願上候 ○充治園叢書とは野生の見込と暗合に候故愈以相決し右の書名に此は篇々引續き總て老和尚小著述の類は漸次上本之心得に候博多は失念無之御案事被下間敷願上候 ○正義は更に十部送致候 [中間切取りたるに似たり] 出立身延へ歸山遠忌法會臨席の心得に候尊前も延山參詣之御話も有之候得共多用御見合と相成候哉願は有之度ものと存上候餘は後便に縷々可申上候先は用事耳 草卒頓首

十一月三日

文

嘉 拜上

(故冷泉要惇師藏)

吉川日鑑師宛 明治十四年十二月十六日

一一三

逐日寒氣嚴愈御平安至祝過日中は種々御厚配深奉謝候久年御心懸之御遠忌も無滯殊に盛大に御修行は實前代未聞之大美事宗家之面目不過之と深奉賀候乍然百事御配慮之處故事濟候得ば嘸々御疲勞と是又深遠察申上候明年御巡回も有之候事故別而御保養專一に奉願候野生も御蔭にて遠忌法會に臨席は眞に難有殊に無事相勤候事は多幸と自喜仕候且つ其節は七條



等種々注意惠投御禮申上候歸京後早速禮狀とも心得居候得共何歟一事なりとも定候事申上  
 度見込居候得共何分何事も不相定候其内池上交代云々の事は既に身延に於て御披見に入候  
 通耀妙へ付屬有之候末に末寺へ回文にて後住之儀は耀妙は純兩師之内に見込且つは異見も  
 可申立旨書達に相成候故舊弊連は是非藤原日迦へ後住相定度内決云々申上候餘程動搖有之  
 候得共野生懇々説諭教誡相加へ漸慎定<sup>(マ)</sup>の運に相成り先々耀妙と大略相決候何分昇師に於耀  
 妙は望無之様子故百事とも故障勝に候夫故一層困難の次第に相陷候實は藤原へ昨年比より  
 付屬の内約有之候由故説諭の困却は御推察被下べく候 ○大野一條も法縁重立候者四五輩  
 呼立説諭相加候處來十八日迄日延相願候故其決は後便に可申上候此は必定久保田へ相定候  
 事に候故御案事は被下問敷 ○身延官林の處は何等なりや且大略反別も御申越願度此事は  
 久保田へ依頼置御催促願上候右の地質野生承知無之ては品川少輔に面會甚差支候故極至急  
 に御報道奉願候 ○此啓勇と申僧は容貌を以て見る可らず護法心盛なる者に候衣服は着替  
 壹枚も無之候得共此度引越には書籍は大籠に五六箇も頗る運轉に相惱候程の事有志者の一  
 奇事とも可申候即本佛寺の補處の見込に候此度身延參詣仕度旨故登山之節謁見御申付奉願  
 候 ○筆は未だ購求不仕此度の幸便相失し甚残念何れ後便に通運御送致申上候 ○鶴川へ

の届物は正に御届申上候先は用事耳 草卒頓首

十二月十六日

文

嘉〔花押〕

御序に諸子に一同宜敷御一聲奉願候

編者曰。耀妙は中洲日振師。○啓勇は河合日辰師。○鶴川日行は淺草蓮光寺。  
 ○昇師池上小林日昇師。 (目黒大教寺藏)

中洲日振師宛 明治十四年十二月廿九日

一一四

廿二日廿六日頻々朵雲忝披見段々爲法盡力は野生の疲力を感發し深雀躍候沙彌校之事厚盡  
 力忝存上候歸京後草々同校規則整頓之心得に候處局中は玉澤始歸寺にて殊外無人なり歳末  
 多端之宗務に逐はれ且大試檢前の教授やらにて逐々遅引昨今筆を執始候得共老耄之上故何  
 分筆路のしぶりはかくしく不參深く老鈍を歎候所謂驥も老れば駑馬に劣の例なるか爾後  
 は壯者の起業勉勵をのみ樂候也 ○觀音の御守は壹貳枚見本に廻し四五千枚も通運にて愛  
 知中教院へ廻可申間宜敷相願上候 ○啓勇は來着の由也道中にて雪の艱み等も無之候は



と痛心候然に此節は必到着面晤と見込候 ○池上の事は本月十四日に舊法縁重立候者六七輩呼立委曲に申聞後來の見込も申聞候處何れも領解し大歡喜の色を顯し從今貴師來着を企望する程の景況なり全く宗祖の冥々保護哉と感涙も催ばかりに候可成丈は九州の方もはこびを付百事都合宜敷致度とのみ祈念候日昇師へも懇々話し致し同師も昨今は眞實の模様相成候何れ近日該山末頭等より連署狀の招請書可差出様申聞置候故御含置可被下候 ○文靜も此廿五日に無滯卒業御省念可被下候少々氣力なき故此節休課中浴泉に遣候 ○貴師入山費は野生方にて金貳百圓手當し五七條も新規に京都原田へ注文致し置候法衣も一兩服位は手當有之候百事因縁に任せ可置也日鑑師を法衣壹通に金百圓惠投之由野生へ迄申聞有之候餘は一月に更に可申候 ○先回の手紙に同胞昇級とは誰となりや後便指示可被成候 先は

十二月廿九日朝

文

嘉〔花押〕

九州歸寺之上は早々改名の運に可被成候 ○浪越日嚴は其景況御申越可被下候寺院の歸望は如何

編者曰。此書は、尾州宮驛熱田日蓮宗中教院内、師宛。○玉澤は物部殿師。當時宗務局執事。○啓勇、河合辰師。○浪越、名古屋檀林教師、(本佛寺藏)

中洲日振師宛 明治十五年一月一日

一一五

客月廿九日の朶雲本日新年と着し破顔微笑早速披讀候先々無事越年有之候半と至祝 ○管長の事は野生も斷然相渡見込無之候只々本人望の様子に候此節にては西京の人々も頻に望相立候様子に時々京兩寺よりの書面裏内に相見へ候得共一宗の浮沈に相關候事故容易には授受に不致候只々世間の誹は多少可有之と想像候得共夫らは風前の塵なるべし本年は何の年ぞや滅後六百第一年也舊の六百去りて新の第一年也諸子よ深く憤發起業有之度新陳代謝の好機會なり此風雲に乗じ天に上下し五大洲へ宣揚する第一年目なるべし愉快無量の年也新年賀表は此事に限候 ○野生の老耄は日に日に増加し先回の書狀に觀音の守同封の旨申聞糊封に至りては忘却也百事此を以て知るべし狂者と共に伍すべからず深慚愧候 此像守は一枚三錢づゝにて遣し千枚一人の引請見込也此代三十圓也

内 譯 二十圓は育兒院建築費也

尺 牘

三八三



五圓は守仕立費也

べ廿五圓送るべし

五圓 取扱の費に充つ

如此也

右の事柄にて宜敷大略何千枚通運にて可送哉尊師發途前に一寸報知可被下候尊師出足後は誰の名宛にて宜敷か此又御通知可被下候草々 ○寺院一同へ新年の賀一聲相願候

編者曰。此書、尾州宮驛熱田町日蓮宗中教院大講義中洲師宛。(流川本佛寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十五年一月一日

一一六

客月二十九日之朶雲第一月一日新年と共に着し破顔微笑再三薰誦候先々無事御迎歳有之候半と遙賀申上候備豫て御配慮被下候池上補處之儀は舊法縁共へ話候處意外に喜悅一同招請之事に内決全く宗祖冥護哉と深感歎仕候夫に引替り大野事は因循相極愚蒙も亦甚敷景象實に筆紙に難盡否筆紙に難きに非ず書此則筆紙を汚辱する也愚も亦可憐可惡也乍然不遠決評可申上候 ○品川少輔私宅へ廿九日に參伺面會縷々從前山の原質山の景情植付樹木之事柄

を申述て後野生參伺内願候は遠近の二策也元來地たるや私有地に可有之者を維新之際に漫に上地致候は必竟自山の手落は無論に候得共此を官林に屬せば山況も次第に荒蕪に屬するの憂も難計萬一風致相損候節は我山は宗門總本山の事故一宗の道俗の信仰に關し大に不都合故地面御拂下相願度左すれば宗門信仰上より充分に保護し決して荒蕪の憂なかるべし樹木鬱然ならば萬一國家之用には吃度したる用材なるべし是公私兩益と考候故地面御拂願度也目今急務之處は八回祿後諸堂再建用材甚艱難相極め今日に到ては官林中伐採御許可無之候ては再建の見込難相立深痛心仕候且つ信徒曰く如此山木は如此非常の備に積年丹精植付置候事にて官にて事情酌量有之て可然也住職も何れか切願有之て可然也と被相迫實に現今之處内外とも逼迫艱難候故何れか内々御指揮に預度旨縷述候處少輔曰波木井遺文は本書有之哉野生曰本書有之候處八年罹災今は烏有に候得共其言は載せて古板書籍に在り斷然確實なるもの也少曰維新已來の失策は社寺の地面官設に致候事其尤なるもの也乍然現今は奈此何とも不可致也一を許し一を不許に置く譯には不參前件遠近二策とも許不は斷言難致候得共右兩通に書面相認め其筋へ差出可被成候少曰粟原は信徒なりや野生曰く非信徒也兩郡長は信徒也少曰能々夫等の信徒と篤く熟議を経て出願可被成候少曰く我も一度登山せんと



欲す道は何れよりす老納曰郡内より甲府を經るは本道なり東海道は吉原驛より入るべし里程凡十二三里也願は一度登山現況一覽被下度就ては話あり此の間にボース身延教法第一道場巨細に話し大に談柄を扶候少曰師在山の日ありや老曰野生は隱居なり當住日鑑在山故同様懇命戴度必ず來泊を御待申上候昨年既に杉宮内云々等の話も致し置候且目今道路改作の見込も相立本年中には吉原よりの路も人力車通行の事に可に見込金原云々の話も致候少曰金原は知己なり過日も來宅あり候其餘話も有之候得共閣筆 ○別紙白河より到着早速可送之處遂々延引候先方へ可然回答被下度願上候金子は幸此度里見出府故同老相渡候 ○筆は二十九日野生東文堂へ參候處生憎されもの兩三日中出來候との事故詭置候品は里見へ相付可申候 ○此節寒氣故歎道體不宜候由深御案申上候本月は早々養生の爲に熱海浴泉可然奉存候野生も此寒には頗る閉口し半臥同様に消光罷在候八日開講式相濟次第十一二日は發程熱海避寒の見込に候其節再會縷々御話可申上候尊師も爲法今四五年は是非在命有之度四五年後は後輩の法統相續の者可有之と見込候野生も乍不及後進の勃興迄は存命致度と夫のみ此節の志願に候夫故養生は專一に心掛居候老すれば耄するのみ百事忘却職務上も甚差支のみ慚愧之至に不堪候 ○御序も候はゞ取締へ課金遞送嚴敷御申願上候實は十三年度分も少々未納也十四年

度分全不納野生局員へ對し何分不都合故御督責願上候 餘は後便縷々可申上候 草卒頓首

第一月一日

文

嘉〔花押〕

〔清兮寺藏〕

野口之布氏宛 明治十五年一月五日

一一七

二月初旬迄は此地滞在候爲念申上候 草々

新禧至祝御渾家無障御重齡欣喜無量隨而老納も無異加年御省慮奉願候昨冬推參不相替清暇相妨其節相願上候三千論序何れとか御改刪辭句意味とも貫徹候様十分御添削奉願候恐入候得共御濟之上熱海え向け御送奉願候且又其節併せ願上候新年發兌之雜誌の文章一篇御惠示被下候様奉願候尤も新舊何れにても宜敷候乍末御序に伊藤氏へも別紙同様新年之祝賀奉願候浴泉中寺後の山野に遊歩中風と野梅數首吟咏候間御笑までに呈候是又御添削奉願候先は年祝耳餘は期再便候 草卒頓首

一月五日

容 月 文 嘉



以放翁句風吹野梅香爲韻賦五絕句

獨全清秀氣。雪裏發溪東。特地回春信。百花皆下風。  
素艷花凝雪。橫斜月畫枝。溪東春恰好。不許笛中吹。  
愧與李桃群。高節終林下。寂莫不啻梅。遺賢多艸野。  
圮橋乘月渡。閑步繞溪隈。吟賞併香折。一枝野外梅。  
一抹蒼烟暮。寒梅淡淡妝。歸津山月湧。踈影水生香。

伏乞 正

文 嘉 草

編者曰。熱海浴泉中。恐らく十八年ならん。(校正中記)

(野口駿尾氏藏)

吉川日鑑師宛

明治十五年一月八日

一一八

本月五日之華雲八日開講出席前に落手披讀先々新年無障礙法務被遊候御事深奉賀候は御昇級は豫の御話も御座候得共世法爲人の爲御領納奉賀候野生撰擧とは少々相違し甚不都合に奉存候得共政府取斗之都合は困入候儀又新年早々切石へ御布教之由御繁勞爲法奉謝候寒

氣之時分は大體の事は御斷可然と存上候 ○野生は本月十一二日比熱海へ發途の心得に候尊前も是非避寒入浴可然と存上候就ては温泉寺の別莊此度育兒院にて借請け會友中之備に致し病兒等も入浴爲致候事に相成候座鋪も二階屋にて上八疊六疊の貳間下六疊貳間也浴室あり厨あり至極都合宜敷彼雜沓客の入込無之候故尊師熱海行有之候はゞ右の室御借請被遊候而は如何哉尊意相伺候若も御思召も候はゞ熱海著之節は直に大乘寺へ御着被下度左すれば野生々案内可申上候此段は今川教正方頼に相成居候故隨分之都合と心付幸便申上候 ○伊藤氏舊冬參詣之節加州々九軒分之奉納被托右金員事務所へ差出して請取は九枚受取候得共右の内善妙院四圓奉納の分如何の間違哉金貳圓の認に相成居何分先方へ請取不被差出進退とも困居候間甚恐縮之至に候得共更に金四圓之請取を善妙院の名前にて御下付被下度旨野口斧吉殿迄申來候間御面倒ながら御遣奉願候先方へ御面倒に候はゞ大教院中太田勇猛名宛にて御遣奉願候 ○齒の藥御心見に少々幸便御回申上候宜敷候はゞ更に御送可申上候筆一包此又御落手奉願候 ○會友證四枚差上候間鳥渡事務へ御申付御遣奉願候先は用事耳

草卒頓首

一月 八 日

文

嘉 再行〔花押〕

尺 牘

三八九



編者曰。切石は靜川村切石善妙寺か。○今川教正は今川貞山老師。○野口斧吉殿は野口之布先生。○善妙院、金澤末廣町。○伊藤氏、伊藤瀧女乎。○會友證は福田會會友。

(清々寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十五年一月十八日

一一九

十三十五兩日之朶雲併十八日晚景に落手拜讀道體此節は兎角に逆上故眼病之由御案事申上候折角御保養專に願候善祖遠忌法會不相替御煩勞御察申上候右法用濟次第浴養飛錫之由屈指御待申上候野生滞在は來二月十日比迄も浴泉の見込に候得共殊に寄少々の伸縮可有之哉も難斗何に致し御着錫迄は御待可申上候此地暖は特別之事に候本年來薄氷の有之候日は唯兩日との事也即野生此地著の翌日即十四日十五日也其外は氷は勿論霜も一切無之實に不知人間有三冬と申辭誣言に非ず野生の寒僻には頗る極樂國と存居候來世は必ず此地に成道可致と宿願相立申候先は滞在期日申上候迄に 勿々布字 草卒頓首

十八日夜

文

嘉〔花押〕

別莊目今浴客有之候得共當月中には引拂可申哉に候御來浴は其御見込みにて月末歟或は月初に飛錫尤も宜敷と見込申上候此地茶不宜故御持參可被成候外にケツト一二枚御用意小ガヒ巻なりとも御持參被成候はゞ此又都合宜敷と心得候 ○本尊御認置可然哉とも心得候 草々

編者曰。和上熱海浴泉。十五年一月十一日發、同十三日着。二月十三日歸院。○善祖とは身延第四代日善上人。

(清々寺藏)

今川貞山禪師宛 明治十五年一月十九日

一二〇

不相替甚寒如何御消光被遊候哉爲法御自愛願上候野生事過十三日に無滯熱海へ着し鳥の入浴加養御省慮奉願候陳は十五日に地方寺院集會も幸に大乘寺宿に當り一同に面會之上育兒盡力之旨懇に依頼申置候且つ御托の品々夫々へ相渡申候此内眞言宗にて伊豆山村舊別當也。般若院住職名前は別紙名刺差上候への會友證無之座間鳥渡間のワルソフに候故此全く失落故早々取寄更に後より進呈の旨に申置候故右會友證は勿論先日御預の書類は悉皆御取纏郵送可被下候 ○夫の別莊は三月よりとの事故夫迄は藤屋へ借渡に相成居候由也遽に藤屋へ申入候も客も



年來の頼込之方也主客とも可困との事如何にも御尤の事に被存候故適宜に取計可然と温泉和尚申聞置候右は御含迄に申上候御詰合中へ一同宜敷奉願候 先は用事耳 草卒頓首

一月十九日

文

嘉〔花押〕

〔福田會藏〕

三村日修師宛 明治十五年二月六日

三三一

一月三十日之朶雲拜披偕は御義之事縷々御申越之旨拜承候野生校合之義は卒々に難致とても本年七月前に着手と申事に不參候故龍華教會にて上梓に相成候はゞ至極宜敷事と見込若此梓刻精確に候はゞ野生之刻は見合刻料は手當有之候得共亦外之書に可用と心得候故此度の處は龍華に御任せ可然と奉存候若校合方不行届に候はゞ更に此方にて新刻可申と見込候故可然村上へ御申聞奉願候 ○書籍代價之事は誠濟（誠）之次第申聞可申候間決而御案事被下間敷奉願候 〔以下切斷〕

編者曰。和上熱海大乘寺寓。消印は「伊豆、加茂、熱海、二、六」京都一五、二、一〇、せ」封表朱書「村上用」とあり○御義は御義口傳。（故冷泉要惲師藏）

吉川日鑑師宛 明治十五年二月十四日

三三二

在浴中は種々清談殊に數多之高吟拜讀大に天涯旅愁相忘深奉謝候出途之節は態々送別之高作感吟仕候途中にて和韻もと存候得共枯腸一滴吟水涸盡慚々愧々十二日には微雨泥濘乍然午後第三時迄に小田原清水へ着し早刻該地寺院六七名呼寄道路之事懇々依頼候何れも心頭に有之候由なれども信徒募集に殆んど困難の由に候乍然此儘捨置難候故せめての事には先自隗始との意にて各寺院等にて率先し金百圓程も集金獻納可致との事に相決候次に十三日に横濱に午後第四時比に着早刻常清寺に面談し同様勸募之事申聞候濱は毎年春は饑饉と申位の處別て本年は甚敷候得ば話に及候も成效は見込難相立乍然是又捨置べき事に非ず少々時節を送り四月初に野生出張し寺院信徒に説諭勸募の見込に候偕て此を以て之を觀るに各地とも大同小異ならんと想像候得ば御山々可然者壹名派出巡回勸募無之ては到底集金成效無覺東哉と過慮仕候篤と御考奉願上候東京は野生近日重立寺院並講社等へ深依頼の心得に候結局は後便に可申上候同日第八時後に無事歸院仕候御省慮奉願候 ○尊師御浴泉も定而體窟至極と御察申上候得共本年寒國御巡教故豫防の爲め一日も多分に御滞在可然と奉存候此地今朝などは霜一面なり淨手鉢の水は氷候程の寒氣に候四五日前々寒氣相戻り甚敷由



也此は例の餘寒は何つにても如此者に候得ば身延の寒氣は別段の事と想像候故御考奉願候  
先は御禮旁無事着之報知迄 草卒頓首

二月十四日午前

文 嘉 再行

編者曰。道路之件とは、金原明善の發願による身延新道路開鑿の事。○常清寺、  
横濱長者町。住持伊奈日要師。○此の浴泉中、島地默雷、何龜舟諸氏と唱和す。  
和上先去り何氏去り島地氏去り鑑師獨殘。當時の詩、本書第一編附録第一徃見。  
夏『熱海唱和集』刻成。○道路釀金報告明教等に載。  
(清分寺藏)

三村日修師宛 明治十五年三月六日

一三三

芳書本日朝正に拜讀仕候偕は過日御書之返事は即刻に差出候得共未だ御落手無之候由如何  
之間違に候哉津川教正への傳言は御聞被下候由(俄如何三字消) ○御義之梓之事は可成丈は本宗内に於て  
出版本意に候得共野生何分にも寸暇無之候より過般御返事申上候也且つは當方版刻費之施  
主有之日々に相迫られ殆んど困却候故加州歸京之上着手と心得居候處尊前方に於て御校合  
被下候は眞實に難有御禮申上候早々御煩手校合奉願上候口決御本は早速郵便にて遞(マ、切斷か) ○壹  
部貳卷御注文之處貳卷は體裁不宜候故新工風に四卷に調卷爲致本日須原屋々大阪書林迄差

出し候不日に大阪々貴寺へ向御届可申上候間其節東京々大阪迄の運賃は相濟居候間大阪々  
貴寺迄の運賃御拂可被下候 ○今般別冊之通沙彌校設立候間規則御一覽被下何分御賛成可  
被下候尙其餘妙顯立本本法寺等一般へ夫々御勸奨奉願候尤も有志の起業故強てと申事に無  
之候故何分有志之處深奉願候 ○御本は紙包にて壹圓十八錢帶封なら三十錢と申事故甚失  
敬恐入候得共失益の失費考候故帶封にて差出候此段不惡御洞察奉願候 先は用事耳

草卒頓首

三月六日

文 嘉 拜上

○  
御書には毎々月日御認無之此度の書狀も同様中にも封上にも月日御認無之願は御認有之  
候方事によりては都合に宜に候呵々

編者曰。一部四卷は訓點妙經か。貴寺とは大光山。

(故冷泉要惇師藏)

吉川日鑑師宛 明治十五年三月十五日

一三四

熱海御歸山後は如何道體愈御清適御山務被遊候はんと奉賀候野生も此餘寒には頗閉口又々



持病七八日間空敷平臥し本日漸先々病床相起候位頗る老病生は今生之用には不相立者と自棄候 ○過日は月の雫六箱御送被下早速に山岡へ三箱品川へ三箱づゝ呈進候出願相成候事は相通置候故貴地可成丈熟議御遂被成萬全を要し御出願可然也と奉存候品川少輔殿は何分此節柄多用屢々不在其後は不得面會候猶山岡公より更に話に可相及旨に運置候 ○沙彌校規則御添削を更に取捨し漸く製本に相成候故過日二十部里見氏へ相托し呈上仕候宜敷御配慮奉願候野生も無據近日千葉縣下へ派出し四月初旬に歸院し同月十三四日比には加州へ出立の見込候尊師も五月下旬方陸羽一圓に御巡回に相成候はゞ本年は御面晤申上候事は不相成事と考候得ば大にさびしく相覺候爲法自愛專一奉願候十月大會には必ず登山可申候 先は用事耳 草卒頓首

三月十五日

文

嘉〔花押〕

大野本遠寺儀は遠尊前々阿萬の方へ對捨兼候得共頑陋僧社會は頗る大義不相分殆ど野生力盡さ候故尙尊師より可然説諭なり嚴責なり隨宜方便相願上候

(清々寺藏)

岩村日轟師宛 明治十五年三月十九日

一一五

其後は眞に疎闊相極候貴聖座より時々御通書に候得共懶筆意外失敬耳に打過候御海容可被下候時下春暖逐日相催柳花の好時節に相趣定時時御詠草翩翩と御察申上候野生も本年病生の爲めに暫時熱海へ避寒中一二巴調草稿候故紙尾に書し汚吟眸候 ○偕は小兒教育の道本宗内未だ設立無之且は新説法式の廢絶も歎敷候より此度別紙の通規則等相定本年より起業候故別冊御通覽の上貴意に相適候はゞ賛成入會被下度且又其餘僧俗となく護法有志の人人へは御勸葬被下度深御依頼申上候 ○光陰如流最早和尙遷化後二十四年に相成候乍延引有志之門葉加州へ參會報恩之法用相執行候事に候其景況は後便に又又可申上候得共往事如夢實歎息候のみ貴意如何 先は用事耳 草卒布字 頓首

三月十九日

文

嘉〔花押〕

編者曰。紙尾に記載云々とあれどもその詩は散逸せりと見ゆ。○日轟上人、大光山四十七世、管長大僧正。明治卅七年五月九日寂。優陀那門。(越前經王寺藏)

守野秀善師宛 明治十五年四月十六日

一二六



謹啓御清穆御法務被遊候段法喜無量昨年は默省會にて偶然邂逅大に疎闊之情相慰奉謝候  
借は此度老納門生に不宵(マヤ)に候得共磯野宣了と申者貴山學林に入學仕度志願に候得共何分因  
縁無之候故直々相願上候は失敬相極候得共右僧在校御教授御許可被下度奉願候其内面晤之  
節縷々可申上候得共何分慈愍之御指揮奉願候先は常用願意耳時下春寒未退爲法萬々自重

草卒頓首

四月十六日

新居 日 薩 (身延嗣法日薩方印)

編者曰。守野秀善大僧正。字は惠運。越後刈羽郡の人。曾て高岡増隆師を助けて  
大教院に勤む。明治六年長谷寺化主に就任。(第五十三世)十六年弘法大師一千五  
十回忌奉修、同十七年眞言各山聯合長者。十九年、新義派大學林を東京に置き、  
秀善能化根來山座主職に補せらる。其の年十二月十四日入寂、年七十五。當時、  
學林長谷寺にあり。各宗の來學頗多し。(小野田海尊師報) (竹田智道師藏)

蓮元日慎師宛

明治十五年六月廿三日

一一七

過般書狀並結好之菓壹等惠投忝存候態々妙厚尼被尋候處折惡敷未た越後々參着無之候故甚  
残念に存候借は此度佐渡靈場參詣に渡海致度心得に候得共何分東京歸院の日相迫り候故何

分渡海致兼候半と見込候貴聖も中教院開筵式に出頭之由にも候は、其節面談可申候扱此參  
詣人は越中泊驛信徒にて先年野生病氣之節は厚看病被致候人々にて此度貴國靈場參詣に參  
候故參詣の順序等御面倒御指圖可被下候先は取込中 草卒頓首

六月廿三日

日 薩

編者曰。此書、加藤文教師より傳來といふ。恐らく佐渡の人か。中教院は島津妙  
蓮寺ならん。和上此時柏崎巡化中。(福井市天津泰秀師藏)

中洲日振師宛

明治十五年八月十八日

一一八

園靜へ托し候芳墨八月十八日に正に落手且つ同人に面晤し貴境並貴聖師の動靜相承大に安  
心仕候乍然剩暑之折にも候得は可成丈自愛專一に存上候七月試檢にて耀玄も卒業候故池上  
の手元隨身に御遣ひ可然と存込候故御隨身の見込にも候半と申進候晋山入費と心得野生手  
元に金貳百圓用意致置候處池上納戸にても充分に入山費は備有之候故旅費も如何哉と過慮  
候故此度金百圓爲換手形にて萩尾峰吉へ宛郵送申候御落掌可被下候貴寺本堂營繕は分外之  
大業内外心勞實に感歎に不堪候信徒も眞に非常之盡力前代希有之大善事深感賞候經費等に



至は野衲も意に任せは傾囊もと存候得共素より空乏如何んともすへからず但々歎息のみ  
「乍然金貳百圓は少々取糺候處差支由也〔朱書〕意當有之候故能々取糺之上後便に可申送候〔括弧内は朱線を引きて消せり〕

池上晋山九月上旬とかの事心得候願は中旬初に入山式相調度と見込居候夫れは野衲も九月  
廿四五日比々扶教結社の爲に下總へ巡回候故又々四十日餘も教院不在と見込候可相成は九  
月十五日前後に入山式相濟候様に致度と心得候御含迄申進候下總巡回濟次第に上州へ寂光  
院遠忌臨席夫々十一月廿三日迄には身延へ登山の心得に候故本年は大略東京不在と御含置  
可被下候 ○地券の事は相濟候由也 ○御庵の教師辭職も止置候 ○教授場移轉は暫時先  
方の情願に御任せ可然也強て説諭等有之候時は法の爲の事は固より不知者共故却て恩にか  
け生徒までも居てやるなどと言ふ事有之候半も難斗候故去留とも先方に任せ可然 ○苟且  
も本根相定候上は自然風靡は決定故一兩年は瞑目忍耐肝要に候只々本堂建築相濟み池上之  
本根も相立候上は漸次に教場再興は自在なるへし唯今の處は精神を勞すへからず 先は用  
事耳 草卒頓首

啓勇へ宜敷 要山は不在に候哉

慈航師も參院に候は、宜敷

信徒一同へも宜敷

八月十八日

日

薩〔花押〕

編者曰。福岡縣筑後生葉郡吉井驛萩尾峰吉宅、日振師ありて。○慈航、貫名達師、  
長崎本蓮寺、岩本實相寺。○耀玄、布施氏、山口の人。池上檀林教師、二本覆承  
教寺、大正十四年九月十六日寂、六十四。○萩尾峯吉、本佛寺創立大檀那、爲に  
殆ど資産を傾盡せり。明治四十三年一月十四日歿、七十九歳。子孫今、滿洲に移  
住。○教授場、松尾本堂にする事ならん。松尾より流川へ、流川から松尾、終に  
京都に併合して第三區中檀林となる。  
(流川本佛寺藏)

中洲日振師宛 明治十五年八月廿五日

二二九

逐日秋涼相催候借は其後は病氣如何に候哉甚案事申上候此度圓靜歸京にて承候には當秋池  
上入山後新會式濟次第に更に福岡へ飛錫之由に候得共此は甚不便之事なり也〔トヤ〕と見込候如何  
となれば入山後山内も多少とも改革もせねばならぬ苟且も改正せは鎮者〔沈著?〕之を履  
行せねばならぬは素より也然に一兩月間に東西に奔走せば人唯其急遽草卒に驚耳更に其功  
なきのみにあらず事其初に慎まざるか如き貌有之後來多少患害を冥々裏に相醸候は必然之



事と被察候左れば先々本年の處は池上に於て越年之事に御示談可被成候様精々工風有之度と存上候餘は後便縷々可申述候 草卒頓首

八月廿五日

文

嘉〔花押〕

編者曰。筑後國生葉郡吉井驛萩尾峰吉宅日振師宛。

〔流川本佛寺藏〕

新居國太郎氏宛 明治十三年十一月四日

一三〇

筒ボウ襦半は壹枚是非願上候

先夜は態御來訪忝御禮申上候陳は其節神奈川馬車御頼申上候何分荷物兩掛にて馬車にては不都合と申事に候故陸地歩行の事に致し候間甚氣之毒之至に候得共至急に即日にも馬車屋へ御斷被下度且又昨日教院々小田原へ參候人有之右の者にも一寸馬車屋へ七日出立一番蒸氣車にて小田原行の馬車相頼候得共此又同様御斷被下度種々面倒の事のみ御氣之毒に候得共馬車屋休めに相成候事至急に御斷願上候 ○先日鳥渡桐生行に付御頼申上候金子は當地に手當都合致候故御配慮無之様此段御斷申上候先は用事のみ 草卒頓首  
野生出立は六日に引上げ出立の事に相成候

十一月四日午前

文

嘉

編者曰。横濱福島屋國太郎。善兵衛の嗣。外護頗るつとむ。後、産を失ふ。大正十一年六月十三日歿、壽七十一。○桐生開堂供養に付、和上は十三年十一月廿一日出發。○この狀、九二の次に入るべきものなり。誤りてここに掲ぐ。校正中發見。  
〔新故居國太郎氏藏〕

今川貞山師宛 明治十六年一月十六日

一三一

過日御申聞の廿日親睦會之旨十三日各宗會議に一同に演説に相及候處何れも同意賛成領諾に相成申候只々黄蘗派不參故照會に候處又又不在院にて用辨不相成其後兩度使差遣し漸本日相廻候故彼是遷延候此段御海容可被下候何れ二十日には一同參會之心得に候 ○本日熱海之事態々御照會被下候旨縷々御申越御深切之段深奉謝候一兩日中には發途浴泉之心得に候何れ歸京之上萬縷可申上候總會之處甚以恐縮之至に候得共可然御取計奉願候先は用事耳

草卒頓首

十六日

文

嘉〔花押〕

編者曰。今川教正、福田會發願主、今川貞山師、妙心管長。清水鐵舟寺開創、此文を十六年一月とすることは明教新誌による。  
〔福田會藏〕



三村日修師宛 明治十六年二月廿二日

一三三

春寒料峭甚難凌候得共愈御安康奉賀候陳過般佛檀之額野生可認旨御申越甚恐縮之至に候得共不認候ては友誼相缺不本意と心得候故厚顔にも相認候失敬御海容可被下候且御望の文字は如何にも書し悪き文字故拙に拙を加へ甚愧入候故試に他に壹枚相認候取捨は尊意に相任せ申上候 ○身延大會日限付壹枚は豫て昨冬來訪の節約束故和作殿へ御届願上候 ○先日中申上候事は日耀師と篤と御示談被下度御引請偏に願候日昇師は實に多藝多能管長適任に候得共去十年に日鑑師急迫之節直接に懇々依頼し野生も兩三反も池上へ參相勸候得共只一己の自由のみ主張し一宗保護の念無之と斷言被致日鑑師も爾後は内實絶交程の見込に候故唯今に相成相勸候譯にも不參は無論の事と被察候且本人之性質は日耀師も熟知に候得は畢竟は宗門の爲を御勘考眞に願上候此事は只知者と可言他と不可議事に候深御勘考願上候日耀師内へ御引請の思召候は野生方日鑑師へ照會申上取極候見込に候

先は用事耳 草卒 二月廿二日頓首

文 嘉

編者曰。耀師、管長交代の件ならん。

(故冷泉要博師藏)

野口之布氏宛 明治十六年三月廿三日

一三三

華墨拜讀愈御壯榮至祝偕は來月四月三日尊父十三回忌追福法會御營被遊度由縷々御申越領承仕候先々今日之處に而は差支も無之と心得候故三日に午前に御回向可申上候次に野衲儀二月下旬方不快伏枕唯今は大略快方に候得共未だ服藥は致居候何分老衰之病故全快之處は四月末にも可致と見込候其故乍存本年は年祝にも參上不仕不敬之段御海容奉願候時下春寒煩人 萬々自重 草卒頓首

三月廿三日朝

文 嘉

○ 本日は老和尚御征月と(不明)し終日觀心贊相勸候

春寒臥病

鎖室謝來往。重衾占靜嘉。孤床離筆硯。一枕伴瓶花。服藥憂餐減。更衣覺瘦加。踏青期在近。何日命人車。

(野口駿尾氏藏)



吉川日鑑師宛 明治十六年四月十二日

一三四

浴泉後は次第に御快愉事ならんと奉存候備は依田氏事三度迄品川私邸へ相尋候得共生憎再度多般の客來にて面晤無之由遺憾に候得共却て好都合の事も可有之哉と存候野生も爾後は此不順之氣候故時々四大不調とかく氣鬱々故未た品川へ其後は不參候何れ近日參邸之心得に候得共不相替三四返も徒足せずんは面晤は難相成事と見込候 ○玄妙院へは御思召之段巨細申聞置候事は氏家へ申聞置候間御尋聞可被下候 ○管長交番之事は其後福田へ書通之旨御話申上候得共何分執筆懶今に何等も申遣わさず候 ○浴中之吟咏翩翩可有之と想像申上候好序に垂示奉願候時下逐日春暖萬々自齋 草卒頓首

四月十二日

文

嘉〔花押〕

○ 依田は九日に發途歸縣被成候野生九日早朝送別旁旅寓へ相尋候面談之旨尊師歸京之上御話可申上候 草々又拜

編者曰。鑑師、北海、秋田、巡遊の後輿讀浴泉。○氏家は後の岩本貫主、氏家湛澄

師。○福田は妙顯寺日鑑師。

〔清令寺藏〕

河合日辰師宛 明治十六年四月廿一日

一三五

四月六日之芳墨忝披閱候愈健勝法務被成候事大慶之至に候備は小教院設立新生徒教育之旨逐條巨細に縷述被成候事爲法教育之志深感服候右は九州之方は野生に於ては別に所存も無之候故貴地之都合に協議可然と存候如何にも更に中國に小教院設立は至極之美事と隨喜候宗局へ向出願之上は速に取斗可申候岡山縣下は不受派の根據故別而布教もと見込居候得共教育之道不行届甚遺憾に存居候處貴老の小教院發起は至極爲法之第一着と心得候故精々盡力有之度此節通丈も歸國し隆惠も在縣故三人協議し何卒舊染を一洗し往々は中教院も再興候様拮据盡力可被致候師匠並に檀家中も可然一聲通信可被下候 ○昨廿日は野衲老母之忌日故放生會相勤猶一席の法話の代に一生成佛鈔縮刷候兩三冊遞送候一覽之上は信徒へ授與可被成候猶法務上に付願度旨は無遠慮來示可被成候先は回答耳時下春暖爲法萬々自愛

草卒不乙

四月廿一日

日

薩〔花押〕



編者曰。此書は、備中後月郡山鴨村妙福寺として發送せる書の、山鴨の誤記なることを知り、直に又、山鴨村として別に發送せるものと見ゆ。前書は今所在を失ふ。封筒のみは存せり。○通丈は日應寺逸見日謙師、岡山檀林林長、明治卅五年十二月十三日寂。壽四十三。○隆惠は盛隆寺印日燈、今の妹尾不變院河村日燈師、健在。昭和十二年に八十六歳。

(河合日辰師藏)

吉川日鑑師宛 明治十六年四月卅日

華墨謹披讀明日御集會之事は委曲相承候必ず午後一時迄には參着可致候 ○今朝品川君私邸へ參候而面談之事は明日拜顔之節縷々可申上候 ○明日縣令の誘導之客四五輩も有之候由今朝縣令面語節に直話有之候故其御含にて御用意奉願候長三洲も參看之由に被話候先は客來亂筆恕容奉願候 草卒頓首

四月 卅 日

日 薩

〔參照〕

拙子本日外出只今歸宿貴書拜覽遅れ御返事相後れ候

拜啓本日端書を以御申越に依れば吉川教正熱海より御歸宿相成藤肥州軍旗明日御覽被下候趣に候處右は他にも好序に展觀のもの有之候趣に付明一日午後と御定め被下度(場所は瑞輪寺を拜借仕度)縣令よりも願上候何卒右之趣

教正閣下へ御上申被下度趣と飛脚を以て奉申上候也御許否御返事をも願度候也尙縣令も出張の筈に候間外にも都合候處も有之明卅日には差支候間申上候尤雙程教正へも別に申上候先は右迄 草々(數字不明)候

山梨縣令 隨行員 渡 部 省 三

廿九日夜

吉川教正御隨員 氏家 淡 澄 貴 師

編者曰、此狀は、前掲の鑑師宛狀と同封にあり。

(清分寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十六年五月四日

豫て鳥渡御話申上候妙泰寺企望之山所藏の御眞像下與且つ尊前より下與之一筆相願上度懇々申出候其事情は筆紙よりは直に本人より言上に可及候間御煩忙中恐縮とも察上候得共又々事情不得止之信仰上より成立候事に候得は篤と御聞取可然御指揮奉願候 ○野生も八日に晴雨とも出發十一日に身延着の積に候縣令は未だ歸縣の見込無之様に被話候一兩日中に又々縣令相尋品川君へ面願被下候哉を伺問の意得に候 ○偕繁遽中申上候は甚無心に當候得共管長交番之儀は深御配慮且御推察被下度何分世議も眞に聞を厭候野生勞を厭候儀に決而無之只々人々に無益に煩惱させ候は頗道德に愧入候此事は此度可認に無之候得共思念在



尺 牘

四一〇

於此候故不知不識言遂に此に及候也御洞察奉願候時下寒暄不定萬々自齋 草卒頓首

五月 四 日

文

嘉〔花押〕

附記。本書東は吾加藤日慶老師が越前大道妙泰寺在職中鯖江説教所を創立、身延山より尊像を請受くべく登山、恰も法主鑑尊は北海道御布教中御留守居薩上より賜はりたる添書なりと傳ふ。末段管長更迭の事にも及びあれば、茲に録す。

藏主 清水龍山記

編者曰。加藤日慶師宛の書狀と共に日宗新報(一一五〇)にのせられたるには、封筒に、「日鑑尊前親展、五月四日、容月文嘉、托加藤君」とせり。封筒今所在不明。身延行の日附等によりて十六年にかく。

(清水龍山師藏)

吉川日鑑師宛

明治十六年五月七日

一三八

漸本日快晴定而法會中群集雜沓之事と御察申上候其後四大調和に候哉萬々自愛奉願候只今身延々別紙貳葉來着候故御心得迄更に遞送申上候野生も明八日晴雨とも發行之心得に候今日午後晚景に又々縣令之處へ鳥渡相尋拂下の事打合申度と心得居候甲州の模様は歸京之上縷々可申述と心得候時下猶寒暄不順法體自齋是祈 草卒頓首

五月 七 日

日

薩〔花押〕

編者曰。此書恐らくは、十七年六月一日の狀下に記せる中山寓あての封中のものならん。無所考。

新居々篤殿宛

明治十六年五月九日

一三九

過日は御出之節不相變草卒のみ野生事病氣故此度の身延行は先々見合に致候代に妙地院を遣候 ○左傳は不用故御返璧申候御落手可被下候先は用事のみ 草卒頓首

五月 九 日

貳 本 榎 々

編者曰。此書は存要師代筆と見ゆ。妙地院は中山日龜上人、左傳は意不明。(圓眞寺藏)

久保田日遙師宛

明治十六年六月九日

一四〇

兎角不順に候得共愈御清福至祝偕は波木井遺文の中有故十三里四方云々の文一葉至急入用故此書狀着即刻御寫し速に郵送被下度右は數通寫置候得共夫々へ配付生憎手元に控無之甚差支候故早々御取斗被下度候引續て元境内拂下の事に付の書類は悉皆丁寧に寫し一通是又

尺 牘

四一一



至急に遞送被下度此段頼入候村雲殿は明十日東京出發即日横濱布教夫より道中布教し身延へは二十日比にも可相成哉何れ沼津妙海寺より日限等は申送候運びに中山久保田日龜取定候由故此段御含迄申進候 先は用事耳 草々

六月九日

日

薩〔花押〕

〔日邊上人〕所載

吉川日鑑師宛

明治十六年七月廿七日

一四一

昨今は暑氣甚敷於空間之地も猶難凌嘸御巡回中は如何可有之哉と御案申上候備は身延より山林下渡之件に付久保田氏出京被致候事實に爲山の心志感服之至に不堪候該件儀は未だ品川殿歸京無之候得は何等不相定候半とは見込候得共依田氏より書面の事も有之候得は明早朝西邸殿私邸參扣縷々協議可致と心得候尙委曲は田崎々御聞取可被下候 ○三郵教正より別紙到來御心得迄に呈一覽候御一見後は御返可被下候交番之件も久保田へ幸便大略申聞置候間尙御賢慮之處も御申聞奉願候先は幸便に事情申上候迄 草卒頓首

七月廿七日

文

嘉 再行

〔清令寺藏〕

貫名日達師宛

明治十六年八月二日

一四二

其後は音信相絶眞に隔世の人の如し乍然此炎暑にも無事消光の由至祝本蓮寺住職之事相承相喜賀書も呈度と心得候得共平生懶筆遷延其内又々本園寺執事出勤之由不相替精勤爲法之志感服之至に存候本寺の事務改良は即其末流之善良に相成候のみに非ず他門派の標準とも相成宗門の光榮不過之也感謝之至に不堪候必ず他日の結果は善良釐正なる好報を從今活目相待申候 ○偕此書狀は急を要する譯には無之候得共可相成は貫主御派出先へ御届被下度深及依頼候時下甚暑爲法萬々自愛是祈 草卒頓首

八月二日

日

薩〔花押〕

編者曰、貫主は修師。達師の本蓮寺住職は十五年十月、本園執事は十六年六月也。  
(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛

明治十六年八月十一日

一四三



亢陽炎蒸頗難堪、御巡回之御困難殊に又々音聲杜絶候趣別而苦辛無量と深御察申上候伊香保浴泉之事は如何にも宜敷候とも存上候野生は同泉に浴し頗被害候故如何哉とも奉存候朝暮寒暄甚不平均且山氣甚敷候故随分御注意願上候

管長交番之件愈御許可を蒙り多年之牢獄一時に解禁に相遇之感覺惹起し秋涼と共に愉快不過之と深奉謝候早速三邨福田之兩教正へ向け書狀遞送申候 ○函館之一條今度は十分に地方應協行届隨而本省の方も野生十分に盡置候故必成之事と奉存候此上は實行寺と新寺と兩立協和し北海道布教之路相開候様是耳相祈候 ○偕御煩勞中更に煩勞の事は夫の小傳馬町説教所并祖堂件信徒種々苦情申立野生頗迷惑無量身延と信徒との兩間に相立如何んとも所置に相苦候故仲々筆紙非所可盡依梨羽講義に相托し直に具申候間御休息なりとも御聞取何れとか御指示奉願候先は用耳時下殘暑猶甚萬々自重 草卒頓首

八月十一日

文

嘉〔花押〕

山林一條種々手を盡し昨今大略相盡し粗出願手次に相成一兩日には品川大輔殿歸京之上更に面談打合又々杉宮内大輔にも面會事情陳述し同人とも品川君へ一言賛成の旨被申通

事に致し其願面上の文辭は井上眞優と申人擔任し下さるゝ事に候又山梨の方にしても藤令も大に丹精被下候旨過日依田より書面に候得は先々必成の事と見込候野生出立は本月廿日前後の見込に候へは何れ巡回御歸郷比には黑白大略は可相立と奉存候先は様子のみ

草卒又拜

編者曰。鑑師此時、群馬埼玉地方巡化。

(目黒大教寺藏)

戸田日令師宛

明治十六年九月十日

一四四

時下愈御清祥至祝偕尊寺滞在中は一方煩御世話厚情鳴謝申候出立節は遠方迄被送候段丁寧之至に存上候御蔭にて即日猿橋迄早着し翌日八王子町泊正午に東京歸院候御省慮可被下候早速に書狀差上度と心得候得共暫時の留守たりとも煩用事等嵩八日夜十時過迄も用談無寸暇翌九日は早天に沙彌校に出張し種々用務等指揮し先同校も無滞開校式相濟候段是又御省慮可被下候夫此故無事着の報も延引致候其日内務迄出頭と心得候處差支用事有之明早朝出頭し局長并に西邨公へ面會し縣地の様子柄仔細縷述之見込に候就ては地方廳の處は猶丁重に注意願候明日出省の上に更に内田殿へ書面禮狀併て懇願狀差出候見込に候猶同省の様



子は後便に又々可申候却說過日中煩永逗留遠光寺には多分の失費相掛候條末頭の義務とは申ながら甚氣の毒に存上候乍然連日の優待深及鳴謝候先は無事歸著の報迄 草卒頓首

九月十日朝

日

薩〔花押〕

編者曰。戸田日令師、後に野澤と改む。義眞日應師の師範、甲府遠光寺四十世是心院日令上人。○此書狀及び明治十六年八月三十日遠光寺滞在三日授與云云の本尊、遠光寺什寶。

吉川日鑑師宛 明治十六年九月廿四日

一四五

華墨拜讀書中縷々之事件逐條承知仕候段々之御配慮難有奉存候 ○堯溫事は再應御隨身之儀許可難有御禮申上候 ○明日櫻井へ御出候由是又難有相心得候 ○湯地の書も御認之事  
嘸々本人之喜と深隨喜申上候唯今退座後 草卒拜復 頓首

九月廿四日

文

嘉再行

編者曰。堯溫は佐野堯遠ならん、櫻井は櫻井課長。湯地は湯地丈雄氏。

吉川日鑑師宛 明治十六年十一月十九日

一四六

中邨氏托付書狀遠光寺より兩回の芳書とも各々拜讀愈道體無魔法務奉賀候乍然病様何分痲疾難療御事と深御案事申上候灸治等にて少々は快方に相赴可申哉との事は爲法至祝 ○態々出甲夫々御奔走の由深奉謝候此地の景況は目今地理課調中也内々探聞候に先は七八は所願相貫可申と見込居候得共種々手違等も有之意外に難難相管候乍然成功迄始終心ゆす〔る〕。さす夫々配意致居候 風に承に山田卿も轉役にも可相成哉の事は深痛心候後役伊藤博文の由也同人は破佛家故如何哉深痛心候一日も早く貫徹を相願居候成否は天にあり如何すへき只々吾する事を盡す耳 ○此比縣令にも面晤縷々依托致置候同公も深盡力致すへき旨被申候窃に同公上申書被爲見候故強て寫取相願候處貴聖耳披見すへし決して他見不相成由に候得共藤邨公之精神も御心得に入度極々内分にて尊前へ呈一覽候函底に秘し置事の成就の上迄は他見無之様奉願候 ○偕は極々俗了の事は豫て鳥渡御話申候花瓶事別紙之通申參候且つ花瓶一箇見本に野生手許迄廻に相成候右は菊兩三本相挿之咏〔詠〕候處風味無之且つはからずに相混し高價品とも不相見不都合相極候得共此も無據の願也と相あきらめ何れとか御勘考之上可然御復書奉願候 ○縣令も來月十四日比迄は滞在の由に候其内又々參扣之心得候 ○函館新寺は本月十七日に許可に相成同日廿一日迄祖師忌辰相掛心計の祝筵相開



乃ち本院を説教生徒兩名相向臨席爲致候此段御隨喜可被下候野生も九年々々丹精相費候も漸本日結果相感候尊前も昨年莫大之艱難今日其效相顯深敬祝々々 先當用耳

草卒不宣 頓首

卒業生試補之儀許可不相成旨本省之見込にて六七月比々深痛心候處此度少々過激には候得共野生本省へ建議し鐵壁も相破り本意相違候此段御隨喜可被下候建議文は近日活版にて御回可申候此に付は執事等には彼此云々有之候得共宗門後來の爲を計り斷然相行候此は管長のハネ仕事に候就ては小教院生徒は一般に宗費にて數百人教育之法方相立度と見込候後日に申上候間強て御賛成可被下候此事與他人難論不得止縷々向尊前相漏候耳 失敬海容可被下候 勿々又拜

十一月十九日

文

嘉〔花押〕

(身延清令寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十六年十二月廿三日

一四七

兩回之華墨謹拜讀早速回答申上度見込居候得共山林一條何と歎様子申度と存居候故遂々延

滯海容可被下候其後長官の交代省中種々動議有之候由頗艱難之模様相承候昨今の左右相伺度兩三度西邸邸へ參扣候得共生憎不在也今朝も早出にて相尋候眼病引籠候由なれとも鳥渡面晤いたし候曰く何れとか相届候様致度運に候大略は安心可有也と話故少敷は安堵も致候得共此節の事は大洋の波の如く不定候故指令濟に無之ては安心の處は覺束なく痛心仕候 ○試補撰舉上申書には大に賛辭被下深愧入候此れにては吃度學事は著敷進歩之事に致度就ては徒弟一般入院と申ては貧寺之分は大に資糧に差間は不俟言候得は此の教育方は宗費にて一般就學爲致候に付外に涌金之路も無之候故職稅相課し度と見込過日も鳥渡申上御賛成被下度と相願候は此事に候然に局中一二の不同意より相廢候未だ無漏就學の機運に無之哉歎息候也不知尊意如何 ○此度は縣令へは一回面晤候耳其後は不相尋候 ○此度扶教結社海内無漏施行之見込にて宗局々巨細申上候事は篤と御勘考之上可然御配慮奉願候此は眞の布教擴張し遠は海外布教の見込に候底意也就ては學區第二第三は貴山へ委托し適宜施行被下度見込に候右兩區内巡回の委員は局論にては久保田日遙師に候はゞ至當哉との衆論に候夫れは何れなり御鑑定を以て一名御申付奉願候 ○先達御預申置金五十圓は正に福田に相渡申候彼是と被申候得共押て受納可有旨に申募先々落手に相成候 ○函館常住寺は本月一



日か六日迄開堂供養有之信徒一同再生の思ひ歡喜無量引續入檀申込の者有之候由不遠繁榮に可至と見込候丹羽智順住職の見込に候處取締貫名日軌師遮て不都合申立て不得止一時智宏住職の事に致候實行寺檀徒も意外に出候故大に浪敗し更に不平も不申却て時々集會し檀中改寺不致様監(契)約等も致し夫れか爲に借財一萬有余も七千圓程は示談行届残り借財は三千圓余に減少候由に候新寺許可にて實行寺まで善方便相立候は實に意外の宗幸と可申候就ては同寺の後職は可然者御差向に相成候は、兩寺併力し大に宗門之面目一洗可申と見込候故篤御賢慮奉願候 ○小樽妙龍寺の處も神保退院爲致明三月比に東京か後住差向候事に此比檀徒牧口徳三郎と示談候此も千四五百圓の借財に候由内七百圓余は牧口の立替の由故右は奉納爲致其余は漸次辨償の見込に候此上は札幌經王寺の改撰耳に候此れも當秋か夫れとなく大岡助右兵門方へ話込居候此事成就せば北海道之布教先々基礎可相立哉見込候乍然成否は天也亦可奈耶 ○本年の寒氣には頗閉口逐年老衰息のあるのみなり臨終在近不亦樂乎 先は用事耳 時下寒甚爲法萬々自玉 草卒頓首

十二月廿三日

文

嘉〔花押〕

大試験も本日にて相濟明日すはらひ廿五日座牌申渡休業なり

編者曰。座牌は席次札。

〔清分寺藏〕

野口之布氏宛

明治十七年一月二日

一四八

新年之嘉慶至祝愈勇健御加年被遊候段欣喜無量奉壽候昨年中は種々懇命難有御禮申上候偕又毎々御煩手恐縮に候得共別紙題辭御清暇に御添削奉願候○本月末歟二月初旬には後園新栽之梅花相開候間其節更に申上候間一日操合御來遊奉願候信夫先生も同様相調候先は年祝相兼願用耳餘は面晤縷々可申上候 時下嚴寒萬々自玉 草卒頓首

一月二日

新居 日 薩

乍末筆御内室様に別紙同様御通聲奉願候 勿々又拜

〔野口駿尾氏藏〕

野口之布氏宛

明治十七年一月二十三日

一四九



昨日は御繁忙之御中拙文御添削被成下殊に丁寧に御教示深難有奉謝候早速に參堂申上度と相心得候得共願は御在宅之日に御伺申上度候間御清暇の日御面倒なから御報知願上候明日御清暇にても候は、御伺申度此段御禮旁一寸御照會申上候 草卒不宣 頓首

一月二十三日

文

嘉

(野口駿尾氏藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年一月廿五日

一五〇

爲年祝貨幣壹包御惠投難有奉謝候

日

薩

恭賀

新年

一月廿五日

日

薩百拜

日鑑尊前

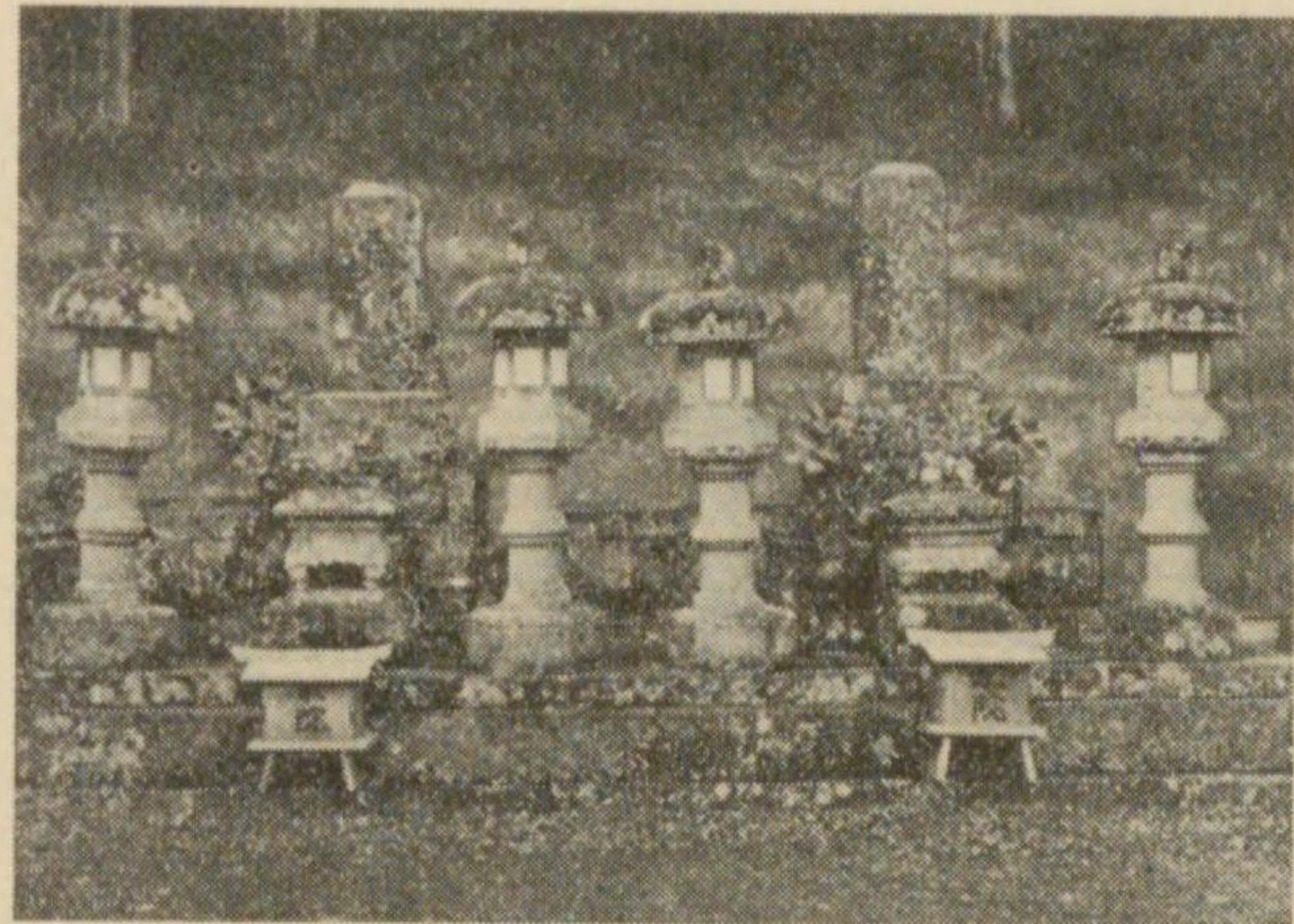
○

本月四日並十日付華墨兩章類拜讀道體無障萬福無量法喜之至に不堪候疾に書狀裁呈可仕之處

處舊年より兩三種取調之事迫居候故乍存大遅引缺敬不堪慚愧候只々老衰百事遅緩にのみ流れ終日碌々消日回首歎息之外無之候決而非事之多也處事之遅鈍耳御憐笑可被下候 ○徵兵令之事も晝夜曾中に横候得共決案起草献言之場合にも不到候今日の可爲處は佛天に無恥之所業相立後世佛法振起之原因可相醸様專一に心掛第一なるなりと奉存候固より僥倖免役は非所望也只々一二眞に勉學の徒弟にて兵役に學事の年月を被奪候而愈廢學に廢學相加へ候様に可成哉と過慮候僧は禁姪斷肉人情之難堪處相忍候故世法を以て規すへからざるを然に方今の僧侶は肉妻一般亦平民と異なる處なし故に政府の庶民を以て僧を驅役する亦宜ならずや猶如三禪之感三災也と存候如斯相思ひ候得共生徒を顧みれば竊に感涙相催候耳何れなにとか献言抗疏とは覺悟候 ○最早逐日老耄眼前之百事隨而過れば隨而忘る殆んと小兒の如し昨年兩度迄小室老上人之事御申越被下呈書毎に失忘遂に返事不申上右は一級昇進之取斗に致置候間左に御含奉願候 ○今般祖書入藏は紙數限りあり依て安國論開目撰時並に十部書のみ入藏の事に候右の書を悉皆更に寫取り校合し漸兩三日中には弘教書院へ下附候テウド縮刷本にて一冊に相成候故旅行携帶の便にせんと二三百部も餘分に注文申遣候間高慮に適候は、何部なりとも幸便に御申越可被下候 ○昨年谷中にて石碑の事御申聞之處野生



曰早しと尊師曰最早片足入棺也野生呵々とのみ其時野生の意は此に在らす申も畢竟贅言に屬する故に不申也然に一月五日淺草蓮光寺教會に出席候處既に石碑出來之由厚意深感服候耳固より石碑の處は心頭になきに非ず然に壯年より志業候は老和尚の遺書上梓の事也然に



維新後上梓の事に着手は候得共三千論始め未だ事終らざる故何分一身之後を計に不暇耳故に尊師身延に於て一度御申聞更に谷中に於て再度申聞有之候得共疾に應答不申は之を計に餘費なき故耳然に尊師野生の餘費なきを被察御申付被下候は厚意深奉謝候然に如斯喋々するは早しの一言野生死を不知哉の御感傷有之候而は更に不堪恐懼候故思付候儘申上候只々遺憾と存候は尊師揮毫せず此は野生の書せざるを以て尊師も御控被成候事に無之哉と存候於谷中野生の意不申は大に失策と存

候乍然此等は些々たるのみ厚意深奉謝候 ○俱舎は頗る難解甚困入候日々下讀に幾許の日子相費し候乍然唯今の時は別而必讀の書と相心得候 ○岡鹿門先生を應酬之篇々不相替天然自爾の妙句感吟候早速に恕軒先生方へ相廻候春來の高作頻々御送致奉願候 ○△△事は

僧形腐儒景況大の菩提心拂地後來の程如何哉と感然に不堪候甚恐入候得共一兩年間尊師前の膝下に御教授奉願度自然に佛心も感發すへきと見込候故大慈悲之御一聲奉願候 ○嗚呼尊師も老衰餘命幾許もなし野生は固よりなり宗門の氣息喘々たるは尊師三邨と野生のみなり左すれば身延の寶座は容易に辭職は不宜候故斷乎爲法兩三年は永住の御決心第一の護法と相心得候他人之呶々は不足顧也強而御勤職俯奉願候 ○山林一條未だ様子不相分候西村公は當時赴任は無之候由に候此耳は大に力を得候先亂筆蕪言用事耳餘讓後言候 時下寒甚爲法萬々自玉 頓首

編者曰。鑑師日記曰。卅日蕭、卅一日報出す。○岡鹿門。仙臺人。碩儒。戊辰勤王。漫遊を好み、此の時身延に寓す。(清令寺藏)

おるよ殿宛 明治十七年一月廿五日

一五一

雪後は寒氣尤も嚴敷家内一同愈御無事之由大慶の至に候偕は面談申度事有之候間明廿六日廿七日の内是非一寸忒本榎迄御出被下度用事少々取急候事故其合にて操合是非御出可被下候先は用事のみ 草々



尺 牘  
一月廿五日朝

編者曰。和上令妹也。此書、或は十八年ならむ。今假にここに載す。

文 嘉

四二六

吉川日鑑師宛 明治十七年二月十七日

一五二

本月來度々之雪寒氣一段相募爾來寒氣に被冒今に半日宛平臥故遂々回答不申上候缺敬御海容可被下候備は愚弟△△御隨身之儀速御許可殊に鄭重之華翰下賜難有御禮申上候即日にも發足申付度存居候得共生憎本人事昨月中より兎角感冒今に十分に無之遂々遅延致候怠慢之處御容恕奉願候本月廿五日大車院十三回忌法會相濟次第早速發途爲致度心得に候故何分可然御教諭奉願候無髮俗とも可申者故嚴重御教誡奉願候 ○本院儒教師奥田先生此度の雪に不快之處遽に一昨十五日に遂に泉下之客と相成愁傷相極實好人物再度如斯之人は難得と一同遺憾に不堪候 ○信夫も昨暮々少々づつ不快故近日決意熱海へ浴泉療養に相赴申候 ○本年之寒氣前代未曾有之凜冽病性頗難堪傲嘔浴泉致度ものと存居候得共貧囊と用務と相混し我儘に不任候然し即是善知識哉と終日爐邊に與書埋頭候大霧中之御作は眞に綺麗感吟仕候 ○世論は逐日進歩耶蘇は逐日勉勵宗内は此に反對後來衰廢之極度何の點に可到哉と歎

息に不堪候何れとか御策進之良計御教示奉願候 先は乍遅延回復まで 草卒布字 頓首

二月十七日

文 嘉 再行

編者曰。此書、「托兩執事」とあり。○奥田龍湫、大檀林の漢學教師、名は遵、吉野金陵の門、經學に長ず、谷中本行寺に葬る。(清令寺藏)

貫名日達師宛 明治十七年二月廿四日

一五三

愈清穆至祝此度大内青巒大人九州和敬支會之請に相赴廿七日横濱乗船發錨貴地へ被參候間愈著之節は宗内寺院申合早速に訪問有之度と存候御同人維新來特別に護法盡力被成殊に敝宗深懇命に相成居候故和敬會へも出席扶宗之取計等深御注意可被下候 ○沙彌校之事も毎々丹精被下難有御禮申述候先々昨年開院已來次第に生徒増加し隨而唱題箋施入も逐々有之候尙貴境之處可然御周旋可被下候先は大内君之通知耳時下寒氣甚敷爲法萬々自重 頓首

二月廿四日

日 薩〔花押〕

追而梅木澤老人へ御序之節可然御致聲を願候 草々又拜

尺 牘

四二七



編者曰。此書、封筒は本蓮寺貫名師宛、且記す、「住職不在に候はゞ茶間開封」。文中には貫名師成田勉秀師連名宛。○青巒居士は維新前後、池上本門寺檀家惣代となりて周旋せらる。○沙彌校開校式は十六年九月。○成田勉秀師は長崎長照寺二十六世。明治十八年七月寂、壽三十四歳。○梅木澤。妙心院日修上人、小田原本光寺より本蓮寺住、當時隱居。中村檀林滿講。伊豆梅木眞田氏の出。依て梅木澤を姓とす。明治三十七年舊正月三日、口之津正妙寺住にて寂。(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年二月廿七日

本月廿一日華墨拜讀偕は御持病之處とかくに不宜之由深御案事申上候本年之寒氣は非常の激烈實に衲生難堪候隨分爲法爲山萬々御自愛奉願候然に御退山の底意有之哉に書面相讀候得は右は斷然御絶念可被成候最早連年巡回等の奔走は佛祖へ對し十分被爲盡候故爾後は湛然不動に御在山有之悠々と御保養可然と存上候目下宗家の衰退兩三年殊に甚敷何の教院も有名無實の由に想像せられ然に世上の進歩は逐日開明に相成加之耶蘇内外勃起佛法を席卷せんとするか如に候然に寶座にして一度動轉せば京地の教院も一變し遂に原の衰學に到は必然に候左すれば身延の衰退のみに非ず兩所の衰況は全國宗門に影響を可爲と深焦慮候故

宜く道の爲に永山深奉願候爲之に御出京なれば野生はそれより先に文水の濱に相逐候決而御相談に不相成候それはそれ時下寒冽爲法先く御自重保養奉願候看梅記面白拜見候此節信夫は熱海へ浴泉中に候 ○近日△△差遣候間嚴重御教授奉願候我儘者に而衆と相和するこ  
と不能實に困入候然を御隨身相願は眞に恐縮之至に不堪候 草卒頓首

二月廿七日

文 嘉 再行

昨日依田孝君被尋久振に而閑話致候不相替深切に宗門後來之事御話有之候御面晤節は可然謝辭奉願候 又拜

夜 梅

晴宵懶秉燭。皎潔樹玲瓏。步月避花影。聞香立下風。嫦娥眠玉宇。姑射臥氷宮。劇賞恐驚覺。徹吟過屋東。

乞正

未定草

編者曰。鑑師自記、三月三日着。四日返報書す。○依田孝は當時の中巨摩郡長。

(清々寺藏)



吉川日鑑師宛 明治十七年三月九日

一五五

本月四日華墨拜讀春寒料峭故とかく道體不勝利深奉恐察候野生も同感過月下旬比ふと感冒今に伏枕此度宗内會議諸宗會議にも遂々不出眞實遺憾相極候得共不得止候借御退職之思召は萬々安逸なるとは野生も不存候得共目下宗家之形情不忍見且又前路を豫想するに實に不堪恐懼候故思慮筆端に相顯候耳是も爲法尊師の思召も爲法也只々歎息之外無之候 ○此程知己高野山無量壽院高岡増隆上人別紙之通の詩歌相求られ候故是又御詠吟被成下御遣之程奉願候中邨信夫等へも相求泰山上人へも申遣候野生も何にか字を並度とも存居候何つも亂筆殊に此度は病床執筆亂筆も又亂筆海容奉願候時下萬々自重 頓首

三月九日

文 嘉 拜上

春寒臥病

鎖室謝來往。重衾占靜嘉。孤床離筆硯。一枕伴瓶花。服藥憂餐減。更衣覺瘦加。踏青期在近。何日命人車。

乞正

夜梅賜和韻闇夜も得此連城玉亦更得鮮明至至謝謝。

△

高野山弘法大師一千五十回忌法樂詩歌課題

山花 春月 玉川

右來三月廿日限取重

勸進者 高野山

阿圓我 南觀蓮

明治十七年一月

編者曰。高岡増隆上人は合併大教院以來の交際、高野山寺務檢校法印大和尚位。明治廿六年四月三十日遷化七十一。○泰山は小林昇師。○中村は敬宇先生。○此等の詩は第一編に收。(清吟寺藏)

早川日悌師宛 明治十七年四月十三日

一五六

其後は久瀾之至に不堪各聖座愈清穆至祝中教院之事不相替御丹精之由奉感謝候降而海解事鄭重に御世話被下候段深く禮謝候借此度海内一致布教結社取結之爲めに諸師分掌巡回有之候管下は玉澤上人請持に相成追て相赴候間格別に丹精周旋被下度頼申候右は大教院之資本



に無之一宗共有之資本專一に布教一片に消費之備に候近くは海内布教を盛にし遠は海外布宗の基本相立候見込に候大坂は別而望有之候地方に候得は外々の標目に相成候間吳々も格別に盡力深及倚頼候猶丹羽氏より委曲可申候同氏事在局中百事盡力大に好都合に候も聖座等よりも可然禮言可被下候時下春暖爲法萬々自重 草卒頓首

四月十三日

日

薩〔花押〕

編者曰。大阪妙福寺早川悌師。松ヶ崎より充治園に學ぶ。大正九年二月隱居、七月二日寂、壽七十九。關西宗門の元老。○海解は本間氏、大檀林生にて大阪中教院教師に任。  
(中寺町本要寺高橋貫愿師藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年四月十五日

一五七

四月十一日之華墨拜讀倍は兼々相承候疝氣は同病に非るよし別而御察申上候醫師紛察(診カ)上小刀にて切斷膿發散後は少々苦痛も相減候由實に多年感冒相押寒氣も深凝結候故此度は百事放擲し専ら療養に耳御心掛奉願候淨心寺杉山も陰囊切斷にて終焉從此始とも相承居候眞に不容易之事と重體に療治可然と存上候本日海全に面會し少々は安心候得共尙々油斷無之様願上候(中略) ○今般於本院設置の講社は大教院維持の資本には決し而無之本宗無形宗教擴

張の基礎の心得に候海内一般耶蘇は漫延し民權論或は演說等流行宗教逐日衰頽し眞理の混滅眞に不堪感慨候野衲輩も一兩年間には必死は決定無有疑也世務は猶庭前の塵を掃か如し際限なき事也爾後は海内布教は勿論外國布教之基礎於此時不立すんは何日を期すへきや世上の不景況は明年とても難計諸本山堂塔營繕も亦隨而際限なき事也大教院なそも時勢にて設立候得共永續の者とも不信只々本門之妙宗は與世常住不滅なるへしと信候故右の資本相立教義専門に擴張の見込也其旨昨年日耀師より連名にて倚頼書並に講社規則の緒言に縷述候通に候然に往々に大教院の資本の様誤解之者も有之候由にも相承候故御含まてに申上候先は御病氣見舞申上候事に餘計之事まてに波及し御煩心相掛候 ○前回數度詩文稿御廻一  
一 落手仕候時々返書不裁缺敬之段御海容可被下候悉皆雜誌に登錄之見込に候四月よりは長瀬登氣雄と申者編輯者に致し乃ち本月八日十八日の雜誌に候來月よりは期不誤發兌の事唯今迄堯惇專任中は始終不都合耳深奉謝候 ○管長も本日出發巡回の事に相成候野衲も本年大車院十三年故越後廟參に發途致度心得に候何分本院無人故發途致兼居候 ○徵兵令之事は一月來百計相盡し痛慮候得共野衲輩の力に不及爾後は天に任する外無之事と決心候生徒悉皆出兵すとも佛法は何にか存すへき事と存候耳只々勉強生徒の顔を相見時々歎息候耳親



の因果が子に報い候耳亦可奈耶此節諸宗會議にて各宗合併の教校を新設し右入校就學の生徒のみ猶豫に預度の旨の願書草案本省へ進達し内局評議中のよしなり合併は明治五年來深く相懲候故野衲輩の老衰は只々沈黙し時を可待耳 ○昨日徳大寺にて淨心院七回忌法會臨席回向し不堪懷舊之情候野衲今日は世事を相聞候事は眞に不堪爲之には何れへ歎隱棲致度存候得共學事如何と一日々々相引れ本院に滞在候一日も頭痛無之日無之逆上甚敷足は氷の如相ひへ候<sup>三</sup>三度ともに昨冬より白粥のみ相用候二里已上の人車に往復する時其夜總身相痛候別に持病は無之候得共全分疲勞恰老木耳 ○本院儒生死後此度中邨忠誠と申先生請待候速に承諾此人は當時埼玉縣中學校教師なれ共官員社會相厭ひ辭表を出し寂莫之地に赴度の志大に望み有之候爲人は小笠原先生に類似候實學は充分の人の由に候也此段御省慮奉願候 ○本日信夫君へ面會候處宜敷との傳聲に候幸便に墨堤の櫻花一見候王政最中と可申之景不早不遲好風景也只々雜沓には閉口人車爲奔匆匆々看過候 先は當用耳 草卒頓首

四月十五日

文 嘉 再行

編者曰。海全、棚倉長久寺園部海善師。當時身延院代。○長瀬登氣雄、在俗にて和上の門に出入せる人、後に沙彌校の教師たり。○管長は福田日耀師。○淨心院

日備。字湛禪。徳大寺廿四世。明治十一年四月十六日、内山妙光寺にて寂、飯高に學ぶ、學行秀特。○儒生、奥田龍湫先生。○中村忠誠、櫻村と號。著述あり、聖堂出身。○小笠原は東陽先生。  
(清令寺藏)

吉川日鑑師宛

明治十七年四月廿七日

一五八

本月廿一日華墨拜讀道體兎角に病惱不宜之由元來數年相釀候病根疾速に全癒は難相成者と被存候際氣永に療養深願上候偕看櫻之御作何れも聯玉殊に第一首は又々感吟仕候早速に信夫へ相廻候批評後速に雜誌に掲載可申候 ○偕此書狀相認候に付は夫の山林一條之様子申上度相心得今早朝地理局長櫻井同舊社寺局長櫻井並其掛二軒相尋候得共生憎皆々日曜故他行不得面晤何分容子不相分候何に歎大小輔之際に異論も有之哉に承候西邨不在大に不都合に存候 ○徵兵一條は先々上願筋不相立事と御見込相願上候只々僧侶不勉強と耳一般の想像相受居是則病源に候一二有志之生徒は眞に愍然に不堪候得共一業所感之災害と相心得候よりは外に心得方無之右に不關唯一に護法之志にて勉學之外は無之候 ○雜誌も寄書之種艸無之甚困却是則宗教之不振之驗と相心得候 ○此程信夫に被誘小金井へ遊ひ候實に無數之櫻花爛漫驚目候拙作も一二有之候得共寫字に勞候故雜誌にて呈貴覽候先は當用耳時下寒



暖不順爲法萬々自重 草卒頓首

四月廿七日

文 嘉 再行

四三六

編者曰。鑑師觀櫻の詩、觀花。愛見錦雲簾外堆。亂爲紅雨點青苔。花神亦似巫山女。爲雨爲雲惱我來。(妙法記聞五號)ならんか。○追而書あれども略之。

(清今寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年五月五日

一五九

本月一日華墨拜讀不相替御病惱之由深御案事申上候灸治にて全治に至候は、一時之泥梨も雖可忍目今之苦艱不堪想像候乍然爲法勉勵御療養奉願候右御病中牡丹之御作惠示は苦惱中幾分之餘地有之候事と感佩仕候俦本院後園之牡丹も今朝俄に三四輪相開候處右の芳吟拜讀候故不圖汚清韵候御改竄奉願候野生も兩三日前夜暖にて又々感冒乍然稽古不相休勉居候衰弱後は聊之時候之變動にも相感候 四隣之新緑も又々快意に候春色よりは風味幽邃に相覺候東京は甚時氣不揃に候御山は如何 爲法萬々自重 草卒頓首

五月五日

文 嘉 再行

和清兮上人牡丹詩芳韵

忽疑仙女降天宮。玉佩霓裳富貴隆。曉露滿葩香可掬。一叢嬌艷不勝風。

(清今寺藏)

貫名日達師宛 明治十七年五月廿三日

一六〇

其後は無音不相替清穆法務被成候事至祝偕は過般大内氏巡回演説之節厚御配慮有之候旨縷々大内々申來候扶教之御志深奉謝候尙長照寺君も好序一言禮述可被下候 ○昨年來老和尚門家發起にて充洽學會相開右學會々毎月二回つゝ雜誌發兌候得共何分雜誌之體裁むつかしきより購讀者甚稀にて甚困却候右會説は大略老和尚御遺書にて上木に不相成候品々を登録候得は吃度學者に裨益之事は斷然たる事に候得は貴聖も右學會へ入會被成毎月購讀被成尙其外へも勸辨被下度尙議論等も寄書欄内へ御投書有之度深企望候乃ち此度不取敢雜誌遞送候間通覽可被下候尙乍面倒鳥渡回答可被下候時下不順爲法萬々自重 草卒頓首

五月廿三日

日 薩 (花押)

編者曰。長照寺君は成田勉秀師。

(永田慈明師藏)

尺 牘

四三七



三村日修師宛 明治十七年五月廿五日

一六一

其後は往復とも無之如何御消光被遊候哉御伺申上候不相替御化導之御事と奉祝候此程海解  
 か申來候には卒業生徒を勸勵し説教開張之旨懇々御來諭に相成候由右は爲法不過之と深奉  
 賀候 ○本尊辯開板も段々遅延し漸此節上木に着手仕候不遠内出來可申御省慮奉願候就て  
 は右書中に數々像尊者本尊相承書之事有之候得共野納未讀に而如何にも差支に相覺候願は  
 拜讀致度と心得候故尊師御所持に候は、暫時拜借願度萬一未所持に候は、龍華祖山即妙顯  
 寺には必有と心得候間一本謄寫御送奉願候 ○三千論も一二と印刷相濟六月中には全く印  
 刷出來可申候就ては昨暮願置候野生序文の草稿御批評奉願候一月中に初の方二三ヶ條も御  
 教示難有拜讀候得共全篇逐一御改正奉願候 ○老和尚遺書中重立候品は大略上梓に相付候  
 五六葉或は十四五葉位の者迄も上木と申事も如何可有之と考へ先々雜誌會說とにかく登  
 録に及候は、五百部つゝは海内に可存と見込且つは學路進歩之一端とも相心得候右雜誌發  
 兌候也右は老和尚法流に預候者並目今大中小教院に於て和尚法澤に浴候者を一般會友と見  
 做し久保田日龜發起者と相成野納始日鑑師等賛成者と相成今日迄相續候得共何分雜誌體裁

之不充分購讀者甚希有に候爲之主任者も頗困難相極候通常一般の寺院にては購讀難相成  
 候得共苟も學流に預候者は願は一讀有之度則會說は老和尚の遺書なり一篇たりとも裨益無  
 之筈は萬々なかるへし到底遺書の如は學生たる者は謄寫も可致の勞を缺き坐して披讀に相  
 成候事故生徒後來の利益と見込候得共尊意如何願は可然事御見込も候は、先從生徒始と御  
 見込生徒間有志者御勸奨被下度若又外に進學好方便之御考も候は、御來示奉願候且雜誌に  
 付御見込も候は、十分に御教示奉願候宗義を明にするには第一に説教第二演説第三雜誌な  
 り説教演説は之を口にし雜誌は之を筆にする也口と筆と和合並行して眞理發顯すべし最早  
 諸教院開設來生徒教授も可なりに相進候故之に乘し口説法筆説法を加行候はは後來之好結  
 果可有之と見込候故更に一段作興の御工風奉願候本年は西京遊覽御面會可申上と考居候得  
 共百事不如意不達本意候何れとか學事作興御妙算奉願候 久濶不堪懷舊之情縷々布字時下  
 向暑爲法萬々自重 草卒頓首

五月廿五日

日

薩〔花押〕

編者曰。海解、本問氏。當時京都留學中。

(故冷泉要惇師藏)



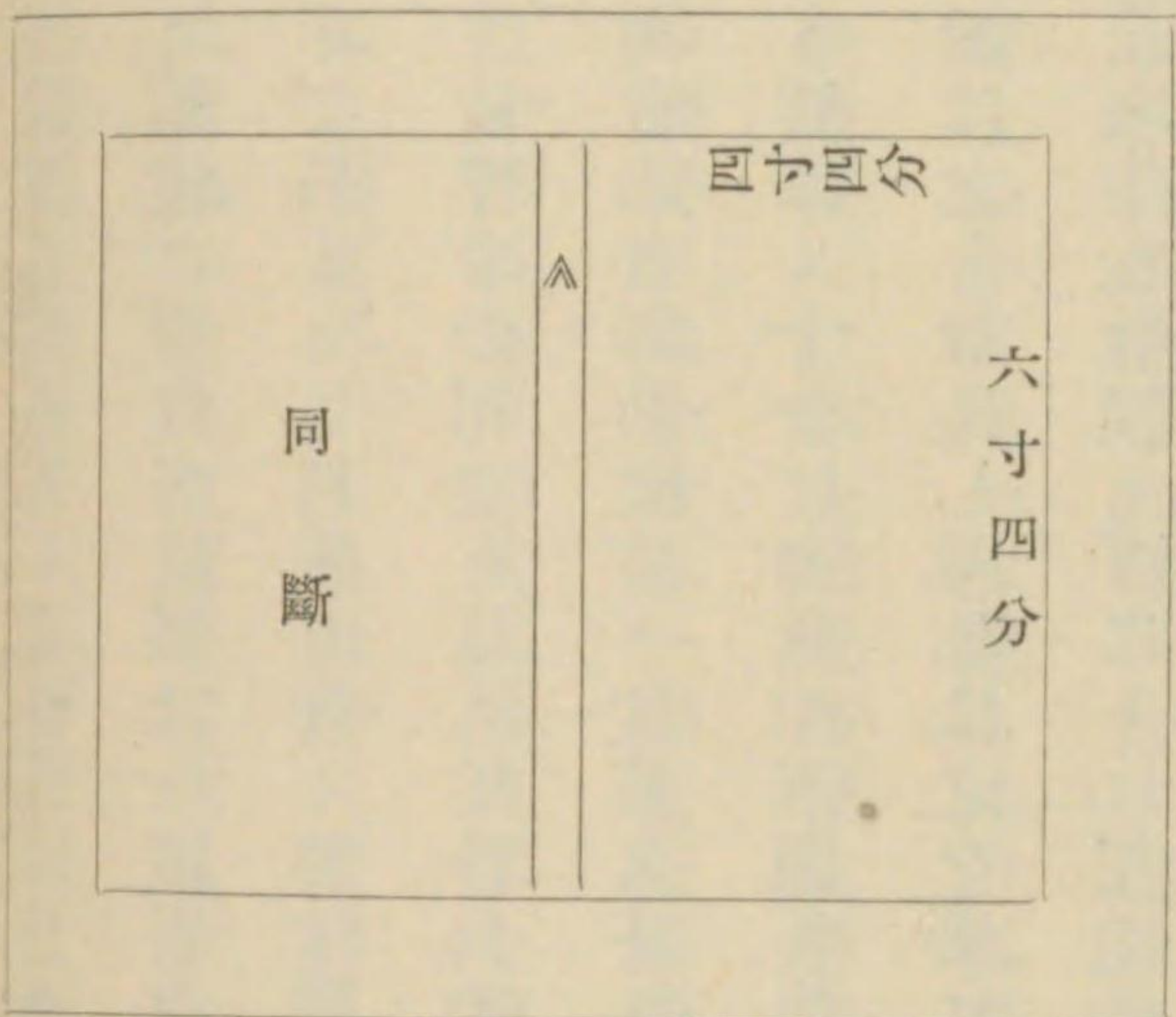
尺 牘

吉川日鑑師宛 明治十七年五月廿七日

四四〇

一六二

其後は御病惱如何被在候哉灸治奏功有之候事と奉存候儲は昨日羽州之禪僧にて至而破邪一片に盡力候吉岡信行と被申候人拙院へ被尋一昨年尊前々題辭被下早速に東京へ申遣候得共最早上梓後に屬し登録に不相成遺憾に存候故此度又々續編上木に付是非一昨年頂戴御作充治編十六今一度御揮毫相願度旨野衲より願上吳候様申出候際乍御面倒左の寸法中に御認御送本院へ願上候



本月十五日比に彫刻著手之由に候 ○御近作も候は、幸便に御投與奉願候時下向暑爲法萬萬自重 草卒頓首

五月廿七日

文 嘉拜

編者曰。岩手縣江刺郡岩谷堂光明寺住職吉岡信行著「破邪顯正邪正問答編」、上下二冊、明治十七年十月刊行。耶蘇教退治の書。兩和上外各宗諸賢の題語滿載。

(清分寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年六月一日

一六三

華墨拜讀如來示讀書之好時節所謂燕子日長宜讀書と衲生も快哉消光候儲御病惱も灸治後は次第御快愈に相趣候旨欣喜不過之乍然又々病源も更に可發哉の事は甚御案事申上候陳は縣立學校之儀に付縷々御教示之旨解領仕候爾後縣令出京之際自然面晤も候節は程宜頼談可申候久保田等發起にて永續資本基礎相立候事感服致候總本山は總本山たる丈の交際經費は自然不得止之時情に候右等は局外にては不相識之苦心に候我營膳(マ)さへも不相調に他の助成は難及様の儀には候得共彼此相扶助は又々世間法不可免之事に候野生も近年別て貧囊學資さへも乏闕候處此度鐵舟寺新建に付賛成勸化被申込不得止金五拾圓之豫約候嗚乎世間は

尺 牘

四四一



うるさきもの也 ○充洽雜誌も漸之事にて一周年候唯今迄堯惇へ百事委托致置候任事放却之貌にて出納等も未分明雜誌遞送等も斷續候故購讀者々此節頻々苦情耳申來後任の者頗困難相極候得共漸後任の丹精にて大略整頓し示後は更に一層善良に可到と相樂候只々雜誌之性質やばに産出候故購讀者は晨星よりも稀少に候乍然會説は大略老和尚之遺書等に候得は此一欄にて凡學佛者には有益と相考候得共購讀のなきは全く學事の不振の故なるへしと存候然し何れとか賢慮等に預り一層盛事爲被至度奉存候際可然御垂示奉頼候此十七號の雜記に考課狀相載候間夫にて大略御通知奉願候 ○縣よりの書狀は謹返璧申上候 ○此頃首楞嚴經通讀候處真に一讀三歎不堪欽喜候尊師既讀に候哉野衲は此度始に候若未讀に候はは御一讀可然亦是病惱相忘候一端に候 ○本尊辯校合にては不動愛染之事に付少々悉曇書類披覽候處更に馬耳風慚愧に不堪候壯年中に不學老年に至而方所相失候又々大日經一行の疏も相開候得共此れは又々一家言にて更に不分拱手歎息耳俱舍を讀も俱舍不分左すれば小大とも不相分聊依經耳を少々相讀候得共此とても疎漏の至なり少年の懈怠は壯年に窮し壯年の懈怠は老年に至りて至不可奈也死に瀕して歎息は無益に候得共今の生徒の願は吾覆轍を不踐様に致度ものと存候得共此も亦馬耳風ならん此節は何に致し連日之烈風耳本年之氣

候にては秋實は如何哉此世況に加へ飢饉災あらは外國教師は時に乘し本國より多少之資本輸入し窮民救助之策より宗教一變の一大變動も有之乎と杞憂候宗教眞理の未開は實に腹心之憂耳に非ず焦眉之災と存候是又馬耳風ならむ連日之烈風は如何御消光被遊候哉御同然最早最老之身何時死るも何も差支無之候得共後進輩之今少々學路之相進を見て死せは老後多幸と耳想像否妄想候也金七十論も當時必讀の書と相心得候佛法は小乗有部宗が基本に候故小乗の義不相心得に大乘耳通讀候は例へは台家の書を不讀にて當家之御書耳偏讀候と同様歎と見込候可讀之書は汗牛候得共野衲輩は壯年之時に貴重之光陰を徒消し慚恨之至に不堪候噫宗教之家屋は柱根摧朽梁棟傾斜何れとか修理相加度と相思候耳外教之烈火四面一時に迫れり消防之人部（夫）に乏は遺憾に不堪候説教未振演説未開雜誌新聞之路未立人材教育は唯名耳聞けり唯一門は何處そ尋得度候目は濛（蒙）し齒は落身體疲懈し但念空無相無作耳亦可奈乎生徒輩の春秋に富者は進求菩提之志願相立候様晝夜切願候嗚呼御病體をも不顧遂々長文無益の事上申と閣筆候時下向暑爲法萬々自玉 草卒頓首

六月一日

文

嘉〔花押〕

編者曰。此書、中山法華經寺寓鑑師宛の封筒にあり。蓋し入れちがへならん。その



封には「五月七日出」。十六年五月八日付の中山執事末吉の廻送附箋あり。曰、「吉川日鑑殿。今八日發途、千葉縣海上郡銚子港荒野村妙福寺に御發錫の事、法華經寺執事」。○充治雜誌は十六年八月創刊。○本尊辯は十七年十二月發行。

(清令寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年八月五日

一六四

如來示炎蒸難堪候愈御清穆至祝偕は雜誌之事縷々御申聞被下御深切之芳意深奉謝候早速其掛へ申聞取調候處全從前取扱候者<sup>即△</sup>の疎漏に而記簿法不明了唯金十四圓氏家氏とのみ有之候故右十四圓は七口故廣告へは賛成金七口十四圓と記載候得共來狀を以て考候得は右十四圓久保田日遙等已下六名△七口の賛成と判定候故次號正誤之心得に候購讀料六圓八十錢は取調目今不相分篤と取調後便に可申上候既に請取書先方夫々へ配布に相成居候得は必納は勿論の事に候從前取扱人は百事如此耳糲糊の端緒に候故引續之者頗艱難相極候依て此度煩敷候得共入會連名記載候得は必ず四方より不完全の責續々來候を待て一々改良致度見込に候處速に御内知被降深奉謝候四方にも必有と見込候故爾後御聞込も候は、甚恐入候得共香侍者へ御申聞御通報奉願候本人此迄右金遣込八九十圓夫々贖償候得共餘殘に無明未盡夫

はともかく記帳更に無之候故幾許の遣込やら不相分候此には後任の者深痛心仕候 ○過日長岡氏來遊半日清談且分韻等大に愉快に候其節尊師へ詩集三冊遞送被托候故早速翌日淺草大林坊止宿爲持遣候處既に發後に相成候故鶴川へ相托申候近日着候上は可然長岡へ御通信奉願候 ○世間宗教紛議逐日喧敷候國家之一大變事と杞憂候耳時下酷暑爲法御持病大切に御保養奉願候 草卒不宣 頓首

八月五日

文 嘉〔花押〕

編者曰。長岡護美、雲海と號す。元老院議員。東亞同文會副會頭。詩は本書第一編に録す。(清令寺藏)

福田日耀師宛 明治十七年九月二日

一六五

鋤田孝山第十區中教院助教任免云々又假沙彌校教師申聞之事之儀右は孝山儀該教院助教被免度旨事情百般相述へ一昨十四年比より數度申出之旨も候得共其都度助教の有無に因り教院の盛衰相釀は通論也方今教師闕乏の折故一身上に萬々難堪候とも爲法丹精可有之旨說諭申聞歸院爲致候其後太田日照並太田勇猛は本人の深き緣由有之より右兩人へ哀願歎訴落涙



に相及候程なるを以て兩人に於て情誼難忍旨數々申出有之候得共前件爲法勉務之旨を以て不相替其儘に差置候其後十六年師匠澤田日教病死歸葬に際し出京し被申候には一旦歸國し葬儀濟次第事に因ては又々出京も致度と其節は本院へ留學願度と申候故藻原教院の助教差支有無相尋候處最早孝山無之候とも寛修勝勇の兩人有之授業上差支は更に無之尙助教免役之儀は藻原寺住職日淳へ協議行届之か爲に本照寺も退院致候得は再度上總へは不參の事に議決し實は歸國切の見込に候得共國元の様子にては出京候程に候得は決して中教院には差支無之候故右之段相願候との事其後同年八月出京歸院相願候節も念の爲に藻原教院辭役協議有無念詰候處既に本照寺退院候上は日淳も最早絶念被致孝山助教の議には云々無之候其儀再度書面往復且又品川滯在所に於ても直談に相及候上は後來云云之儀無之候と申事故本院へ歸學爲致候 ○沙彌校教師の儀は其後明十七年春は愈以歸國し少の小僧等教育致し一分護法の勤務致度と被述候故されは夫迄の處其教育稽古の爲に沙彌校教授有之度同校幹事文靜々本人へ協議し本人承諾の上に本年三月歸國迄の處教務依頼候なり尤も同校は有志私立の教院故教師等も有志授業の儀にて外中教院の教師と資格を異に致候へは管長の權外にして外教師の任免を以て論すへからざるなり右の事實篤と直に鋤田孝山御直間被下候は、日

淳申立の事とは大に相違可致と存候其上日淳へ御指令被下度候

助教辭令書不下付候事は渾て各教院々不相願候節は任免とも辭令不下付事は此迄宗務上の慣例也其故に下付せざるまてにて其例孝山のみに非ず此事官例を以て論す可らざる也且又本人事は八月より十月まで本院へ留學候得は該教院必用之助教に候は、本人へ促歸なり本院へ何れとか申出も可有之處更に其居動無之は是其孝山と日淳との協議行届候と信認候

僧侶並に教師たるの分限及其稱號を定むる事

剃髮染衣已上の者は一般僧侶たるの分限とし法薦三年未滿は之を沙彌とし滿三年已上は一般之を沙門と稱す

中教院學科卒業已上の者は一般教師たるの分限とす中教院卒業の者を教導と稱し大教院卒業の者を教督と稱す

寺院の住職任免及教師の等級進退の事

寺院住職は交代の際本寺に於て至當の人撰を以て管長の認可を經由し之を任免すへし犯罪を以て公判を稟たる者或は宗制並に寺法に違例し職務道德を欠缺したる者は本寺に於て其事由具狀を以て管長の裁可を經由し之を免すへし



教師等級は卒業後の法薦を以て教導に五等教督に五等を分ち管長<sup>(マツモト)</sup>を進退す法薦滿三ヶ年とに一等を立て轉傳して五等に至る

中教院卒業後各教院に於て助教勤務する者並に教院留學する者は法薦一ヶ年を以て一等を進め轉昇して五等に至る

中教院卒業後各寺に於て學術非常に昇進し又は布教盡力並に功查秀特<sup>(ウツ)</sup>なる者は出格の昇等することを得る者とす

教院は人材養殖の叢林にして傳道布教の必由する處なり宜しく學事を作興〔以下空〕

○〔別紙〕

孝山助教任免辨明書

鋤田孝山第十區中教院助教任免並沙彌校教師之儀右は昨十六年八月中本人が本院歸校之儀被願出候に付中教院助教勤務の者歸校不相成之旨一往申聞候處既に助教の儀は免役し該教院には關係無之候へは御聞届被下度旨縷述有之に付則歸校聞届候 沙彌校教師依頼の事は八月歸校後十月下旬比本人と協義<sup>(マツ)</sup>之上暫時擔任爲致候耳右は本院本科生の資格が猶本人有志にて該校教授盡力有之候譯に候得は無論藻原教院には關係無之事に候

右兩様事實之通に候得は神保日淳の申立とは大に相違候猶本人御招喚之上篤と御直聞被下度此段具狀候

明治十七年九月二日

新居 日 薩

管長 福田日耀殿

○ 教法沿革 (五年<sup>政關</sup> (八年<sup>無關</sup> 分離<sup>分</sup> 十七年<sup>舊宗を合</sup>)

以此觀之漸次改良と云へし

然に十九號の達に私に憶測するに二あり

一方表面より之を見れば方今人文日に進み政教自ら各分すへきは勿論なるへきに政府關涉より何分か宗教者布教の進路に於て制肘するの憂なきにしも非ざるへし故に之を放任して自在に布教せしめて一層皇國の教法を盛實ならしむるなり又教法の爭亂をして政府に波及せさらしむるなり

一方裏底より之を見れば關涉を解き盛衰は其宗に任すのみと竊<sup>(竊字以下棒消)</sup>に耶蘇をし大に駁布の便を得しむるへし



野納昨日闕席して本日之を論ずるは臨場に甚た恐なきに非ず雖然宗門の大事に關すれば之を黙止するに忍ひす聊か卑見を呈す

家に家庭の規則あり國に各國法の規則ありその慣例ありて事務を處理す苟も事に害あらざる已上は舊慣に仍るを允當とす凡そ教法家の如は固より道德を旨とし禮讓を以て百事を處理す必ずしも世間普通法のみを以て準擬すへからざる者あり苟も道德に闕け禮讓に違ふなくんは舊慣に仍るを可とす今ま會議の如も其發論自在なるへし論旨の可なるは上下の別なく之を採用すへし畢竟は議事の允當を得を以て大要とす夫の着席の順次の如は宗門固有の席次あり此準則に因て處理せば可なり必しも普通抽籤を待て而後に事理すへからす夫れ人に法蘭あり寺に寺格あり然に之をも混淆して一場に臨席するは尤も禮讓に違ひ大に道德の旨に戻れりとするは一目瞭然たるへし故に混淆の席を改て昨日午前幹事の定る處の席次に復すへし

已上は漸次改良の旨を以て論ず若更に急進主義に順ひて之を論せば今回の議事は宗門の大面目を改むるの根據なれば特り舊慣に仍らざるのみに非ず痛く舊弊を一滌し一點も因循するなく一般の僧侶みな就學すへし一般の僧侶みな品行方正なるへし一般の寺跡公撰なるへし一宗の内外を他より之を縦覽横觀するに一も世間文明に愧るなきに至の好結果に人々決意し敢て一點の假借するなくんは是亦眞に貴み甚た企望する處なれば席次は此儘据置を可とす

右兩様の中議長猊座の裁可を待つ

編者曰。此の文、草案のまま存す。本書は不明なり。十七年會議及鋤田孝山の件については鑑師修師宛の尺牘参照の事。  
(脇田孝二氏藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年九月四日

一六六

過刻は參堂長坐病體をも不顧多罪御海容奉願候偕其節管長の事申上候は御含迄に申上候也其時に臨み有志者の所論は無論身延永管長に歸局とは心得候得共西京本山一般の處にては是非輪番管長に致度専念に被察候左なくは東西分離兩管長と致見込の由に傳承候晚景歸院候て小泉より相承候には本日西京諸本寺悉皆合議日禎師總隊長にて本寺無漏東上東西兩大教院設立主張の見込にて本日西京發途に相成候由申上候由也此度の會議は頗難事件と被察



候學事並に品行の改良論等は掃地候様に相見え歎息之至に不堪候宗教維持の念等無之只々人情論耳政府へ上申方如何可致哉と思出候得は大地に埋骨いたしたき思ひに候此度會議結果は萬年の災根に不相成哉と痛心に不堪候六門下已下諸本寺にて爲法之發議有之度と存候乍然佛天加護にて如何の好結果も有之候哉も難計宗内人物闕乏噫可奈哉只々先刻申上候檀林新設し百年後の幸福を吾輩拙老共の遺物に致度ものに候西京諸本寺の景況相承大息のみ何日に歎宗風作興に可至歟最早餘命無之候得はとも見事不叶と悲涙相催候御面會も候は三邨上人と御内議奉願候野生は此度は學事の外は更に發議不致と決心仕候此兩三日は之か爲に怏々不樂先日中は耶蘇の爲に一身を犠牲に可供と見込居候處耶蘇之處左のみ暴發も無之然に此度の愚論に愁死候は遺憾不少候最早阿難竹林の偈深く反省すへしと存候耳餘は拜面縷々可申上候御持病療養奉願候 草卒頓首

九月四日夜

容 月 文 嘉

編者曰。此書、谷中瑞輪寺旅寓鑑師あて。蓋し宗門大會議の前後なり。○日禎。本國寺歴、管長大僧正釋日禎師。○六門下は六老僧跡。玉澤、池上、藻原、眞間貞松、平賀をいふ。○阿難竹林偈、因果鈔に出づ。謬説の正義を竄曲せしめたる話。  
(武見潮寛師藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年九月五日

一六七

御持病如何に御座候哉昨夜鳥渡野書呈候定而御落手と心得候儲は御配慮被下候神保一條本日野生直々同人に面談行届伺書は差戻し候間御安慮可被下候儲會議之事は實に痛心に候此度の機會相失候而は無興學扶宗之期遺憾に不堪候のみに非ず佛祖へ對し不相濟事と慚愧に不堪候宜敷御賢慮議案等御草立置奉願候今朝三邨々郵書到着御含迄呈貴眸候御面語の節は興學育英之段御協議奉願候 先は用事耳 草卒頓首

九月五日

容 月 文 嘉

編者曰。會議。十七年大會議。九月十二日—廿六日。

(清令寺藏)

三村日修師宛 明治十七年九月六日

一六八

四日夜の華墨並五日之書何れも拜讀御精誠の程奉感佩候昨五日に殊更に神保に面接し懇々説諭且つ孝山の事實相違之筋等は孝山を呼寄せ同人面前にて明辯し苦情一切氷解候段御安慮可被下候此事日鑑師へも鳥渡書通候只々會議安穩宗學振起の大義相立候様奉祈念候 ○



西京々諸本山悉皆東上の事は有無とも因縁に御任せ可然と奉存候と野納は愚案仕候乍然御申越にまかせ一言申上候學制等の事は深御案議十分御草案願上候先は用事耳何れ八日朝には得拜顔縷々可申上候 草卒頓首

九月 六日

文 嘉

此程は宗局教師其末生徒下男門番迄鄭重の御配慮却て恐入候夫々へ配布何れも深感佩難有頂戴仕候從野納可然禮言可申上旨申出候儘御禮申上候 ○昨日は態々眞如院師參堂被下殊美果澤山惠投芳意不淺令感謝候故御序に可然一聲奉願候 草々又拜

編者曰。修師。淺草松葉町本覺寺寄寓中。○孝山。鋤田氏、加賀の人。潤樹院日得。大教院助教。第一沙彌校教頭、金澤立像寺、妙立寺。權大僧正。昭和三年十月七日寂年八十。○眞如院。光山塔中。  
(故冷泉要惇師藏)

小野 齋億中野文靚兩師宛 明治十七年九月廿二日

一六九

來廿五日に谷中妙法寺教會説教之約束之處野納不在出席兼候に付先方へ斷なり又は智宏其比滞在に候はは代説可致様取計可被下候

一、千代蓮華寺井上日龍師々信徒授與之本尊被頼居候間本尊筆筒引出に認置之本尊も少々

は可有之哉と存候間千代に名前御聞合なり但しは内佛御經机の上に依然目錄有之候得は右の名前之通授與書代筆被成御遣可被下候

一、博多妙法講之本尊は其内相認め教院へ届候間其節は先方へ先之通遞送可被下候該講々壹圓五十錢先規通り樂善會へ喜捨有之候得共大内氏未歸故其儘野納預置候右金子も御經机の上に有之哉に相心得候大内歸京之上可然御取計可被下候若又金子不在に候は、從野納差出可申候

先は用事耳 例月之説教不相替勉勵可被成候 草卒頓首

九月 廿一日

神奈川 深大寺寓

容

月

机の引出に本尊料を月々驛遞局へ預候通帳壹冊有之候間右は別に仕舞置き序に永壽院隱居に預置奉願候

編者曰。宛名は宗教院内兩人あて。差出は神奈川深大寺とあり、蓋し、神大寺村雲松院のことにて多分明道協會の講義ならむ。○樂善會。盲聾啞教育の私的慈善會。大内青齋氏、右會の主任。發起人。○永壽院隱居。山口日要師。本門寺司役、中教院勤務、沙彌校教師等。○此書封上に十七年の消印あり。よつてここに置く。○小野齋億、山崎と改む。甲斐加賀美の人。身延中教院卒業、二本榎大檀林に入る。



中村敬宇小笠原東陽に學ぶ。廿七歳一ノ瀬妙了寺住職。杉田日布野澤義眞と謀り、  
教友雜誌を起し、山梨普通學校を創め自ら校長となる。延山及宗門に盡すこと多  
し。明治三十二年三月二十九日寂。年四十一。説教に長じ。小傳馬町祖師堂、清  
淨結社の説教を擔當す。又薩和上に隨て各地に布教せり。(柴田童秀記)

(一之瀬妙了寺藏)

新居國太郎氏宛

明治十七年九月廿六日

過日は御來院之處其節は不在にて遺憾之事に存上候備本月十五日の嵐にて眞間山殊之外大  
破に相成住職梨羽上人も當惑相極手兒那神殿つぶれ差當假堂新設いたしたき由に候地方一  
般之風損にて何れへ話之致方無之無據野納へ何れとか工風被下度申出候得共野納も一應は  
相斷候得共元來野納撰擧にて任職いたし百事世話致居候事故あながちに斷兼候就ては此節  
柄貴店も萬々手元不都合とは見込居候得共明年三月迄金貳百圓拜借いたしたく但し利分之  
處は通例にてよろしく御坐候間何れとか御取計可被下度此事鳥渡一泊掛相願に參度とも心  
得居候得共此節色々不都合之事のみ澤山何分他行いたしかね候間無據書面にて内々御問合  
申上候尤も野納并に本所妙源寺證人に相立候間御心得迄申上候其内御出京之節は鳥渡御來

院願上候 先は願用耳 草卒

九月廿六日

文

嘉

(故新居國太郎氏藏)

吉川日鑑師宛

明治十七年九月廿七日

過日は參堂不相替厚待奉謝候備は本日會議も先先結局に相成就ては管長の處多數甲點にて  
尊師撰定に相成衆議員より野納にて代請可申旨被申候得共甚不都合之旨委曲陳述候得共議  
場一同の迷惑に相成候間是非代請可申旨被述候に付不得止代請申置候是非明日は御迷惑な  
から午前早々鳥渡御來院被下度此段奉願候委細は兩人より御尋聞可被下候先は用事耳  
草卒頓首

九月廿七日

文 嘉 日 薩

(武見潮寬師藏)

吉川日鑑師宛

明治十七年十月三日



本月二日華墨忝披覽候先、駒込堀内等夫夫法用も大略相濟明四日發途之由爲法大慶之至に奉存候釋教正への書往復兩通寫披見致候御申越之旨含置候。○豫て信徒企望の札洗米等更に受候者稀成る由に候此は全く精神無之者は悉皆如斯也と存候。○池事山主事は野生之想像には本心相失居候哉に被存之間爲法御教諭有之候は、心遂醒悟之邊に可相成哉と存候間格別不都合に御差支無之候は、枉駕奉願度候明夕は貳本榎へ歸寺之事に候十五日の牢獄爲之貴重の光陰相費會讀等相廢し漸愧之至に存候先は用事耳時下逐日秋冷萬々自重是祈。草卒頓首。

十月三日朝

容月文嘉

編者曰。此書。深川淨心寺内容月文嘉差出、谷中瑞輪寺掛錫鑑師宛。

(武見潮寬師藏)

三村日修師宛 明治十七年十月六日

一七三

昨今は漸御歸山と相心得候長々の會議永々の道中兩様とも御疲勞之段御察申上候御滞在中は不相替失敬のみ日々申上候段恐縮之至に奉謝候尊聖師も兩楹の間に介せられ御苦慮之程

奉恐察候本所にて御分離申上候後快々歸院し爾後逐日艱難相極候進退とも其度を失し深痛心仕候御憐察奉願候御出立の日野口より別紙の旨申來候故書狀の儘御廻申上候先は取急候まゝ餘は後音縷々可申上候時下秋冷相慕爲法萬々自重。草卒頓首。

十月六日

文嘉日薩

(故冷泉要惇師藏)

新居國太郎氏宛 明治十七年十月廿二日

一七四

其後は眞に御無沙汰にのみ打過候鳥渡御尋申度とは心掛居候得共何分にも出かね候借は沙彌校の資本金三百六十圓程集金有之昨日文靜々請取候就ては公債證買入度と心得候得共唯今が宜敷候哉十二月の方が宜敷候哉不相分候故鳥渡御問合申上候御心當御問合御通知可被下候何れ其内一泊旁御尋申上度と樂居候。先は用事のみ。草卒。

十月廿二日

日薩

吉川日鑑師宛 明治十七年十一月十八日

一七五



御在京中内外共種々繁雜欠敬耳海恕奉願候借山林一案はとかくにむつかしく相成候内議之由粗々聞込深痛心候實に山田卿轉役が抑も不幸の原因隨而伊藤等の魔説紛々より種々政路方針相轉し大に苦心に相心得候 一昨日十六日に態々地理局長櫻井君參院折節野納中寒なれとも押て面會候處昨日社寺山林取扱規則内規相定候とて右規則内見候野納鳥渡寫取度願候得共内々御見せ申候も交誼々の内事故御寫取は甚迷惑の由に見請候故その儘に致候右規則にては社寺山林の官林に屬する者は願に因て該社寺に委托の大體也到底復舊論は自然難立候様に被察候故種々往復論辨候處曰く品川へ篤と御論談可然也又曰尊師の見込論は山田參議へ能々御相談可然全體同參議は尊師の議と符合自然唐堂上の原案にもと被申候故夫々參邸話も致度候得共何分中寒始終頭痛口熱等にて他行いたしかね殊に午前八時前に不參候而は到底面會も難計里程も二里内外故不快中日々痛慮候耳本年は全體不快勝の處會議後は精神の消亡(マ)より一層衰弱釀本年は到底在院も難相成と從今案事居候其内病間を以て一往品川等面談懇願之心得に候得共成效は難必甚遺憾之心得候一昨年來多少精神相費し愧をも相忍ひ數々官邸奔走候得共事不如意其末今日の景況也往時を回想すれば氷に鑿候様の事也乍然成不は天に在り先々人事可盡と見込候此段御洞察奉願候 ○借此は是也教院も五年已來

の千辛百苦漸に今日に至り此度政府關涉相解候上は更に幾層の盛大にも存立候も全く夢の妄想耳(マ)のみに非ず從來教院も有も無の如く寥々空房耳無人之地に入か如し生徒も今に不落付候然に野納は氣分不宜より兎角に時候に易感時々伏枕のみ大厦之將倒一木之支る所に非すと存候且は野納の在院より自然に他の指撃も有之候得は程よく爲法隱遯致度候且は昨今別而病衰故破邪顯正の氣力無之候人盛勝天と暫時黙而餘命相送度候 ○密保護之御依托は到底不行事と御見込願上候 ○來月大試檢後は暫時熱海へ避寒の心得に候 ○池上は至極折合宜敷教院も勢力挽回し生徒欣々然と勤學の由に候 ○湛誓の雜誌投書は如何のものに候や本人の志は可賞世評は如何哉と案事居候無二道人の寄書は感々服々學事又慷慨の話の大に精神相養送世之一樂不過之と奉存候先は御歸山後御伺申上度耳時下俄に寒氣凜冽既に處々氷も張候由也寒さは老後は虎狼をも畏候 爲法萬々自重 草卒頓首

十一月十八日

日

薩〔花押〕

○ 小童畿太郎事何分宜敷御教示奉願候

此書認了候時華墨來着拜讀山中は別而寒氣にて宿痾も隨而不宜候由御案事申上候此書

尺牘



面中にも密保之事有之尊前の御煩慮深御察申上候其内梨羽等に能く話可申候

草々又拜

編者曰。池上云云は振師入山後の景況ならん。○湛誓は杉田日布大僧正、立正大  
學長。○雜誌は妙法記聞、後の教友雜誌。  
(清令寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十七年十一月廿八日

宗祖深祕傳の事は相心得置候其内幸序何君へも話置可申候

愈御清穆至祝偕は先般鳥渡申上候山林一條に付此程病を押して品川殿私邸へ參扣候折節多員  
の客來に候得共草卒中鳥渡面晤候處品川曰例之山林之事は充分尊師等の見込之通都合宜敷  
事に議定し既に縣令にも此程委細に申含め置候間該縣へ御申出に相成候は、速に成功にと  
の言也右品川の申候は此度内規の相立候社寺上地官林委托の事にて一般社寺保護の意より  
申也老納一昨年來奔走は山林復舊の事也其事大に相違候故直に話も致度候得共何分座に多  
客雜沓中故遺憾ながら歸り更に歩を轉して地理局長櫻井へ相尋右の意を相述櫻井の點書を  
以て農商務省へ出頭し山林局<sub>局長</sub>也主任者山本清十郎君に面談し縷々事情相陳候得共山本

曰く尊師の所論は最に候得共客年差出の願書並に證據物等にては唯今の詮議にては難聞届  
の見込也且尙省の主意を論ずれば上地官林は一般の取扱也總本山の末派等の區別はなく只  
々寺院一般保護と山林養殖の意に出る也總本山等の區別不得止等の事にて別途に取計候等  
の事は内務省の主任社寺局の事也乍然(此より極内談也老納の實意を先方の申分也御他言  
御無用)此度願書一旦却下に相成候とも更に又々御申立に相成候は、又々評議にも可相成  
と存候故能く縣と御相談の上何れ縣令よりの又々申立にて所願も不貫事に無之候と被申候  
故其足にて縣令の宿所へ參り面晤早速に話に及候處令曰先々委托規則に準し取扱の外は無  
之候と被申候故老納種々不都合の事も話し元來身延の山林は諸宗一般本山の地質に異にし  
且つ山林の外に別に永録も無之旁以て復舊致し度候委托官林にては身延にて培植とも自由  
とは申ながら元質が官林とありては信徒の信仰上に大に感格を異にし布教上にも大に響を  
なし且つ培植に於ても後來充分の見込も難相立也將又總本山も末派も同一の官林にては總  
本山の資格も難相立元來本山は本山丈の資格を有してこそ末派統轄法相立可申也此度は願  
意難相届候とも更に御賢慮に願度旨縷々話致候處令曰本末同一の取扱も少々不都合也今般  
の規則にても僥倖濫擧も不免候と考候故何れ縣へ申遣置候故と本省を右願書に何にとか指



令も可有之間其上にて又々工夫もと被申候故何分宜敷取計奉願候と申置候就ては令も近々  
 歸縣にも相成候間御病中出甲は御難澁とは察上候得共一度出甲し直直に御依談有之候様奉  
 願候此度通常規則の取扱に相成候は、挽回は何の日と被案事候乍然此度の規則にても充分  
 に身延の所領同様の貌に候得共何分不満足に奉存候篤と御勘考奉願候 ○本年は寒さ非常  
 嚴也病納頗る縮頭耳寒は宗局より畏敷相覺候來月大試檢後は早々暫時溫地へ避寒候見込に  
 候山は嘸々一段之嚴寒と御察申上候爲法萬々自重保養奉願候頑童宜敷御教養奉願候乍末里  
 見等久保田等一同へ幸序に御一聲奉願候 先は當用耳 草卒頓首

十一月廿八日

容 月 文 嘉

編者曰。此書封筒に鑑師の自記あり。二日着。即日返事出す。里見は日坂師、○  
 久保田は日遙師。○何君は何禮之。  
 (清々寺藏)

新居國太郎氏宛 明治十七年十一月六日

一七七

華墨忝披讀候過日は不相替疎略に打過候其節御話有之候人車之儀早速に御詔被下候由御申  
 越之通にて何も不足無候決して急ぎ候譯に無之候間御都合次第當年内にてよろしく候印は

上ヶ羽の蝶一紋御付被下度候ほろの巻まきき舒のびは金ものにて御申付被下度候 ○齒の藥香水壺  
 瓶頂戴致度候 ○篤々西洋襦半惠投之由難有令禮謝候 ○襟巻も未だ落手不致候得共近日  
 銀座へ使差出積に候是又難有御禮相述候先は取急返事のみ餘は面晤縷々御話可申候

草卒頓首

十一月六日

日 薩

編者曰。篤は國太郎氏夫人、おるよ氏の女。銀座は近江屋常七。

吉川日鑑師宛 明治十七年十二月九日

一七八

本月二日三日之華墨類に拜讀法體清穆至祝偕而山林一條に付御操合御出甲も有之候由爲山  
 深奉謝候就ては此度山林局に於て内規相立其規則も老納一往は櫻井君の注意にて内覽致候  
 得共右規則は官吏の取扱の内規故公然に之を寫取候譯には不參如何せんとし櫻井に竊に之  
 を計候に同氏交誼より要件耳數條寫取り竊に老納心得迄に贈與に相成候間尊師御含まてに  
 又々爲寫差上候間御覽置被下度尤も右の次第故他に叨に御話且通覽等は御斟酌奉願候 ○  
 幾太郎事御慈惠にて得度剃髮之由眞實御禮申上候定而兩親も満足喜悅無量と存候其内兩親



へも其旨申遣可申候就ては種々御配慮被下候段此亦難有御禮申上候何分老納唯今之處にては不可言逼迫故背本意候唯々任尊意候耳他日御禮申上度と奉存候 ○本年之寒は近年無之嚴寒故病納頗閉口耳只々大試檢後は早々避寒之心得に候山中の寒は更に一層の凜冽と深奉察候 時下爲法萬々自重 草卒頓首

十二月九日

容 月 文 嘉〔花押〕

編者曰。封筒に鑑師朱書「十二日着」。

〔清令寺藏〕

守本文靜師宛 明治十八年一月五日

一七九

新年至祝偕は義眞老事舊年歸省有之候由尤も直様甲府へ書狀遣し一月説教相勤め候様にと申遣候へ共萬一不參に候は、生徒毎日交代相勤め候事は同所にて甚不相望候故一名取定め義眞の代に相勤候様取計可被成候眞意の處は八王子邊へ巡回に被出候哉若手明に候は、同人にて宜し不在ならば宣明可然歟不都合無之様取計肝要也 ○文靦病氣は如何に候哉後便御申越可被成候同人へ法衣一通遣度候就ては貴老の紫七條色上げ候様急々松本へ御遣可被下候直綴は老納歸郷を不待壹服同屋へ申付新調可被下候品は可然見立依頼候新寺へ參候事

寒除後に參候様傳語可被成候傳馬町説教の景況は巨細に御申越可被成候二月は必ず出席候事江上並世話人中宜敷傳聲有之度候 先は用事耳 草卒不一

一月五日

容 月 廬

編者曰。○義眞、野澤氏。甲府遠光寺、○嶺億、小野嶺億師。市之瀬妙了寺。○宣明。一貫院日政。武田氏。岡崎の人。山梨中教院、大教院に學び、身延學院助教。休息立正寺、横濱常清寺。身延山務監、宗會議員、立正大學學監。宗務總監。權大僧正。昭和三年十月六日、壽六十三。○江上勝義。小室山日如上人弟子。長崎人。學小西禮林、中山智泉院に入行。深川本立院住持中、薩和上と親厚、出版費を寄附し、伊豆伊と共に、清淨結社の創設に發願參畫し、小傳馬町身延別院（祖師堂）及村雲別院の創設に従事す。大野本遠寺、藻原藻原寺、小室山に歴住。退藏於小傳馬町。四十一年一月廿九日寂、壽七十六。葬本立院。曾て沙彌校萬人講を創意し淨心寺小教院を創め、又淨心寺清淨結社を結成す。

〔松本龍興寺藏〕

吉川日鑑師宛 明治十八年二月廿七日

一八〇

湯本岩本方之兩通併拜讀早速に回答可申之處過日來之烈風殊に船中頗困難相極終夜不眠夫故此地着已來兩三日平臥也且好案も無之候故遂に遅延候段海恕可被賜候三邨後書縷々の情



實は今に不始之事也爾後兩三年相立候も同様歟も難計候只々唯今移轉候而は本圀の後任無之京地教院今さへ生徒減少の由也立地に廢置の貌に可相成候外に教師相聘候も彼地へは有爲の人は不參候此は大に可患之事と存候乍然此に有益れば彼に有損は必然也兩全は難得事に候其内事の輕重御計被成決斷可然と存候元來は不動を爲是也雖然尊師之意底不可永住と見込候得は御留不申候方今眞に有爲之時節也決而安居可致時に無之候禍福得喪は彼天に付す唯我精神を爲而止而已遲疑は事の機を相失候住不御決案可然と存上候宗門之前途實不容易願くは有爲之人を得て挽回之基相立度と存候耳尊師も同感なるへし ○恕軒氏非職被命候由深氣之毒に存上候好内君に死別離今又非職とは先生の意中被察候 ○此地再遊來寒氣は一月に倍蓰し快晴は一日も無之候 ○天下も頗動搖爾後兩三年は不安穩之時と見込候教法家の尤も注意有之度時節と存候 先は當用耳餘は讓後音候 草卒頓首

二月廿七日

容 月 文 嘉

編者曰。熱海在浴中。

(清々寺藏)

新居國太郎氏宛 明治十八年三月二日

愈無事壯健欣喜之至に存上候先々海上無事歸宅愛出度存上候此地入浴中高々落被成候事不存候故其儘に打過候歸宅後は如何に候哉最早平愉(平愉)に候哉御案事申候偕て豫而願置候寒暖計至極簡便之品永所持可申候外に體溫器壹箇注意惠送忝御禮申候蒲萄酒蜜柑外に南京菓子等澤山に御惠投忝令落手候何れも厚意御禮申候廿七日伊豆山迄遊歩中少々感冒時々伏枕候故乍存禮狀遲回候乍然本日は宜敷入浴候故御案事被下問敷候 ○沙彌校資本取扱を銀行へ依托云々の事は何分不安心の廉も有之候間今暫時御見合被下候尙其地の景況も能く御探聞可被下候 ○寒暖計昨日は室内朝六十度已上室外五十度已上

本日は室内漸く五十度に候室外は四十度已上に候寒暖不順能く時候御厭可被成候るよとくにも宜敷傳聲可被下候 先は用事耳 草卒

三 月 二 日

新 居 容 月

貫名日達師宛 明治十八年三月四日

此八九日比歸京爾後は引續四月中旬までは東京に候回答は其合にて御差出可被下候 草々

二月九日之華翰忝披讀先々清勝法務被成候由法喜不斜候偕は老納九州遊化の儀懇賛成大略



御見込も御申越芳意忝相心得候此四月比勢州に派出し六月比迄には該地用事相濟夫々九州に決意斷行之事に候間可然地方先導百事周旋被下度願候確と遊化之實效相立候様致度候老衲も餘命も幾許無之候得ば最後之巡教と相心得候猶有志者と可然御談示置奉願候定而此節は阿部聖にも御面會と存候同聖とも可然御相談可被下候九州は先直に本佛寺に着候方可然哉是又幸序一寸御示可被下候先は回答用耳時下春寒猶甚爲法萬々自重 草卒 頓首

三月 四 日

容 月 日 薩〔花押〕

編者曰。差出地、豆州熱海大乘寺寓。○阿部は大分法心寺日厚。

〔永田慈明師藏〕

頂岳龍觀師宛

明治十八年三月四日

愈清穆法務至祝昨年中は由良聖隨行にて扶教結社結び巡回布教盡力之由令感謝候處説教も逐日相開候由に傳聞法喜不斜候東京も生徒説教次第に相開度隨而小傳馬町大教院出張説教場も毎月一週間宛の説教も聴衆二三百員宛は有之候此段隨喜可被下候就ては昨年秋比鳥渡申置候通本年三四月比には東京再遊被成候而大教院説教掛擔任被成候而は如何哉實は

老衲も無據法務にて四月頃より勢州へ派出布教し秋八九月迄は不在候故東京の説教も被案事候故願は貴老出京右説教擔任被下候はゞ大に好都合と存候是非操合出京有之度候出京之有無至急に一寸回答被成度候老衲も昨暮より熱海浴養本月十日には歸京候事に候故回答は東京へ御遣し可被下候 ○潮仙老も隣寺本覺寺へ住職の由至祝幸序別紙同様傳聲可被下候先は當用耳時下春寒爲法萬々自愛 草卒不一

三月 四 日

容 月 日 薩〔花押〕

編者曰。師は大檀林出身、廣島市妙頂寺主、宛名に龍寛とせるは蓋し觀の暗記の誤り。○由良日正師、津山妙應寺より本山妙覺寺歴。宗務局執事。薩和上御不在中管長代理。明治十九年二月二十五日寂。國學に通じ和歌を善くす。○岳潮仙師、亦大檀林出身。中山滿行。

〔廣島市高木正實氏藏〕

貫名日達師宛

明治十八年三月廿一日

本月十二日の華墨忝披讀縷々巡回の順路丁寧に垂示芳意不淺令感謝候右は勢州山田は新寺開堂供養之事第一義也舊四月廿八日宗建吉日を相卜し法筵の見込に候右法用相濟次第先々流川本佛寺へ着之事に相決居候此にて地方寺院と篤と協議之末巡回可然者に候はゞ縁に任



せ漸次布教の見込に候諸本山等の従前之巡回とは相異也只々不及眞實之布教相施度と存候何れ面晤之節可然周旋被下度候老納の底意も願は一ケ年も心閑に布教致度ものと見込居候萬事因縁故如何に相成候哉豫定難致と存候新六月下旬迄には流川へ到着可申候何分宜敷御世話可被下候先は不取敢流川着之事申進度草々布字 餘は後音縷々可申述候 時下春寒未退爲法萬々自重 頓首

三月二十一日

容月日薩

○〔別紙〕

巡教日割

四月廿四日 四日市より山田へ御海路  
 廿五日より廿九日まで 山田御布教  
 三十日 同處より熱海へ海路  
 五月一日 熱田より名古屋妙善寺へ御着  
 一日より十日まで 同處御布教  
 十一日 黒田村法蓮寺へ御道中  
 十二日より十四日まで 同寺御布教  
 十五日 桑名へ御道中

十六日より十八日まで 三重縣桑名郡桑名顯本寺に於て御布教  
 十九日 津へ御道中  
 廿一日より廿四日まで 三重縣安濃郡津伊豫町佛眼寺に於て御布教  
 廿五日 松坂へ御道中  
 廿六日より廿八日まで 同縣飯高郡松坂中町法久寺に於て御布教  
 以上

(永田慈明師藏)

小林日昇師宛

明治十八年三月十一日

一八五

謹啓愈御清穆至祝偕は此度日鑑師積年病氣不宜寺務宗務とも難堪候に付退藏尊師へ後任御付屬申上度老納も深賛成申上候抑方今有爲の時に當て有爲の器を抱き無用の地に居て日月樂過候は非特不爲法抑又與世法背馳也況宗門人材甚乏しく尊師之外更に無人は萬人一知也速御領諾昇進有之度候非敢計一人之榮利偏に爲法振學之義に候且闕門より三代祖山住職は天下學生後來之勸學不過之と存候得ば但目今老師母等歡喜のみに非ず亦老和尚にも教育報酬之一と奉存候無異議晋山被下度深奉願上候猶委細之旨は日鑑師より可申述候時下春寒猶甚爲法自重 恐々頓首



三月十一日

文嘉日薩〔花押〕

（清兮寺藏）

田中文靚師宛 明治十八年三月十七日

時下春寒甚敷候處過日來兩度親父參扣忝心得候持病之處も次第に快愉に相赴候由欣喜に存候元來如斯長病相惱候は一は佛神之嚴戒と存候年來勤經會讀等緩慢に付し頗游惰に相流れ謹慎之意に背馳候故遂に多年罪障一時に湧出候事と存候得ば爾後は志を改良し堅固勇猛之志願相起惰氣一洗可致就ては病中何の所用も無之候得ば日課に一部全讀必不可闕様此書披見之日より可勉候左すれば病善知識之好結果も可有之と存候先は右讀經之儀申聞度候冒病執筆候餘は面晤教訓可申候 草卒不乙

三月十七日

容月日薩

編者曰。中野文靚、本山海長寺、昭和十年五月三日寂。（中野文隆師藏）

伊藤日清師宛 明治十八年三月廿一日

愈清福法喜之至に存上候過般阿部日厚師參堂之節早々夫々御回參被下丁寧之段忝御禮申上候愈四月十七八日頃には此地發途氣船に而四日市着夫々貴境相赴候間其節は可然御誘導被下度願上候山田新設之事は一宗之美目と深見込候貴聖等補助にて大成申度と存候支院並に講社等へも御序可然御披露可被下候 ○其地教院之事も舊功相立候様乍不及御相談申度とは又心掛居候れ面晤接候御話可申候時下未だ春寒退兼候爲法萬々自重 草卒頓首

三月廿一日

容月日薩〔花押〕

編者曰。眞珠院日清。字聞亭。名古屋中村町妙行寺日善に從て得度。天保十四年光山檀林にて新説。安政四年玄義滿講。妙玄能化。本園寺松林院に住し本園寺執事。明治七年教導職取締。八年の宗門會議に列す。第四區中教院設立主任。教師。十二年二月隱居。山田新寺常明寺建立に努力。四十一年九月二日寂。壽八十三。（稻田氏寫藏）

（稻田氏寫藏）

山崎日延師宛 明治十八年四月十日

愈清福法喜之至に候倍而豫約候一切經此度印刷全成候然に老納も此度本月十七日立にて勢州山田に參り夫より九州筋布教巡回大略明年四五月比も相掛可申と見込候得ば右經本之儀

尺牘



は老納出立前に御渡申度候可相成は貴聖方より御使を御遣被下度と存候尤も代價は手元の御都合にて此度に無之候て宜敷後にて漸次に宗局へ御納可被成候只只經本は其前に御渡申度候此段申進候 鳥渡御返事被下度候 先は右當用耳 草卒

四月十日

日

薩

(川越市本應寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十八年四月十五日

一八九

寒氣未退殊に不時候も甚敷時々雨雪病生頗困難相極候山中は嘸やと深御察申上候老納事も十七日發途之運に候處道中筋洪水舟留等の事にて一兩日延日し二十日に出立の事に相成申候爾後は尾勢兩國間より時々御伺可申上候若御來書にも候はゞ名古屋大光寺へ向御差出可被降候 ○日昇師も領諾無之様子に潮郁老よりの電報にて推知候左候得ば目下の差支如何哉乍不存痛心仕候定而御山に而は別而の事と推察申候尤も昇師よりも領諾不相成の事情縷々申來候老納よりも再往勸請も申遣候積にも候得共到底如何のものやと痛慮不尠候老納も此には愚按も無之候畢竟は管長は辭し寺職は今兩三年御在勤が至當と相考候乍然御同前に

餘命も且夕を不被計之危急に相迫候得ば夫も何とも難申出候只々百計相盡歎息のみに候猶御思召も候はゞ御來示奉願候 ○是純老も三月中出京之豫約に候處雪にて延日其内旭闇病死又々延日今に出京無之困入候乍然院中無事碌々生耳法門の衰微維新以來未曾有之事に候本年は老納痰症甚敷相成候死の前表と相勘候遂に路傍之草露と相消候半も難計と存候萬事因縁也と悠然と臨終相待む耳 ○十一日に信夫の亡父五十年法要同人の祭文感服落涙相催候也同人心事寂寥之由同感相憐申候先は當用耳餘は勢尾より又々可申上候 時下爲法萬々自愛 草卒頓首

四月十五日

容月文嘉

編者曰。尾勢巡回出立前、在京中、○潮郁は武見日愨師。○是純、小林日童師。○旭闇、越後柿崎妙蓮寺、海解師と同學。○十八年四月十一日愨軒先生祭先考文、愨軒文鈔三篇所載。(清々寺藏)

貫名日達師宛 明治十八年四月廿六日

一九〇

愈清穆至祝偕は先回老納九州行に付縷々御見込等御申越被下且引續其地方寺院信徒等と篤協議被下候由深御禮申上候然に本月廿日東京發鋪廿四日に山田へ着し實地見聞候處少數信



徒なからも晝夜苦心丹精し是非六月十一日即舊四月廿八日迄に工事落成爲被到度と奔走候得共元來分限不相應之起業也日限は甚相迫候也到底右日限迄は成就不相成候乍然半途にて供養と申事にも不參候且又一宗建立之誓願御立被遊候靈場故開堂供養は四月廿八日外にては不都合と申處を遂に老納九州巡回濟明年舊四月廿八日と申事に相決候就而は此地布教は別紙之通五月中に相濟み同月廿九日を六月初旬に九州へ向發備博多へ着之見込に候故可然御取計願上候就而は着引續同所にて布教可致者哉且又同處經過候耳にて直に流川邨へ着し兩三月も滞在候者に可致哉兩様とも可然御勘考取計被下度願候尤も此事法心寺日厚師方へも同様申遣候故猶御協議被下度候尤も愛知へ着之上は又々此地模様等委細可申贈候何分百事不慣の事耳故可然取計願上候猶老納布教の見込等は何れ面晤縷々可申候先は開堂供養延期に而巡回日割變更候段不取敢通知候耳 餘は後便縷々可申陳候 草卒頓首

四月廿六日

日

薩〔花押〕

編者曰。此書の差出地、山田一ノ木町日蓮宗説教所。○法心寺日厚、大分鶴崎法心寺住職、阿部日厚師、護法家なり。宗務録事。

(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛 明治十八年四月廿七日

一九一

逐日陽和愈御清適奉賀候陳は信徒の情願にて俄に有名の養老公園へ參遊し偕樂社千歳樓に一泊致候處真に一夕の仙境遊覽意外之雅興筆紙之盡す所に非ず就ては能勢妙見殿を引移し殿堂新設の企有之其受持を總本山へ深御願申上度由に申出られ候岐阜法善寺並に常榮寺等より巨細相承候處實地後來の見込も確然相立居候由且は信徒も七八名起業者は巨萬資財有之候程の者也何れも眞宗より近年改宗の人にて屹度盡力非常に思立居候間決而本宗の汚辱を相釀候儀は無之は勿論必ず後來總本山の光榮にも可相成哉とも想像候故此度信徒の者參詣に付妙見堂設立願書呈進候間御勘考御差支も無之候はゞ速に御領諾有之度御心得迄に申上候只今出立掛ケ車を待せ飛筆失敬御海容可被下候餘は後音に縷々可申上候 草卒

四月廿七日

日

薩〔花押〕

編者曰。此狀は使持參と見ゆ、千歳樓にて新居日薩とあり。(武見潮寛氏藏)

吉川日鑑師宛 明治十八年五月四日

一九二

華墨拜讀偕は豫御痛慮之開扉に付御出京と深御察申上候是又無據御災難と奉存候偕又日昇

尺牘

四七九



師事縷々御申聞條々委曲承知仕候交代は急は却而不宜と奉存候間乍御迷惑暫時永住徐々御運可然と見込候當分代理相勤候内には彼の内患も自然疎縁より次第に消滅可申と見込候野納事は大阪へは不寄直に神戸へ乗船の見込に候得共自然面會も候は、必ず勸奨可申候。○ 偕此地信徒岐阜清被申候には御眞骨堂内陣の四方はめ板續合すき甚氣に懸候故改作仕度と見込候就而は貫主様に御目に懸り御賢慮御伺申上度候依而東京へ御歸山は何日比に候哉伺出候右は大略之御歸山之日限至急に當地迄御報道奉願候野納十日までは妙善寺に滞在候御含迄申上候先は取込中當用耳餘は讓後音 草卒頓首

五月四日夜

日

薩〔花押〕

編者曰。岐阜清、岐阜屋清兵衛、名古屋の篤信者。○妙善寺、名古屋市橋町。和上巡教中。

(清兮寺藏)

吉川日鑑師宛 明治十八年五月十五日

一九三

本月八日付華翰十一日妙善寺出達(ママ)の際披讀折節岐阜鏡屋時田屋等參居候故幸と御歸山日限之御見込申聞候末眞骨堂の話に移り種々話之好序を得て拜殿之御見込之話も申聞置候右拜

殿之事も該社中にも始終心頭に相縣居候由に話有之候就ては老納此へ茹安賀村へ參候得は該信徒等にも不相替拜殿等にも丹精有之候様申諭有之度と被申候。○御開帳も殊之外繁榮之由耀妙より傳聞且祝且慚候尊師之意底御察申上候法運之衰微如是哉。○交代之事は晝夜心頭に横候老納此度は大阪へは不立寄尤も種々の事情有之の見込に候得共昇師にも一見致度且は舟の都合も有之大阪へ乗船の事に相決候就て考候には日修師も充分に身延歴代には加度意底と相考候其譯は昨年面會之節兩三度も薩鑑修と世間に風評も有之候得はと被申既に三人の寫眞の寫眞を一紙に寫取度迄も被申候は祖山昇位は充分に企望ならんと想像候唯々一兩年間相延度と申事の様存候然に昇師一旦進山候上は修師は最早歴代相加候譯には不參哉とも被考候此處にて速に昇師引請開帳も相勤候は、極好都合に候得共一兩年代管長にて漸次晋山との事に候は、修師之處如何にも氣之毒に愚考候能、御考願度候尊師之決意相承其上大阪にて同師話に可及と存候故多忙中恐入候得共鳥渡一筆回答奉願候御心得迄老納巡回日割壹葉呈進候時下氣候頗不適爲法萬々自重 草卒頓首

五月十五日

日

薩〔花押〕

編者曰。愛知縣中島郡大和村茹安賀に三ヶ寺あり。

(清兮寺藏)



貫名日達師宛 明治十八年五月廿四日

一九四

愈清福至祝儀は老納巡回之儀に付過般來種々御配慮被下候段深令禮謝候陳は先般山田地方  
 へ鳥渡申進候通山田開堂供養延期に相成候へ巡回一ヶ月程引上げに相成候愈本月三十日濃  
 州大垣實相寺へ出發即日大阪に着し妙福寺に於て日昇師と協議濟次第乗船直に博多に着之  
 心掛に候就ては此程阿部日厚師へ博多着同所に於て而布教之旨申來候於老納も右様は至極好  
 都合と考候故其旨同所法性寺勝立寺に申遣候此段定而阿部聖へ御傳聞之事と存候既に一ヶ  
 月も引上げ候上は暑前に可成丈一ヶ處も多く巡回致度と見込候暑中は流川へ避暑相兼講釋  
 生徒教育相勤度とも考居候左候得は地方都合に差支も無之候は、博多布教後流川にて三四  
 日或は五六日も滞在し何れ歟便宜の地に隨ひ巡回布教致候方都合歟と見込候故猶篤と御勘  
 考被下何分之周旋に預度候何れ近日面晤可申と屈指相樂居候先は當用耳餘は讓面晤候 時  
 下爲法萬々自重 頓首

五月廿四日

日

薩〔花押〕

五月廿三日より廿五日迄

岐阜法華寺

同廿六七日

同 妙照寺

同廿八九日

大垣實相寺

同三十日

大垣發即日大阪着

大阪妙福寺に於て一泊或は二泊直様乗船博多へ差向候

編者曰。差出地岐阜法華寺。

〔永田慈明師藏〕

吉川日鑑師宛 明治十八年六月二日

一九五

五月廿五日華墨大垣實相寺に披讀不相替御病惱深御察申上候百事拋擲安心療養之場爲被致  
 存上候得は三十日法光寺開堂供養相濟翌三十一日發車四十八里間即日大阪へ着日昇師宿所  
 妙福寺に逗留即夜種々及協議候得共何分示談行届兼候翌六月一日逗留し凡そ五六回も義務  
 人情相兼且又老親老師之感情等之事實に老納交誼を盡し往々熟談中本人も既に落涙に被及  
 候得共依然承服に不到候六月一日には早朝に態々福田上人被尋候故同上人とも申合勸奨候  
 得共是又不行届候乍然福田聖と申合同聖歸山後速に三邨と打合せ兩名連署の書を以て宗務



代理被下度旨郵書にて申來候事に遺計し猶内々早川日悌も心配し昇師へ縷々勵契漸を以て可相運候様に取計置候得ば何れとか東上し御直談申上候様に爲被至候猶愈以東上有無之處は更に九州地方々不日に可申上候老衲の居催促も相盡候故本日午後第五時乗船し後事は竊に早川に申含置候大阪にて出船前に鳥渡申上度候得共種々應接分暇も無之候故船中にて相認候老衲之不辯遊説不相届遺憾不少候此段不惡御洞察奉願候 先は用事耳 草卒頓首

六月二日認

大龍丸にて

日

薩〔花押〕

編者曰。妙福寺住職早川日悌師。○福田上人、妙顯寺耀師。(清令寺藏)

貫名日達師宛

明治十八年六月十五日

一九六

愈清福至祝偕過日來遠方態々出張百事御配慮盡力周旋被下候段深令感謝候久敷他行之事故寺房檀務相嵩居嘸々繁忙之事と御察申上候老衲此度九州巡回之事に付而は深御痛心配慮難有御禮申上候折惡敷霖雨且農務中なり世上の不景況等にて巡回も如何哉と斟酌候處々八九月比迄は此地滞在に致候得共何分老衲意中安心無之候段は過日も鳥渡申述候通り今に愈不安心之相増候故都合に依而は東京方申來候事も候得は一先歸京とも存候得共九州を參り長崎も不見其儘歸關（つゞき）も不愉快に候故長崎方乗船と見込候故此教院本月廿五日方試験故右仕舞次第に出立直に貴境へ參度其上に因縁も候は、熊本も一覽致度清正公へも參拜致度と存候乍然強而相望候譯には無之因縁に相任せ候何に致せ本月廿七日比此地出立にて貴境へ參度候間此段可然御配慮願度候猶御面倒ながら一筆御回答願上候先は右願用耳百事面晤縷々可申候時下連日霖雨惱人 爲法萬々自重 草卒頓首

六月十五日

日

薩〔花押〕

編者曰。差出地流川本佛寺。

(永田慈明師藏)

頂岳龍觀師宛

明治十八年六月廿一日

一九七

愈清穆至祝其後は如何消光被成候哉と案し居候老衲事四月中東京出發し勢尾濃三ヶ國巡回濟み六月初旬に九州へ着し此節は此檀林に滞在し七月より巡回し大略九月末十月初には巡回濟に相成可申と見込候就而は歸路順次にも候得は廣島岡山縣下等も一巡回とも見込居候得共地方之事情更に不相分候間右巡回之可否有無等遠慮なく十分に見込御申越可被下候九州地方は長崎本蓮寺貫名日達始終隨伴百事取扱之事に候藝邊も因縁有之て巡回之事に候得



は貴聖御苦勞ながら先年の例に任せ前説相兼可然隨行被下度と見込候此段も回答被下度候  
○序に潮仙老へも宜敷致聲可被下候明年は北海道へ巡回の見込候 先は用事耳餘は其内面  
晤縷々可申候 時下連日梅雨爲法萬々自重 草卒

六月二十一日

日

薩〔花押〕

○  
本月中は此檀林に滞在し七月よりは熊本縣下巡回の事に候回答は七月より八月初迄は  
熊本本妙寺へ向け御遣可被下候其後は長崎本蓮寺へ向け御送可被下候 草草

編者曰。流川本佛寺内九州檀林。

〔廣島市高木正實氏藏〕

河合日辰師宛

明治十八年六月廿六日

一九八

愈清穆修行被成候半と至祝儀其後は度々貴書忝披見候得共不相替從老納は無音に打過候此  
度九州布教之爲に六月初旬に流川へ參暫時滞在候此より處々巡回の見込に候七月は長崎へ  
參本蓮寺に滞在の見込に候 ○其後小教院之處は如何に相成候哉時節も不良に候得は百事  
不如意之事と察候乍然此節人材養殖は目下之急務に候得は不相替周旋丹精肝要に候 ○亡

父母供養の爲に自我偈方便之假名訓讀本彫刻候故十冊別封に相送與候間志之信者に御遣可  
被下候尤施本に候間望之者も候は、須原屋に申遣可被下候遞送費のみにて何部なりとも施  
與可申候先は無音耳故疎濶之情相慰候迄通信候時下梅雨連日惱人爲法萬々自重 草卒頓首

六月廿六日

日

薩〔花押〕

編者曰。山嶋妙福寺宛。差出地流川村。

〔河合日辰師藏〕

貫名日達師宛

明治十八年六月廿六日

一九九

二十三日之華墨忝披讀且喜且驚候十五日投書後は屈指回答相待居候處何分回書も無之候得  
は如何哉と實は案事居候處此度之書翰にて宿霧相晴候之情況に候俄然貴境へ參着と申は實  
は難忍候得共別に好工風も無之候故甚迷惑ながらも參堂之上種々協議申度候故突然通信候  
處快く領諾は眞に欽喜に不堪候且又村上日等老御遣被下候との事懇情意外に出萬々忝芳意  
之程令感謝候何れ村上氏來着之上篤と協議し愈以出發之期日は電報にて通信可申候元式も  
其節は隨伴に召連可申候 ○儲驚候は急遽之御病氣之由也乍然次第に快愉にも可相赴哉と  
の事故少々安心は候得共此節時候不良に候得は可成丈御養生專一に可被成候何れ不日に面



晤可申と樂居候百事期其時候 時下梅霖未罷濕氣惱人 爲法萬々自重 草卒不宣

六月廿六日

日 薩〔花押〕

編者曰。此書差出地本佛寺。○村上日等。當時長崎市大浦誠孝院住。後廣島縣備後熊野村常國寺住。明治四十四年三月十八日寂、五十八歳。○元式。萩原氏。和上愛弟。當時流川檀林教師。本佛寺寓。 (永田慈明師藏)

河村日燈師宛 明治十八年六月廿九日

1100

愈清穆御務被成候段欣喜之至に候其檀林教師勤務被成不相替教授丹精盡力被成候事は爲法不過之と深令感謝候偕は老納九州布教に付幸便其地へも可相廻候旨は豫而通丈老よりも東京迄通信候故此程同人宛にて老納同意其地一應視察相兼其檀林へ參度旨申遣候得は猶更此度態々貴聖より廿一日附に而申越に候得は九州歸途參檀仕度と見込候故不取敢此段回答候尤も此地布教濟日限之程何分未定に候大略十月前後にも可相成哉と考候今少々も相後れ可申哉難計何れ後便八月中には確定之期日可申通候因縁有之候而巡回候節は元來不受派葛藤已來之事情も有之候得は一層注意布教も致度と耳懸念候其節何分可然周旋可被下候乍末筆御師範始一同寺院中へ別紙同様御通聲願上候時下梅雨連日頗惱人爲法萬々自愛 草卒不乙

六月廿九日

日 薩〔花押〕

文靜等は目下熊本地方佛教演説に赴請不在候故無音候 草々

編者曰。御師範とは印日量師、時年七十七。○河村燈師字隆惠、舊姓印、逸見通丈師と共に大檀林に學ぶ、後、妹尾盛隆寺より庭瀨不變院に隱居。宗會乙部の初代議長。今の姓は河村。昭和十二年八十六。健在。 (河村日燈師藏)

貫名日達師宛 明治十八年六月廿九日

1101

遠方殊に大雨中態々院代御遣被下候段芳意不淺深令感謝候右邨上同道にても老納之心中に候得共目下隨身三名とも熊本にて七月五六日比迄演説と申事此も可相成は中止無之様致度と存候得は本月七八日之内船之都合にて出立乗船之事に取定候東京歸之事も又々因縁巡回之事も種々事情も有之候得は面晤に無之而は到底難通候故何れ近日參着之節縷々可申陳候明氏も七月八九日比出港之心得に而今朝歸寺被致候右等之事は村上へ御尋聞可被下候幸唯進老參堂之折故同人も長崎迄御先導可申と申居候愈出立乗船等之事は久留米へ電報通信可申候吳々も院代御遣被下候段は深令禮謝候偕又貴聖病魔は如何に候哉此雨霖にては不宣哉



と深案事候折角療養可被成候猶信徒一同へも幸序御通聲可被下候貴寺は勿論長照寺に於何  
日間なりとも都合説教も相勤度と存候故可然御配慮可被下候滞在中に本尊抄講釋も致度と  
も見込候御含にて可然取計被下候餘期面談候時下爲法萬々自愛 草卒頓首

六月廿九日夜

日

薩〔花押〕

編者曰。此書は村上師持參と見ゆ。○村上日等師、大浦誠孝院。○明日靜師、筑  
後尊壽寺。(後記)○唯進、藤田唯進師、大檀林に學ぶ。後に片瀬常立寺。

(永田慈明師藏)

吉川日鑑師宛

明治十八年八月四日

二〇二

六月二十七日並に二十九日華墨從流川傳達本蓮寺にて拜讀七月十一日芳書十九日朶雲同寺  
にて披讀御病惱は増不宜候由深痛心仕候且又三村聖往復書寫日昇師往復書寫とも逐一拜覽  
仕候只、事支吾候耳歎息之外無之候就は斷乎御見込有之候旨御申越是又無據勢也と察上候  
只、緩々御運被成候事可然哉と見込候補處不得其人之時は一宗の不幸無量ならむと奉存候  
歸山後は定而在京中之疲一時に湧出病勢幾分之増加と奉存候爲法自重保齋 ○老衲事先、  
無事消光何分此地炎熱昨今は九十七八度に上り晝夜苦熱候故暫時巡回中止本月廿八九日比

さては本蓮寺に滞在之事に候 ○小僧之儀毎々高配に預深奉謝候先回御申越之節に鳥渡御  
禮可申上之處不相替失忘欠敬海恕奉願候親は盲人故唯々愚痴耳該人之申事は御心頭に無之  
様奉願候實は本年四月老衲彼地へ參候節も縷々從本人申立も有之候得共度外に相置候畢竟  
は小僧の本人さへ有之候は、爲法爲人とも可然と存候也 ○大檀林も是純來着後は漸次に  
自他共増進之由大に安心候猶此上とも時々御策勵奉願候老衲歸京は歳末にも可相成哉と存  
候此比岡山縣下諸寺院も歸路巡回頻々申出候萬事因縁次第に可致と存候時下暑甚暑甚  
萬々自玉 草卒頓首

明治十八年八月四日

日

薩〔花押〕

編者曰。長崎本蓮寺、貫名慈航師、後岩本貫主。○是純、小林童師。(清令寺藏)

野口之布氏宛

明治十八年八月十日

二〇三

愈清穆至祝偕は其後旅中故乍存遂々御無音に打過候段海恕奉願候老衲事無異巡回布教候事  
御省慮可被下候甚粗品に候得共此地へ參候驗さては兩種呈机下候叱留被下候は、過望之至  
候老和尚碑文は御成稿に候は、來示奉願候本月中は長崎に滞在候十月比には熊本本妙寺に



滞在之見込に候本年歳末には歸京と見込居候此度文靜歸京に付托幸便草卒註書時下暑氣甚當地は大略九十七八度に候 折角自重是祈 恐々頓首

八月十日

新居文嘉

編者曰。和上長崎本蓮寺滞在中。○老和尚は優陀那院上人也。(長元寺藏)

三村日修師宛 明治十八年八月廿六日

二〇四

謹啓愈御清穆至祝過日呈書後屈指慈教相待居候得共因縁未熟歟鳳聲不相承失望此事に候四五日前日鑑師(修師失考 東の字ならん)來狀云西京之議論大に變換し日修上人身延進山替(マヤ替)成人多々且又本因補處は小林是純老と内決之由と有之候右は宗門之幸福何事歟過之乎深隨喜仕候左すれば先般老納の心得鳥渡申上候は舊貫に相仍候故此は御聞流に相願上候此も一時の策進適宜也彼も宗門後來策進也兩事之内日鑑師之傳聞は眞の釐正に奉存候野納の具申は一時の便とのみ申上候迄也定而高慮決定之處聊御漏可被下候 ○老納此地に六十日間避暑滞在愈明廿七日出立大邨地方々漸次巡回の見込に候三界皆故郷其中衆生悉信徒遊化三千里幸に瓦全御省慮奉願候出京後百四五十日に相成候得共一日の病惱無之近年稀の無事生に候全く心頭に煩勞無之故

と信候明年は御面會申上度と樂居候若や冥途に候哉其段は難計候得共何れに也會面可有之と樂居候耳時下殘暑猶甚爲法萬々自重自愛 草卒頓首 御鳳書は本蓮寺へ向て御遣可被下候 草々

八月廿六日

日

薩(花押)

編者曰。和上、長崎本蓮寺留錫中。

(故冷泉要惇師藏)

貫名日達師宛 明治十八年八月卅一日

二〇五

愈清穆至祝偕は先達中は六十日間永々滞在始終不相替如一日厚待優遇實に芳意不淺候段深令感謝候其餘院内大衆一同無疲倦色供給之段是又忝相心得候幸序可然傳聲被下度候且又檀方一同へも厚御禮言被下度候 ○松本氏小兒は終に養生不相叶候由愁傷之至に存候法號御通知可被下候 ○朝鮮布教之件は一昨日宗務院へ貴聖々事實取調巨細上申之旨申遣候間可成丈早々上申可被下候 ○此地布教巡回は意外に盛大に候其實況は長谷川老々御聞取可被下候大邨寺院何れも深切に彼是奔走百事都合宜敷此段省慮可被下候 ○老納老後日々に忘却耳多々困々出立之際老納滞在之二階に沙彌校規則並に會員簿送金簿小本白紙摺にて雜誌



體に仕立候三四冊遺落候故御見當に候は、御郵送被下度候若や二階の戸棚に有之候哉とも  
相心得候何にもかも老耄耳慚愧々々 ○其地流行病増盛之由深痛慮候讀經專務肝要に心得  
候 ○清淨結社之儀機會不相後早々實施深及依頼候先は過日來禮謝旁當用耳餘は後音又々  
可申候時下昨雨少々新涼爲法萬々自重 草卒頓首

八月三十一日

日

薩〔花押〕

編者曰。差出地、大村。○松本氏小兒、松本武八郎孫、善三郎、明治十八年舊七月十九日歿、一歳。  
(永田慈明師藏)

貫名日達師宛 明治十八年九月九日

二〇六

本月兩回之華墨忝披讀面晤之心得にて喜候侪は貴地流行病増盛之由深御案事申候乍然宗門  
之人には稀少之由大慶不過之と喜候祈禱加持等殊之外多忙之由是又一時衆生濟度之不得止  
之善事と存上候縷々申越之件々大に旅情相慰候厚意忝令禮謝候 ○沙彌校規則書等之事大  
に煩勞相懸氣之毒に存候實は同校入會の社員誰々なりや分兼候故右會友簿一名入用に候事  
に候乍然此地等にては會友へは豫て本會々右等配布に相成居候故此地にて用辨も可申間爾

後は御配慮被下間敷候 ○勉秀事は實に愍然之至に候早速回向候實は彼の自業自得之罪業  
とは謂なから憫傷之至に候就ては彼に反對黨之者は之を佛罰などと誹謗言を申も難計候右  
は十惡の一即ち惡口の罪業相作候事と深案事候苟も清淨結社たるの人々は一心清淨に菩提  
の志念のみ肝要に候提婆は釋尊に敵すれとも釋尊之を惡口罵りせじ爲念信徒に御教訓可被  
成候彼一時の墮苦故中有は如何哉と想像候得は落涙相催候耳萬事實意肝要に候長照寺後職  
も自他彼此の偏黨なく彼等どもの心も推し人々の心服肝要に候 ○明日靜も元來教院等の  
事には數年來丹精有之候故何れの寺跡にても相當之處は配慮も有之度ものと相考候 ○巡  
回日割別紙御心得まてに廻置候諸方々書狀も候は、可然乍面倒御廻可被下候先は用事耳時  
下惡時候爲法萬々自愛 草卒不宣

九月九日

日

薩〔花押〕

編者曰。勉秀、長照寺、急病にて急逝。○明日靜、廣泉院日靜。字良明。明氏。  
筑前博多人。年甫九歳。從福岡香正寺日遂難髮。遊東山檀林。主香正寺。移豐前  
大法寺、住肥前妙玉寺。明治中興。爲諸宗中教院講師。轉筑後尊壽寺。九州檀  
林之成。與有力焉。明治二十八年。宗會議員。選爲朝鮮布教師。因其獻策也。  
辭之。其七月三十一日、没于大阪常國寺。壽六十一。(山田良雄記)